

丹波



関西丹波市郷友会会報

第7号 2022.11.1

奥丹波蔵元 山名酒造

当家は元々源氏の総大将、頼朝に付き従った関東武士で、室町時代に応仁の乱で京の都を騒がせた山名宗全の血筋。その後、一族内の争いを逃れて領地を離れ、春日町の興禅寺付近で船川姓に変えて潜んでいたが、一七二六年（享保元年）に現在の市島町上田の地に移り、元の山名姓に戻したのが遠祖の始まりと伝わります。

蔵にある古文書のひとつに、天皇が即位した大嘗祭に奉納米を献上し、宮中から賜った「宝船」を描いたものがあります。カミダ（上田）は神田の呼称が転じたとも言われ、このように稲作に恵まれた環境のもと代々酒造りを生業にして十一代目、創業以来三百有余年となります。

江戸時代までは「千歳」、明治維新になり「萬（万）歳」、そして平成に入って「奥丹波」と酒銘を変えて仕込み続けて参りました。



奥丹波

たなばた

関西丹波市郷友会会報

第7号



目 次

コロナ禍乗り越えて	公江 茂	3
会員だより		6
新生関西丹波市郷友会に期待	池畑廣士郎	9
「人類は再び月へ、そして火星へ」	田邊宏太	10
上田元彦さんが語る	芦田敬一	14
海外各地に商品出荷	大地 但	18
利用者の笑顔を力に	藤井亜郎	21
異国の教壇で自前の研修〈下〉	石田里加	24
陸上競技に魅せられて	大西伸弘	28
大村崑さんのお母さん	芦田敬一	31
国民的レジャーの魚釣り	篠倉庸良	34
木と関わり、生業としてきた者の使命	足立栄逸	40
丹波で泌尿器科医として32年	松下全巳	44
丹波市美術作家協会誌上ギャラリ―	磯尾隆司	47
― 足立慎治・田中利明・足立進 ―		
「ふるさと」に恩返し	足立厚郎	51
観光の玄関として大役担う	柳川拓三	54
.....		
国際化の波受け活動を充実	山口直樹	57
「ミライズそら」開園に携わって	山口洋子	61
山南統合中学校開校に向けて	荻野圭裕	69
ひょうごラジオカレッジと私	余田正博	72
地域の小規模事業者と共に	大木玲子	75
私らしく生きる	近藤紀子	78
「おかげさま」 忘れずに	足立はるみ	81
夢広がるかいばら雛めぐり	荻野真知子	83
74年の地元劇団	荻野祐一	86
木食上人の即身成仏	竹内 脩	89
セツボンソウ	梅垣守明	91
三尾山麓のイヌザクラ	梅垣守明	92
編集後記		94
広告目次		95
表紙 三尾山麓のイヌザクラ		
題字(表紙・中扉)	荻野丹雪	
写真(表紙)	松本義明	
カット(中扉ほか)	奥野隆之	

コロナ禍乗り越えて

関西丹波市郷友会 会長 公江 茂



田秀雄氏まで錚々たる方ばかりで、そのような方々のあとを担うことになり身の引き締まるおもいです。第五代会長の荻野益三郎氏は大阪高裁長官を務められた方ですが、武庫川学院を創立した公江喜市郎とは同郷の芦田村出身で、喜市郎より一歳下でした。こ

めております。喜市郎は私の祖父にあたり、「これからは私（喜市郎）に代わって郷土へ恩返ししてほしい」と後押しされたように思い、縁を感じています。

伝統と素晴らしい実績を有する「関西丹波市郷友会」の会長をお引き受けして間もなく一年が経とうとしています。あらためまして自己紹介を兼ねてご挨拶させていただきます。

んな関係から喜市郎は学園経営の資金難に直面した際には大変なお力添えをいただいたようで、郷友会の記念誌へ寄稿した一文や著作にもそのことが記されています。私も学業を終えてすぐ武庫川学院に奉職し女子教育に携わってまいりました。現在も特別顧問兼監査室長として勤

郷友会の目標は丹波の青少年の健全な育成、そして地域で、世界で活躍できる人材を輩出したいということです。これは創立以来変わらぬ理念でもあります。前会長は七年間にわたって郷友会の活動を牽引し、二〇一九年の創立百二十周年事業を始め多くの実績を遺されました。後半にはコロナという災難に見舞われ、総会も中止になるなど大変な苦労をされました。今年になりましたからもロシアによるウクライナ侵攻という暴挙が勃発し、いまだに戦火が止む気配はありません。我が国もその影響を受けガソリンや天然ガスの確保に苦勞し、多くの物の価格が上昇し我々の生活を脅かしていることも新聞・ラジオが連日報じているところです。

約二十年前の郷友会にはおおよそ三百数十名の会員が名を連ねておられました。現在は半分の百五十名にまで減少しています。こうした状況から、会報の発行やたんば合唱団への支援金支給以外に柱になる育成奨学支援、奉仕活動などの活動が途絶えています。長引くコロナ禍は会の運営にも支障をきたすことが多く、会員の方からはその存在理由を問われることもあり、忸怩たる思いを感じています。

このようななか希望の灯りもありません。百二十周年の事業で行った「すくすく大賞」事業です。コロナ禍で中断していましたが、あらたに「わくわく大賞」として復活させ、三年、五年と評価し継続する事業に次年度から取り組みます。さらに今年十二月には書面決議ではなく皆様にご出席願うリアルな総会をこの丹波で開催したいと考えております。先人が苦勞と努力を重ねて継続してきた郷友

会活動をここで中止するわけにはゆきません。

丹波には世界の各地から珍しい花を輸入し、ブリザードフラワーとして出荷するユニークな企業や、神社・仏閣の建築や修理に欠かせない檜皮葺の職人集団などのすぐれた文化・技術があります。さらには豊かな自然があり、限らない潜在能力と可能性を秘めています。こうした有形無形の文化・技術を応援することも活性化への有力な方法ではないかと考えています。我々の理念・理想を実現するためには一人でも多くの賛同者、支援者が必要です。このため会の活動を周知し、新規入会者への案内、協賛金をお願い、さらには会員間のネットワークを進めるためにホームページの開設並びに法人格への検討も始めています。

こうしたことは役員の皆さんと協議しながら進め、会員各位のご意見もお聞きしながら、また地域の要望等も反映でき

る仕掛けも取り入れたいと考えております。かけがえのないふるさと丹波発展のため誠心誠意取り組んでまいる所存です。なにとぞご理解をたまわり、一層のご支援ご協力をお願い申し上げます。

一般会計 収支報告書

2021年1月1日から2021年12月31日まで

単位:(円)

支出の部		金額	収入の部		金額
総会費	印刷、コピー、消耗品代	7,822	総会費		
	郵送代	36,127			
	小計	43,949		小計	0
会報発行費	印刷製本費	459,690	会報発行費	広告代(第6号分)	257,000
	デザイン料	15,000		1件辞退により返却	△ 20,000
	郵送代	51,314			
	印刷、コピー、消耗品代	3,729			
	小計	529,733		小計	237,000
役員会費	役員会費用	29,403	会費	年会費 令和2年分	93,000
	小計	29,403		令和3年分	252,000
広報費	広告代(丹波新聞社)	176,000		令和3年分寄付金	7,000
	FMたんば 団体会費	36,660		振替手数料	△ 21,428
	小計	212,660		小計	330,572
事務費	事務局謝礼	10,000	雑収入	預金利息	5
	事務コピー・消耗品	20,941		小計	5
	郵送代	19,980			
	振込手数料	6,050	繰入金	賛助金会計より繰入	500,000
	賃料	2,772		小計	500,000
	小計	59,743			
賛助金	賛助金会計へ繰入	70,000	賛助金		70,000
次回繰越		725,204	前年度繰越資金		533,115
	合計	1,670,692		合計	1,670,692

賛助金 収支報告書

2021年1月1日から2021年12月31日まで

単位:(円)

支出の部		金額	収入の部		金額
支出金	少年少女合唱団祝儀、手数料	31,520	賛助金収入	賛助金	80,000
	FMたんば 団体会費	500,000			
	小計	531,520		小計	80,000
次年度繰越金(賛助金運用)			利息等収入	預金利息	643
	定期預金	30,000,000			
	普通預金	5,007,104			
	小計	35,007,104		小計	643
			前年度繰越資金		35,457,981
	合計	35,538,624		合計	35,538,624

会員だより

会員の方々に、近況についてお知らせ
頂きました。

(敬称略)

☆足立直正 (川西市)

我が家近くに矢間農園やまのりぞんがあり、1区画
24㎡を借り、家内共々野菜作りにがん
ばっています。ここ多田地区には多田神
社、多太神社、九頭大明神、こんにゃく
橋、銀橋等々あり、ウォーキングコース
に入れ、一日6000歩をめざしていま
す。最近、丹波新聞を週2日届けていた
だき、丹波市のニュース、歴史、文化、
イベント等々で、氷上町ですら十分に知
らない私に、楽しい旅をさせていただい
ている思いです。「元気が一番」と強く
思う日々です。

☆有田秀雄 (宝塚市)

今思うに、①多様性の尊重、②お金で
は絶対買えないものの大切さ。私生活で
は人を愛し自然を愛する「一日一善」日々
感謝。

☆上田正三 (神戸市)

神戸と丹波を行き来して、元気に暮ら
しています。最近、丹波の家を整理して
いたら、第四十五回関西氷上郷友会総会
(昭和17年5月18日、於甲子園ホテル)の
写真が出てきました。上田確郎(祖父)、
上田要(祖父の従弟)が中央に写ってい
ます。昭和53年度関西氷上郷友会会員名
簿も出てきて、上田宏(父)、上田正三
(私)の名前があります。郷友会とは、明

治時代から三代に亘ってのご縁ですの
で、どうぞよろしくお願いいたします。

☆FM805たんば

FM805たんばは丹波弁を聞くこと
が出来るFM放送です。また聞いて下さ
い。CM(企業)もよろしく願いま
す。

☆大槻佐知子 (丹波市春日町)

この度、先輩たちが培ってこられ、1
20余年の歴史あるこの会の副会長を命
じられ、身の引き締まる思いです。新鋭
公江茂会長のもと、微力ですがお役に立
てますよう努力する覚悟です。もうすぐ
会のホームページも立ち上がる予定で
す。一人でも多くの方に、この会の趣旨
をご理解いただき、賛同いただきました
ら嬉しいです。会員の皆様の忌憚のない
ご意見、心よりお待ちしております。

☆大西伸弘（丹波市青垣町）

皆様お元気でしょうか。対面でお会いする機会が少なくなり、他者とのかわりのお互いの大切さを痛感しています。関西丹波市郷友会が益々発展されることを願っています。

☆岡田邦夫（丹波市春日町）

野菜づくりで元気に取組んでいます。大関松三郎の詩にあった「やかんでトックントックン水を飲む」光景に似た生活をしています。何の気もせず元気に働けることに感謝する毎日です。

☆亀井 剛（丹波市柏原町）

72才になりました。丹波市で一番大きな南多田自治会（800世帯、約2000人）の総代をしております。コロナ禍ですが、「人と人、みんなでつなぐ南多田」をスローガンに、地域の為に頑張っております。いつもありがとうございます。

☆田中なほみ（丹波市氷上町）

8年前より月2回、宝塚のフラダンス教室に通っています。先生の豊かな感性と指導力、すばらしい仲間との出会いは、私の宝物になりました。先生のご厚意で縁あり、5月より「フラサークル・たんば」を開講することができました。月2回、40代〜80代の異年齢の交流を楽しんでいます。2時間が終わると次回が待ち遠しい毎日です。

☆谷口進一（丹波市柏原町）

お誘いいただき、本年より参加させていただきます。現在、社会福祉法人「恩鳥福祉会」（柏原）のお手伝いをさせていただいております。この歳（69歳）にして初めての分野で、新たな気づき・社会貢献できることは幸いです。どうぞよろしく願います。

☆仁藤欽嗣（西宮市）

7年前より「FPIC」で親子の面会交流支援等のボランティア活動に注力しています。又、「六十の手習い」ならぬ「七十五の手習い」で始めた、「詩吟」の楽しさにはまっています。これからも体力の続く限り、続けていきたいと思っています。これまで、会報誌「たんば」の編集委員を務めてきました。今後は公江新会長の元、歴史と伝統ある関西丹波市郷友会の一層の発展に微力ながら尽くして参りたいと思っています。

☆廣瀬紀明（西宮市）

現在、西宮美術協会に所属しています。会員70名の団体で、私は副代表をやっています。2019年度までは年3回ほどのイベントを実施してきましたが、新型コロナウイルスの感染拡大で展覧会を中止せざるを得ませんでした。昨年から感染防止に留意しながら展覧会を企画・実行して

います。そして、また今年是个展(大阪)やグループ展も実施すべく、大小の作品の制作を始めています。今は「SPACE」シリーズで宇宙をイメージしながら、「空間が生きている」を表現すべく試行錯誤、四苦八苦やっています。機会がありましたら見ていただき、コメントをいただければ幸いです。

☆安田真理

令和4年3月より関西丹波市郷友会に入会させて頂きました安田と申します。仕事は印刷物のデザインとスクラップブックのインストラクターをしています。会報誌「たんば」に掲載されている皆様の素晴らしい活動を拝見し感動しました。また、丹波市教育委員として「丹波わくわく大賞」などの取り組みを、保護者や子どもたちに伝えていきたいと思えます。今後ともよろしく願います。

☆山口直樹(丹波市氷上町)

御陰様で元気にすごしています。コロナが終息して郷友会の総会が出来、ふるさとの青少年の活動を支援するイベントが出来ると願っています。

☆山名純吾(丹波市市島町)

120年の歴史を礎(いしずえ)に新たな世界へ！ 未来を若者が希望を持つる時代となりますように。

☆吉居寛子(滋賀県)

昨年寄稿させていただいた吉居です。昨年3月に退職をしました。コロナ禍でなかなか身動きができない状況でしたが、本年度はワクチン接種も進み、感染対策をしながら活動ができるようになってきました。私事ではございますが、本年11月に氷上町の円通寺のもみじ祭にあわせて彫刻展を円通寺本堂にて開催させていただきます。紅葉の季節にあわせてご高覧いただければ幸いです。

☆吉見弘文

既にご連絡さしあげておりますが、諸般の事情により貴会を「退会」させていただきます。永年にわたるご交誼に感謝申し上げます。

☆余田正博(丹波市市島町)

先日、黎明館で荻野祐一氏による講話で、初めて女子教育を興した二人の偉人の話を聴き、感銘を受けました。OB大でも丹波偉人伝をよく聞かせていただいております。すでに亡くなりましたが、父は中学、母は女学校卒で、私も、家内も子供3人いずれも柏原高校卒です。先人の偉人伝を聞くにつれ、誇らしく感じています。しっかりと歴史を学ぶことにより、先人に恥ずかしくない人生を送りたいと思っております。

新生関西丹波市郷友会に期待

地域を巻き込むビジョンを

常任理事 池畑廣士郎

故郷を思う気持ちから、遠く離れて住む人たちがほど郷愁の念に駆られるのは当然のことである。日本各地で郷友会と名乗る会は無数にあり、日本の地理的中心の東京にはその存在が顕著だ。我がふるさと丹波も然り、関東郷友会（きょうゆうかい）が故郷を思うオアシスになっている。彼らにとって仮に年に一度の帰丹であつても何事にも代えがたい心の癒しであろう。だがそれも時代の変遷で丹波

で生を受けた丹波人から、両親や親族が丹波生まれの縁のものたちにはそれほど感傷があるとは思えないが、それはそれなりに血のつながりを求めるノスタル

ジアがある。それが逆に集まりを強固にしているように思える。

このたび関西丹波市郷友会が公江会長を中心に新スタッフで船出した。コロナ感染の状況下での出発は通常よりはるかに水面下での心配りを要し気苦労の多さを感じる。と同時に今までの関西丹波市郷友会が活躍してきた丹波つながりの阪神間を中心とする関西での活躍とは明らかに動き方に違いが見受けられる。新生関西丹波市郷友会は理念は変わらずとも丹波地域全域をも巻き込む新たなビジョン、指針が必要だ。また会員の増強もそのような配分になってくる。だから

何が変わるかという問題でなくこれだけの基礎を作り上げた先人の知恵を十分に享受し、滋味豊かな心温まる会づくりに邁進してほしい。

時代の変化とともにこれからは丹波も郷友会のメインステージであるべきだ。

AIを中心としたイノベーションが先行し殺伐とした感性の時代であればこそ、新生関西丹波市郷友会は丹波つながりのオアシスでなければならぬ。

（柏原町在住）

「人類は再び月へ、そして火星へ」

夢が実現に向かう宇宙探査

国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構国際宇宙探査センター

宇宙探査システム技術ユニット技術領域上席 田邊 宏太

皆さんは「アルテミス計画」をご存じですか？米国が主導する有人月探査計画で、2024年に有人月面着陸、2028年までに月面基地建設を開始するのでしょうか？米国が主導する有人月探査というものです。アルテミスはギリシャ神話に登場する月の女神でアポロの双子とされています。



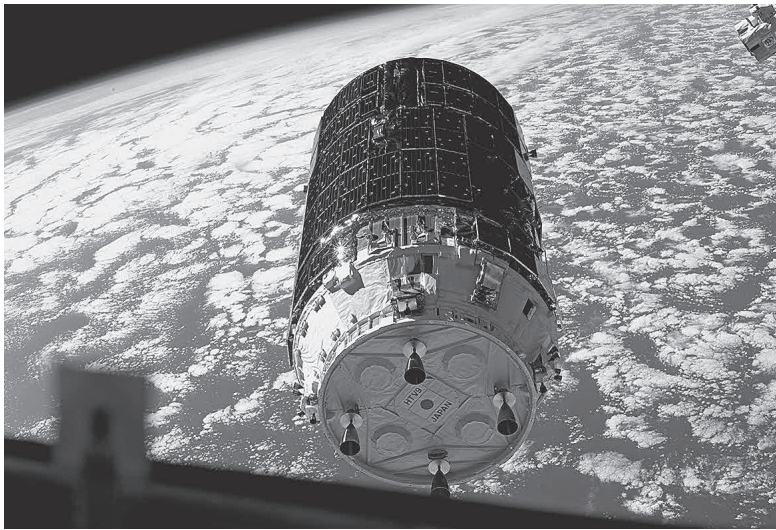
このとり7号機のプレス説明で
©JAXA

1969年7月、アポロ11号に搭乗したアームストロング船長が人類初の月面着陸を果たしてから50年以上経過しましたが、人類は再び月面に降り立とうとしています。

アポロ計画が進められた当時の時代背景としては、冷戦下の米国とソ連の宇宙開発競争という側面が強かったのですが、アルテミス計画では様相が異なり、特に国際パートナーや民間企業との協力により進められていることが特徴的です。日本も2019年にアルテミス計画への参画を決定、その中での役割として、月周回軌道上に建設される「ゲートウェイ」と呼ばれる宇宙ステーションの居住モジュールの開発、ゲートウェイへの物資補給、トヨタ自動車と共同で行う月面探査用の有人圧ローバーの研究開発などが挙げられます。また、日本人宇宙飛行士の活躍の機会についても調整が行われています。昨年末、政府の宇宙基本計画の工程表が改訂され、岸田首相より「2020年代後半には日本人宇宙飛行士の月面着陸の実現を図る」との表明があり、JAXAも13年ぶりに新たな宇宙飛行士の募集を開始、過去最多4127人の応募がありました。来年2月頃に最

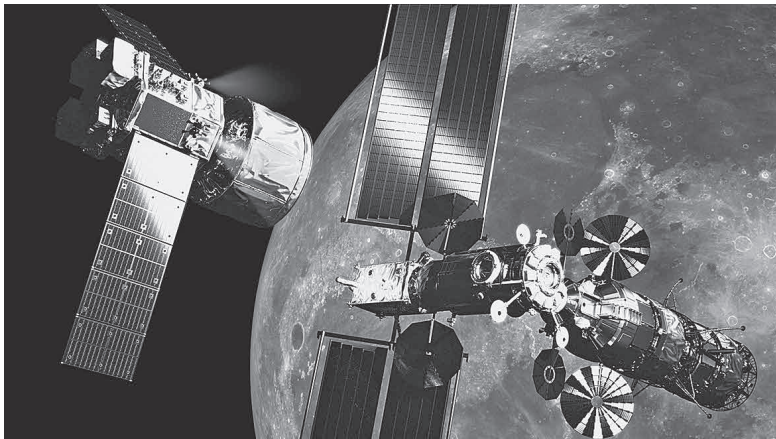
終選抜結果が判明する予定ですが、日本人初の月面着陸が実現する日も近いと思います。

私は現在、JAXA国際宇宙探査センターに所属しており、アルテミス計画に



このとり9号機がISSに接近する際にISSから撮影
©JAXSA

関連する月探査計画やさらにその先の火星探査計画に関する様々なプロジェクトの立ち上げに向けた検討を行っています。月も火星も新たなフロンティアとしての有人探査活動を見据えたものであり、世界の中で日本としてどう貢献し、



このとりの後継機となる新型宇宙ステーション補給機が月周回軌道上の宇宙ステーション「ゲートウェイ」に接近するイメージ図
©JAXSA

実現していくのか、目の前にある様々な課題に真剣に向き合う毎日です。

私自身のこれまでの経歴を紹介したいと思います。1971年1月に北海道に生まれ、幼少期はサラブレッド(競走馬)の産地として有名な日高地方で過ごしました。当時「走れコウタロー」という歌がヒットし、4歳年上の兄がよく歌っていたとのことで私の名前の由来となりました。父親の転勤で丹波に引っ越したのが5歳の時、北海道での生活の記憶はほとんどありません。高校卒業までを丹波で過ごしましたが、たくさんの思い出があり丹波は私にとっての故郷です。

高校卒業後は大阪大学基礎工学部に進学しました。大学のキャンパスが豊中市にあり伊丹空港がすぐ近くです。少年時代から空や飛行機に興味があり、世界中を飛び回るパイロットに憧れたり、鉄の塊がなぜ空を飛べるのか不思議に思った

りしていました。大学4年生から配属された研究室が人工衛星用の小型ロケットを研究していたこともあり、徐々に空を超えて宇宙を生涯の仕事として意識するようになりました。

1995年に宇宙開発事業団（現JAXA）に入社、当初は様々な人工衛星の追跡管制の業務に従事しました。人工衛星の追跡管制は飛行機の航空管制と似たような仕事ですが、飛行機と異なり衛星にはパイロットがないため、地上の管制室で衛星の状態データを監視しつつ、所望のミッションを実行するための指令データを送信します。新人時代に担当し特に印象に残っている衛星が1997年に打ち上げられた技術試験衛星VII型（ETS-7）、愛称「おりひめ・ひこぼし」です。この衛星はチェイサ衛星（ひこぼし）とターゲット衛星（おりひめ）の2機の衛星から構成され、2機

が結合した状態で打ち上げられた後、宇宙間で分離し自動操縦により接近・ドッキングを行うランデブ・ドッキング実験を主要なミッションとする衛星でした。

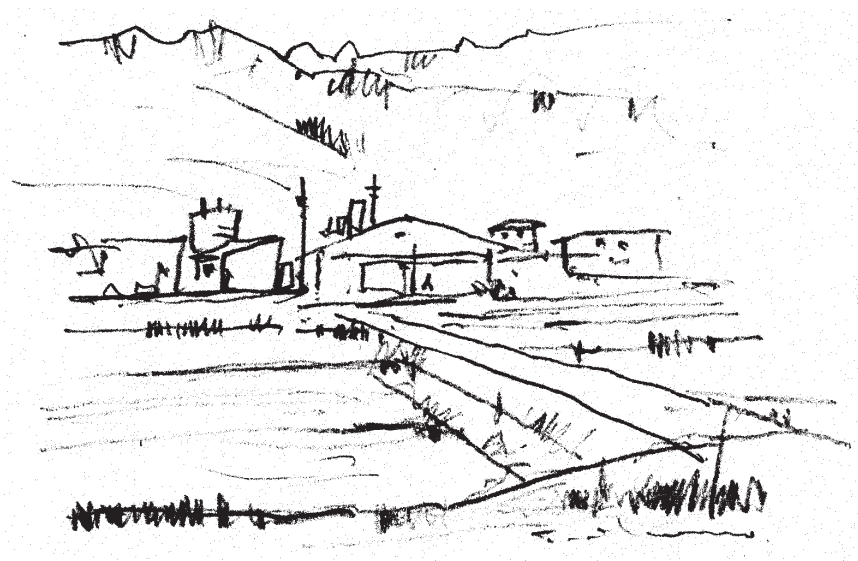
「おりひめ・ひこぼし」で開発されたランデブー技術は、その後宇宙ステーション補給機（HTV）の開発に引き継がれ、私も2005年からHTVの開発に従事することになります。国際宇宙ステーション（ISS）への物資補給の1翼を担うHTVの開発は苦労の連続でした。技術的に難易度が高いことはもちろん、クルーが滞在する有人施設であるISSを管轄するNASAからの厳しい安全要求をクリアしなければなりません。先行して開発されていた日本実験棟「きぼう」とは異なり、HTVは自ら飛行する宇宙船なので、特にクルーの生命を脅かすISSへの衝突を避けるための設計や検証に多くの検討・調整が必要で

した。2009年9月、HTV初号機は見事にISSへの物資補給ミッションに成功、NASAははじめISS計画に参加している国際パートナーからも非常に高い評価を受けて、それまでの苦労が報われた瞬間でした。その後HTVは「このとり」という愛称を授かりました。丁度同じ頃に丹波を走る特急「北近畿」が「このとり」に愛称変更されましたが、丹波出身の私にとって不思議な縁を感じずにはられません。以来、宇宙船「このとり」は2020年に打ち上げられた9号機まで、11年に渡り計画された全てのミッションに成功しました。私自身も通信装置の開発、フライトディスプレイ（7号機で飛行実証）の開発責任者など、長年に渡り「このとり」の業務に従事したことで技術者の一人として鍛えられました。

再び宇宙探査の話題に戻ります。
いと思います。

(茨城県つくば市在住)

2022年5月、「日本の国際宇宙探査シナリオ(案) 2021」が公開されました。これにはJAXAが提案する将来の宇宙探査シナリオが説明されています。本文は760頁ほどあり読むのなかなか大変ですが、別冊として8頁にまとめたExecutive Summaryもありますので是非ご覧下さい。ここで皆さんに伝えたいことは宇宙探査活動が決して夢物語ではなく、実現すべきものであるということ、人類の活動領域を拡大することは歴史上の自然の流れ、本能とも言えるかもしれません。アポロ11号が人類史上初の月面着陸を果たした時、私はまだこの世に生まれていませんでしたが、今から数年先の有人月面着陸の再開、日本人初の月面着陸はもちろん、その後の月面基地建设、さらには人類史上初の有人火星着陸の瞬間を見届けられるよう、精一杯努力していきたく



「父要、祖父捨蔵」

上田元彦さんが語る

副会長 芦田敬一

「これはオヤジの字です。確かにオヤジの字です」古びた、手紙を横に広げながら元彦さんは言われました。「えーと、

——柏原銀行の退職にあたり——公私ともどもお世話になり——京阪神の人々は——」実のお父さんの手紙でも、昔の人の字は読み切れません。そして、「オヤジはいつも」と言っ

て、「このように書いて、次から次へと下に垂らしていくのです」と右手に筆を持ち、左手に紙をのせる仕草をされました。この手紙は、私の曾祖父の蘆田廣蔵の引退に際して元彦さんのお父さんの上田要（かなめ）さんより、昭和10年にいただいた手紙です。

その話が終わってから上田元彦（東京都在住）さん、上田正三（神戸市在住）さん、私（尼崎市在住）の丹波人三人の歓談が始まりました。

上田家のこと

上田家は、鎌倉幕府の政所の初代別当の大江広元を祖先の一人に持ち、代々の丹波市春日町棚原に居を構えています。江戸時代の末期に、本家以外に、北上田、東上田、西上田が別に居を構えしました。正三さんは本家出身、確郎さんは、祖父に当たります。元彦さんは北上田です。元彦さんのお話では、「お盆には一

族が御本家に、羽織、袴で集まって仏さまをお迎えに行くのですよ。確郎さんを中心に、桶に水を持っていくのです。田舎では風物詩でしたよ。その後にお寺で正座での話ですよ。子供も正座で痛かったですよ」このように、同族意識と祖先を敬う気持ちが非常に強く、この風物詩は戦後まもなく、中止になったそうです。

父、要さんのこと

「オヤジは、家計を助けるために、親戚に当たる京都の曾野さん（株式仲買人、後に京都証券取引所理事長）宅に下宿をしました。朝は4時に起きて永観堂で近藤亮巖の話聞いてから朝粥を食べて、勤め先の（旧）名古屋銀行の京都支店に行くのです。会社が終わってから、高谷簡堂塾や京都組合銀行講習所などに勉強していくのです。後から、あんたの親父は、成績が抜群によかったとよくいわれまし

た。銀行講習所に成績表が残っているようです」そして、先程の旧名古屋銀行が大阪に支店を構えた時に、その責任を任されました。そこで、常々模索されていた新業務、後にいう短資業を始めるため大正7年（1918年）に上田商店（現



上田正三さん（左）と上田元彦さん

上田八木短資株式会社）を創業されました。32歳という若さでした。

その当時、銀行は日々の資金決済によつて資金の一時的な過不足が生じていましたが、こうした過不足を仲介する必要がありました。この点に要さんは着目され、仲介業者と活躍され、現在の短資の元を作り短期金融市場の整備に大きな寄与をされました。そして、金融業界を中心に大きな活躍をされるとともに、多くの人の信頼を得られていました。日本銀行総裁時代は一万田法王と言われ、鳩山、岸内閣の大蔵大臣の一万田尚登（いちまだひさひと）さんは大阪での講演会でのあとは、必ず最初に上田さんと言つて質問を指名され、特にその信頼が大きかったそうです。

祖父 捨藏さんのこと

「捨藏翁も祖母の顔を全然知りません。家には油絵の肖像画があり、それ

を見てオヤジからこういう偉い人だったよと言われていましたよ。」

さて、ここからは、上田捨藏翁傳から紹介します。明治8年の22歳から40年にわたり、国領村のさまざまな施策の中心になって率先されてきました。その中で、特筆されることがあります。それは、他に先駆けての学校田の創設です。明治20年代の小学校への就学率は40%台でした。その当時は小学校でも授業料徴収を行っていました。そして、日本は貧しく、どうしても学校にいけなかった子どもたちがたくさんいたのです。このことに関して、誰も有効な手を打てない状況でした。捨藏さんは明治21年には学校が基本財産を持つことを早くも提案されています。明治29年には授業料減免のために、学校田の寄付を成し遂げられています。これは、進修小学校の「學田之碑」に繋がります。時の文部大臣の西園寺公望も美挙として、篆額で讃えています。その

後、郡内でも学田や小学校基本財産の蓄積を始めます。このことにより、本来に多くの人々が助かり、そして感謝したと思います。

〆自身のこと

生まれは、兵庫県武庫郡精道村（現芦屋市）です。今でも、元彦さんが東京から帰ってこられた時には小学校の同級生数人に集まってもらえるとのことでした。

「疎開は、丹波の家でしたですよ。昭和20年の終戦前のごく短期間、柏原中学校に転校したのですが勉強は全くしてないですよ。勤労働員で、校内にあった作業所で夜勤を週がわりでして、卒業まで行っていないので、名簿には載っていないですよ。」
大学卒業後は日本銀行に勤務され、昭和48年に上田短資に入社されました。「創業者の後継は大変とよくきいてい

ますが」の私の質問に笑いながら「私は、長男で4代目ですが後継はしんどいですよ。古くからいた番頭みたいな長老がああやこうやと言いまして」というお言葉でした。

今回、株主総会で、会長を引退され、相談役になられたそうです。元彦さんの父君の要さんから私の曾祖父にいただいた言葉「長い間お疲れさまです。これからもますます元気で頑張ってください」を私はお返ししたいと思っていました。しかし、91歳、月2回のゴルフ、元氣そのものでこれからも頑張ってください。は、全くいう必要がありませんでした。

関西丹波市郷友会のこと

関西氷上郷友会は、明治32年の秋に、田艇吉を初代会長にして、大阪の曾根崎で発足しています。その年の夏には阪鶴鉄道が、大阪より福知山まで開通しています。当時、早稲田大学在学中の確郎さ

んは開通列車で東京より帰ってこられたそうです。それまでは、篠山経由で峠を越えて帰ってこられたそうです。「郷友会会長は、3代目は親父、その次は、永井幸太郎さんで速水日銀総裁の岳父、その次は、荻野さん、大阪高裁長官、次は田さん」と名前が次々に出ました。ちなみに2代目は、氷上町谷村の有田一族の有田有敬さんで、京阪電鉄の社長をされていました。また、正三さんは、大学卒業時の昭和42年に当時副会長をされていた、父君の宏さんより卒業したのなら、お前も入会しろと言われて一時入会されていました。最近、再び入会されて棚原の本上田家を拠点にして、地元のために奮闘されています。

故郷、丹波のこと

丹波は、ここに集まった三人の故郷です。春は桜が咲き乱れ、夏は、山や田んぼは真っ青で、山々から入道雲が沸き上

がり、秋は、山々は黄色に色づき、紅葉は真っ赤です。冬は、冷たい風とともに野山は真っ白です。これは、おそらく私たちの丹波の美しい四季の原風景と思います。

元彦さんは、夏のお盆、秋には会社の物故者のため建てられた供養塔の供養に毎年、東京からはるばる丹波に帰ってこられ、それが年中行事になっておられるそうです。そして、その四季折々の美しい丹波の風景を眺めながら、捨蔵さん、要さんの墳墓の地にある丹波の家をこれからもずっと守っていかうと誓いを新たにされているそうです。

報本反始（ほうほんはんし）

これは、礼記にある言葉で、上田八木短資の社是になっています。私は初めて耳にする言葉です。社会、祖先をはじめ、さまざまな事柄に感謝をすることの大切さを説いた言葉だそうです。しかし、今回、上田一族の歴史の一部をお聞きして

いると、報本反始はその上田一族の長い歴史の中で培われてきた伝統の一部のような気がしました。

最後になりましたが、上田元彦さま、上田正三さまありがとうございます。

しかし、85年前の手紙の因縁もありました。このようなことを誰が想像したのでしょうか。手紙に導かれた先祖への感謝、それが、私たちの報本反始です。

（尼崎市在住、医師）



海外各地に商品出荷

花加工、独自の技術で

大地農園 社長 大地 但

丹波で仕事をして50年。働き始めた時は、両親と近所のおっちゃん、おばちゃんも働いてくれていた中で、唯一の若手でした。そのため仕入れから生産、販売と何でも屋でした。

現在、従業員数190名、原材料は日本と世界27か国100社以上からの仕入れ、丹波で生産、そして国内と海外15か国50社以上に出荷。

ちっぽけな会社ですが、丹波に生産拠点を置きながら、規模はともかく、行っていることは世界を相手 結構頑張っていると思います。

私が丹波を離れたのは、大学時代の4

年間と生花市場に勤めた2年間で、現在74歳まで68年間、丹波に住み続けています。

そろそろ、息子や若いメンバーに仕事を委譲し、自分のやりたい仕事を続けたいと考えています

ここまでの道のりは平たんではなく、結構山あり谷ありの連続でした。ただこうして会社も継続し、少しずつでも事業を拡大できたのは、先代がよく言っていた、

「こんな商品ができたらおもしろいので、つまり、こんな商品ができたらお客が喜んでくれるで、という口癖があったからだと思います。

このお客さんに喜んでいただける商品を生み出すためにも、材料確保に、国内、海外を問わず、いろいろな人に会い、いろいろな場所を訪問しました。海外はアメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、インド、中国、フィリッピン、タイ、ベトナム、



米国ワシントン州の仕入れ先業者と。右端筆者



アフリカ・ケニアのバラ生産農場

インドネシア、南米コロンビア、エクアドル、オーストラリア、ニュージーランド他 出張日数で毎年60日以上は海外にいました。

特にアメリカは農業国でもあり、カリフォルニア、オレゴン、ワシントン、テキサス、アラバマ、オハイオ、ウイスコ

ンシン、コロラド、アリゾナといった各地を毎年訪問しました。

特にアメリカ・ワシントン州のオマックという小さな田舎町には、40年以上前から毎年訪問してきました。当初幼稚園に通っていた、その家の娘二人は今ではそれぞれ、幼稚園の子供を持つ母親です。

シアトルからロッキー山脈を越えたところにあるオマックには、シーズンになると谷中を野生のカスミソウが覆います。地元の人には**“baby’s breath”**(あかちゃんのお吐息)と呼んでいます。世界中でここだけにある景観が谷中に広がります。その家族とも40年近くの親交ができ、いつも温かく迎えてくれて、アメリカに行けば必ず2泊か3泊自宅泊してもらってきました。

コロナのためもう3年以上訪問ができませんが、その野生のカスミソウは、今も大地農園の主要な商品です。

我々の仕事は花や緑を加工し、ドライ

フラワーやプリザーブドフラワーに加工する仕事です。そのためそれぞれの地域にある特徴ある素材を求め、世界各地を訪問し、27か国100社以上の仕入れ先となっています。

いろいろな人と知り合い、情報交換をするうち、次々に新たな仕入れ先が増えてきました。

今は若いメンバーが毎日メールで、またズームでやり取りしながら仕入を行っています。

私どもの会社のもう一つの特徴は、これも先代が先鞭をつけてくれたことです。いろいろな植物を、ドライフラワーやプリザーブドフラワーに加工する技術です。

最初に先代が開発した、丹波の山にたくさんあるヤマシダの加工から始まりましたが、現在では500種類以上の素材を、いろいろな色にも加工しカタログのアイテムは3000アイテムにもなりま



ケニアでの生花見本市

す。それぞれ植物ごとに加工方法は別々です。まるでいろいろな食材を最もおいしく食べるための料理を行っているのに似ています

プリザーブドの技術はもともと何十年も前にドイツの大学で作られたものなのですが、当初我々はそんなことはまる

で知らずに、いちから技術開発に取り組みました、

大学の理系を出たメンバーも加わり毎週トライ・アンド・エラーを繰り返しながらミーティングを行い、いつしか7年かかり、その技術を我々のものにできま

した。
この技術は簡単に言うところ細胞の中の水をいろんな分子量の高級アルコールに置き換えるという技術がベースになっています。その技術を植物に会うように改良していくそれは時間と試行錯誤のたまもの

です。
こうして、以前からの加工方法にさらに新しい技術が加わり、世界に類のない品質と種類ができるようになりました。毎年毎年、新しい素材が加わり、新しい技術が付加され、更にお客様に喜んでいただける商品づくりに励んでいます。

私は、会社の経営からは、そんなに遠くない日に離れると思いますが、素材の

開発と、新たな加工技術については、一生続けてゆきたいと思っています。

会社のメンバーと一緒にいる商品開発は、何より面白く、年をとっても夢は膨らみます。

現在勤めてくれているメンバーや今後入社してくれるメンバーが、仕事って面白いなーと感じてくれるようにサポートをしていきたいと思っています。

そして、出来上がった商品に対し、お客様が新鮮さと美しさ、感動と安らぎを感じていただければ最高です。

(山南町在住)

利用者の笑顔を力に

障がい者の社会参加を支援

藤井 亜郎

ヘルパーという言葉は皆さんご存じですが、ガイドヘルパーは聞きなれない言葉だと思えます。ホームヘルパーは利用

者宅を訪問して家事援助を支援するのに
対し、ガイドヘルパーは障がい者の社会参加を支援するために視覚障がい者、全

身性障がい者、知的障がい者の外出時の移動
介助を行います。

この仕事との出会いは、2004年に会社
勤めを終え、何か社会のお役に立てる仕事
がしたいと思っていると、横浜にいる友人
がガイドヘルパーをしていると聞き、自分も

挑戦してみようと思いい資格を取りました。

「NPO法人コグマ」に登録し初仕事は2006年に30代の視覚障がいの男性の視覚障がい者のダンスパーティーの付き添いでした。明石の会場で同じ障がいの女性と踊られた彼から「私のお相手はどんな方でしたか」と聞かれ、「小柄で少しぼつちやりされた年配の方でした」と答えると「藤井さんは正直な方ですね」と言われ、彼の夢を壊したことに気づき大いに反省しました。

あれから16年、78歳の今日まで、この仕事を通じ多くの利用者との出会い、いろんな経験をさせていただきました。視覚障がいの女性の方でパソコン教室の指導者として同じ障がいの方に音声の出るパソコンで指の幅でキーボードの位置を確認しながら熱心に指導されている姿に驚き、感服しました。言葉に力があり、オーラを感じる方でした。



ジムでのトレーニングを見守る筆者（左）

別な女性では、盲導犬同行でカラオケに行きました。歌詞は記憶されていて歌の上手な方で、趣味も多く、料理も得意とのこと。行動力に感心しました。

全身性障がいの方では自宅の階段から転落され、頸椎損傷で寝たきりになられた50代の男性のお世話を3年間させていただきました。なれない下のお世話に悪戦苦闘したこと、車いすで和太鼓の演奏会に行き喜ばれたことが思い出されま

す。知的障がいの方とは今まで80人ほど接してきました。平日は2〜3時間、土、日は5〜6時間同行します。彼らの好きな行動は乗り物、カラオケ、プール、ショッピングセンター、動物園、水族館、ゲームセンター、図書館等です。カラオケはEXILEやアニメソングが人気があり、自分で操作できる利用者も多く、大きな声でマイペースで歌われます。嵐の好きな人で嵐メンバーの写真を並べて

歌う人もいました。「藤井さんにも歌わせて」というと「ダメ」との返事。時を忘れて熱中されます。

プールでは、ビート板で楽しめます。泳げる方も多いですが、一旦プールに入るとなかなか出てこられません。カラオケやプールは人に干渉されない自分の世界で気持ちが安らぐようです。

乗り物は福祉乗車証で神戸市内地下鉄、バスが無料で利用できます。JRや私鉄は障がい者手帳で半額の特典がありますので、大阪、京都、姫路方面に行くこともあります。

食事は本人の希望を聞きますが、マクドナルドの希望が多いです。何を食べても皆さんきれいに完食されます。

自閉症、ダウン症、発達障がいといろんな障がいの方と接していますが、突然飛び跳ねたり、車内で大声を出したり、身体を前後にゆすつたりすることもあります。こだわりもあり、バスでは運転手

側の後ろから2列目の席しか座らない人もいます。

大体は言葉のやり取りが不十分、金銭の管理ができない方が多いです。自分で買い物ができるようにと保護者からの要望がありますが、なかなか難しいです。個性豊かな人たちで、年々身体は成長されますが、心は純粹です。

昨今障がい者の数は年々増加傾向にあります。残念ながら障がい者への誤った認識と偏見が社会参加を阻む要因になっています。

神戸市では2020年より市民が障がいを理解し差別のない共生社会の実現に向け手助けできるように地下鉄や市バス内にポスターを掲示し啓蒙活動を行っています。

今日まで仕事が続けられたのは家族の理解、協力はもちろんですが、利用者の方の笑顔が一番の力です。

今年の4月に会社から永年勤続に対し

ての感謝状をいただきました。年とともに疲れを感じるが多くなってきましたが、人生の晩年にこのようないい仕事に出会えたことに感謝し、体調管理に気を付けて少しでも長く障がい者の方々の社会復帰のお役に立てればと願っています。

(神戸市在住)



異国の教壇で自前の研修〈下〉

精神の豊かなフィンランド

石田里加

〈森とともに静かに賢く生きる人々〉

欧州の長い冬が明け、ようやく春の気配を感じ始めた頃、教育先進国で有名なフィンランドに向かった。日本を出発し

て一年が経っていた。大荷物を抱えて飛行機を乗り継ぐ生活にもずいぶん慣れた。しかし、春を喜んだのもつかの間、北欧にはまだ冬がしっかりと居座っていた。どこまでも続く針葉



Rika Ishida kertoo aikovansa

地元紙に掲載された記事

現地の人たちとのコミュニケーションのため、ホストや話を聞いたため、ホストや現地の人たちとのコミュニケーション

迎えられた。私がフィンランド語を話せないため、ホストや現地の人たちとのコミュニケーション

ニケーションはいつも英語となった。フィンランド人にとっても英語は文法が全く違う言語なのに、小学生からお年寄りまで英語で日常会話ができることに驚いた。何か特別なレッスンでも受けたのかと尋ねると、学校教育以外の英語教育は受けていないと言う。やはり教育先進国、3か月間のフィンランド滞在期間は驚きの連続だった。

宿題なし、定期テストなし、学習塾に行っている子もほぼなし。それなのにどうして世界トップレベルの学力をキープできるのか。学校の授業のみで高い学力を維持できる理由の1つは、教師の「専門性の高さ」にあるのではないだろうか。言語教師に関しては、英会話はもちろん普段の読書や娯楽で見るテレビ番組も英語だ。よく休憩室で出会うロシア語の先生は「これ私の翻訳なの」と本棚にある本を指して言った。田舎の小さな公立学



修了式の日 明日から3か月の夏休み

校に言語教師だけでも同時通訳、元翻訳

家など……が普通に子どもたちの教育に

当たっている。この国では修士号を取得

しなければ教師になれないので、日本で

は大学で教えるレベルの専門性が教師全

員にあるという。

〈教師の恵まれた労働環境〉

研修先の中学校は8時から授業が始まり遅くても3時半に終わる。そして生徒

も先生も授業が終わればさっさと帰宅する。欧州の他の国もそう

だったが、学校の役目は「学力向上」で、教師の業務は「授業」のみ。日本のように家庭生活への介入はしない。卒業試験を全国トップの成績で卒業した高校生がインタビューを受け、「将来は地元の公立小学校の先生になりたい」と答えていた。教職は休暇などの労働環境が充実しているので、若者にも人気らしい。フィンランドの教育の質の高さを維持しているのは、優秀な人材が集まるような「教師の恵まれた労働環境」にあるとも言える。

も言える。

フィンランドは私たちが思う以上に親

日的である。たとえば、日本の中学歴史

教科書には、フィンランドについて大戦

中どちらに味方したかなど地図に少し出てくる程度だ。しかし、フィンランドの

教科書には、数ページにわたり日本の歴史についての説明がある。フィンランド

を長く苦しめ続けた国、ロシアを日露戦争で負かした日本は、フィンランドにとって特別な国であり、少し前には「東郷ビル」なるものが販売されていたという。日本の中学歴史の教科書に小さく出てくる東郷平八郎のことを私以上にフィンランド人がよく知っているのは奇妙な感じがした。また、「日本から来た」というと誰もが急に笑顔で話しかけてくれる。ロシアがあまりにも広いため気づかないかもしれないが、フィンランドは日本から最も近いヨーロッパの国である。シャイで親日的なフィンランドのことをもっと知り、仲良くなりたいと思った。

もつと知り、仲良くなりたいと思った。

〈博物館のような図書館も〉

4月・5月にかけて、南部にある小さな村に住み、幼稚園・小学校・中学校を見学させてもらったり授業をさせてもらったりした。幼稚園では、大きな青い目をくりくりさせて、見慣れないアジア人に興味津々で、小学校では、子どもたちの英語力の高さに驚いた。町の中心部には必ず充実した図書館があり、森の中の喫茶店のように落ち着いた雰囲気



静かな森と湖

持っていた。読書カフェ、室内公園なども併設されていて、まるで博物館のような図書館もあった。週末に館内を散歩していると、思わぬところで絵本に没頭している幼い子どもに出くわすことが頻繁にあった。親は併設カフェで休憩でもしているのだろうか。このような環境で育つ子どもたちをうらやましく思った。幼い頃から子供たちへの読み聞かせや読書環境の整備にも力を入れていると知った。きっとこれも学力の高さにつながっているのだろう。

た。きっとこれも学力の高さにつながっているのだろう。

5月末で修了式を済ませると、生徒も教師も丸々3か月の夏休みに入る。日本のように部活や登校日などはない。子どもたちは短い夏の太陽をいっぱい浴びて元気を蓄

える期間であり、教師は専門性を高めるために大切な時間となる。しかし、最近には家にこもってオンラインゲームをしている子どもが増え、世界共通の問題はこも同様らしい。中学校が休みになったので、6月は中西部のセイナヨキ大学の夏季講座に参加することにした。セイナヨキはデザイナーのアアルトによる建築物が多く残る美しい町である。世界中から色々な人が集まり、講座ではフィンランド人の学生が留学生や夏季イベントの世話をしていた。セイナヨキは北極圏に近く、深夜まで明るかったので、いつも少し寝不足みだった。現地の人たちは平気で寝られるらしいが、太陽の光がある中でぐっすり眠ることは予想以上に難しい。夏至の頃、白夜を体験するために電車で5時間北に移動した。広く長く続く湿地帯、トナカイの群れ……には出会えなかったが、サンタ村に行くと公認サンタクロースに会うことができた。予想

通り大柄で白髭のおじいさんの姿をしていたが、本来はヨウルプツキという妖精だ。世界の人々と一緒に、森と湖の中で静かな夏を過ごすことができて、心身ともに癒やされた。

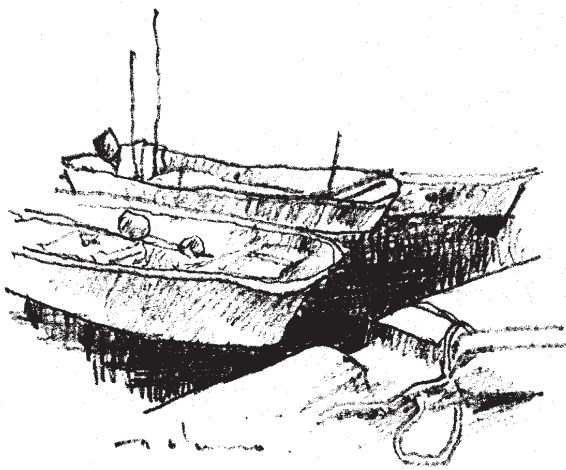
〈お年寄りがとても元気〉

他にもフィンランドで感じたことは、まず、お年寄りがとても元気で目に生気が宿り、生き生きとしていることだ。もちろん手厚い福祉制度があるからだ。ある人は「退職したらしたいことがたくさんあり、退職後の人生を楽しみに今は我慢して働いている。」と笑っていた。また、裕福な家庭の子どもや優秀な学生たちは、「収入」や「名声」ではなく「自己実現」や「社会貢献」を職業選択や人生の価値規準にしていることも大きな驚きの一つだった。歳をとっても病気になるっても、将来的に経済の不安がなければ、精神的な豊かさを大切にできるよ

になるのだろうか。しかし、フィンランドは経済的にさほど豊かではないのに、どのようにこの制度を維持しているのだろうか。長くフィンランドに住む人に尋ねると、それはいつも話題になっていると言います、高い税金を払っても将来に不安のない方が良い、と尋ねた全員が答えた。さらに、福祉が手厚いために生じるマイ

ナス面も色々あるのだという。たった3か月間の滞在だったが、高福祉社会を見て歩き、今までにない視点で物事を見ることができるようになったように思う。フィンランドでの3か月は、短かったがとても貴重な経験となった。

(丹波市在住)



陸上競技に魅せられて

青少年健全育成に貢献

丹波市陸上競技協会 会長 大西 伸弘

東京五輪 テレビに釘付け

私が陸上競技と初めて出会ったのは、1964年の東京オリンピックである。当時小学校2年生の私は、100mで人類初めて10秒の壁を破った(追い風参考)ボブ・ヘイズの活躍を、テレビの前で釘付けになって見ていた。明確な記憶としては残っていないが、100mと4×100mRの2種目で金メダルを取った勇姿に、強く心を動かされたのだろうと想像できる。

母の話では、「大きくなったらあそこ(国立競技場)で走る。」と言っていたそうである。

その後、走ることが好きになったわけ

ではないが、小学校4年生で、上級生が企画した駅伝大会に出してもらったことがあった。ペース配分が分からず最初から全力で走り、途中で息切れ、チームに迷惑をかけた苦い思い出が残っている。中学校入学当初野球部に入学したが、いつまでたっても球拾いばかり。颯爽と目の前を駆け抜ける陸上部員に憧れ、思い切って陸上部の門をたたいた。野球部の退部と陸上部への入部は一大決心だったので、陸上部もやめるといふ選択肢はなかった。当時三丹陸上競技大会が福知山の桃映中学校で開催されていて、中学校

の選抜チームで参加した私は、公認グラウンドでの正式な競技大会に出場できたのを喜んだものである。篠山の丹南中学校での丹有大会にも出場したが、近年勤務する高校への生徒募集活動で同中学校を訪問した時グラウンドを見て、何十年も前の大会当日を鮮明に思い出せたのが不思議だった。このように陸上競技は、成長する自分の中で、次第に大きな部分を占めていった。

陸上競技の魅力の一つは、競技種目の多さである。私は思う。様々な個性を持った者が活躍できる、多様性のある競技と言える。競技種目は、「走・跳・投」に大別できる。「走競技」には、短距離走、中距離走、長距離走、障害走、競歩、駅伝競走がある。更に、短距離走では100m、200m、400m、100mH、110mH、400mHが正式種目としてある。国体では、今年から300mが実施されると聞く。跳躍競技や投擲

競技でも多くの種目が存在する。競技者が自分の特性に合った種目にチャレンジ

できるのが陸上競技である。私も高校時代、5種競技(100m、400m、110

mH、走高跳、砲丸投)や駅伝競走にチャレンジしたものである。大学でも競技を

続けたが、特筆すべき競技実績を残してはいない。ただ、小学2年時にした「国立競技場で走る」宣言は、選抜記録会出

場の形でかなえることができた。正式な大会ではないけれど、家族の間では懐かしい思い出である。

陸上競技のもう一つの魅力は、大会で順位を競うだけではなく、自分で目標を立て、達成に向けて努力できるところである。自己ベストの更新は、過酷な練習を続けるモチベーションにもなる。競技力の高い低いに関係なく取り組める競技と言える。私自身、競技生活を通して多くの仲間と出会い、目標に向かって努力する大切さを学んだ。陸上競技に出会え

たことを、今でも感謝している。

丹波市陸上競技協会の取組み

私は大学卒業後高校の教員になり、指導者の道に進んだ。陸上競技部の顧問になり、帯同審判をするために審判員資格を取るようになった。公認審判員資格取得には日本陸上競技連盟傘下の陸上競技協会に所属する必要があったので、当時の氷上郡陸上競技協会(現在の丹波市陸上競技協会)に籍を置いた。当時の会長は旧氷上郡町村長会長もされた石井敏秋氏であった。旧氷上郡教育長を務められた高橋勇氏らと氷上郡陸上競技協会設立に力を尽くされた。協会設立の趣旨は、終戦後の混乱した時代にも青少年の活躍の場を作ろうという「青少年の健全育成」の思いからだった。昭和24年には、氷上郡陸上競技協会の設立を記念し「氷上郡町村対抗駅伝競走大会」が開催された。第1回大会のコースは、崇広小学校前を

スタートして佐治折り返しで行われた。

その後、毎年コースを変え、南は下滝駅・西は遠阪小・北は竹田小からスタートして柏原へ帰る片道コースで開催されてい

る。年ごとに地域密着型の大会となり、地元住民が総出で応援したという記録が残されている。時代と共にコース変更が

繰り返されたが、発足当時の「青少年の健全育成」の精神が常に中心に掲げられていた。この大会を経験し、箱根駅伝を

走った選手もいる。

この大会は、指導者として競技会を支える人材も多く輩出してきた。現在は「丹波市ちーたん駅伝」と名称を変更し、創設時の精神に加え、市民の「健康寿命日本一」という新たな目標に向けた取り組みとして継続されている。

私が丹波地域の社会体育に携わり始めてから、今年で37年になる。現在、丹波市陸上競技協会の会長を務めている。30代で氷上郡陸上競技協会の理事長を任さ

れた頃、先輩方から助言をいただいた。それは、「スポーツは、する人・見る人・支える人で成り立っている。陸上競技も然りである。競技者（する人）だけで終わってはいけない。陸上競技の振興には、競技者の次に指導者（見守る）の時期があり、最後には大会の開催・運営（支える人）という役割が続いている。」というものであった。私が長年取り組んで来られたのは、陸上競技そのものの魅力と共に、導いていただいた多くの先輩、力を合わせてきた同僚や後輩、そして日々元気を与えてくれた子どもたちのおかげである。今改めて、感謝しながら振り返っている。

陸上競技が子どもの成長に役立っていることの良い事例がある。陸上競技の大会には、多くの審判と補助員が必要であり、その力なくして大会は運営できない。丹波市陸上競技協会が主催している丹波市リレーカーニバル（兼丹波市小学生陸

上競技大会）では、参加校に補助員として協力してもらっている。その役割は、競技審判の補助や用具の出し入れからグランド整備に至るまで、多岐にわたる裏方の仕事である。誰かがやらないといけない仕事の経験は、成長につながる。補助員を経験することで、自分が競技する際には感謝の気持ちをもって競技に臨めるようになる。かつて丹波市陸上競技協会に所属した人で、実業団の大会で上位に入賞するようになって、練習後のグランド整備を黙々としている選手に出会ったことがある。その謙虚な姿勢から、選手としての強さの秘密を見たような気がしたものだ。競技をやっているだけでは分からない、大会補助の経験をすることにより、競技者としての心構えや、競技の特性が理解できるのである。中学・高校生になれば、先輩が後輩を指導する場面も多いので、その経験はリーダー育成にも役立つと言える。

これまで、陸上競技を通じた子どもたちの成長を目の当たりにして、その可能性の大きさに驚かされた事が多くあった。その子らの成長には限りがない。丹波地域からは毎年、全国大会に出場する競技力の高い選手が出ている。丹波市陸上競技協会では、主催する大会の開会式で、その選手に奨励賞を贈っている。身近な人が活躍する姿やその人間性に憧れ、後輩が育ってくれることを願っての取り組みである。今後も地道に息長く応援していく方針である。

丹波市陸上競技協会が陸上競技の振興だけを目指すのではなく、深く青少年の健全育成に重きを置くことを、会長として今一度強く心に留め、今後も同協会の事業を計画・実行していかなければならないと考える。

（青垣町在住、元柏原高等学校校長、柏陵同窓会会長）

大村崑さんのお母さん

佐治小の記念誌に甦る

副会長 芦田敬一

「浅野さんは芸に厳しい方ですから、練習しましょう」という言葉に私は面食らいました。私はNHK大阪放送局の診療所所長兼産業医として、様々なドラマの医事指導をしてきました。すなわち、医事指導とは、ドラマの中でどのような病気が良いとか、診察方法とか、どのように患者さんや、医師は振る舞ったら良いかなどの相談に乗ることです。その朝ドラは2003年後半の「てるてる家族」です。ヒロインは、石原さとみさんです。両親は岸谷五朗さんと浅野ゆう子さんです。浅野ゆうゆうさんが腹痛で診療所に駆け込むシーンです。そこでどの

ように診察をしたらよろしいですかという依頼でした。まさか、お腹を抑えるわけにもいかないのです、脈でもみたらと指導しました。そしたら、その回の演出担当者から「先生、出られますか」という言葉に、医師として地のまま出たら良いと思って了解しました。担当ディレクターの言葉に高をくくっていた私は、焦りました。また、「先生の言いやすいように喋ってもらってよろしいですから」という言葉で台本のチェックを始めて、あれでもないとか、これが良いとか迷いはじめました。ドラマは、NHKでは、リハーサルでは読み合わせの後に立ち稽

古です。スタジオでは、2回ほど、稽古をして本番になります。その場所には、カメラマン以外に、マイクを上からかざす音声係や、スタジオの中で、昼や夜をあかりで調整する照明係などがあります。そして、隣の部屋でモニター画面を見て、担当ディレクターと技術の責任者が、無線で、それらの係に指示を出すのです。ですから、そのスタジオでは10人以上がいることになります。さて、その本番のことはほとんど覚えていません。ただ、一つだけ覚えているのは、脈をみるシーンです。浅野さんの脈を見るで触ったのです。しかし、そこでセリフをいうのですが、脈を見ながら言葉を発するのが難しかったです。終わった後は、本当に喉はカラカラで頭は真っ白でした。

さて、この朝ドラで気になっていたことがありました。それは、長い間テレビ



佐治小学校の昭和26年卒業写真。右端が岡村のおばさん

で大活躍されてきた大村崑さんのこと
です。大村さんは、この朝ドラでおじいさ

ん役に出ておられました。大村さんは神戸市出身ですが、養母の方と実母の方がおられました。大村さんの実母の方は、丹波市青垣町佐治で小学校の用務員を長くされていました。すなわち、私の母校の佐治小学校で、私たち多くの児童を長い間、見守っていただいていた。その佐治小学校の私の思い出を確認したかったのです。

それは、昭和31年、小学校2年生の時の出来事です。佐治小学校は、1年生と2年生は木造校舎です。3年生以上は、別のモルタル造りの校舎です。木造校舎では運動場側は1年生です。2年生は反対側の校門側にあります。2年生校舎の廊下が続く階段を3つ下がると、左手に灰色のすりガラスに木でできた戸があります。戸を左側に引いて内に入ると小さな土間があり、土間の左手にはやや高い床の3〜4畳の部屋があります。部屋の向こう側には、透明なガラス窓がありま

す。そこは、土間側に比べ明るくなり外の景色が見えます。その小さな畳部屋に小学校2年生の私が布団に入って寝ています。岡村のおばさんは部屋の右側に立っています。私の頭の上の方で「日曜日に息子が福知山に来る」ただ、それだけです。私は、一人だと思っていたおばさんにも、息子さんがおられる。そして、福知山には汽車かそれとも峠をこえて行かれるのかなと思いました。

ずっと後から、大村崑さんが、デビュー前には、歌謡ショーの司会をされていたことを知り、あれは、歌謡ショーの切符を見て言われたと思うようになりました。それでは、大村崑さんと連絡を取り渡されたのか、自分で調べて行かれたのかと疑問が湧いてきました。ただそれだけのことでした。また、昭和50年代の頃です。岡村のおばさんは、散歩の途中、私の家の玄関の上り框に腰をかけて休憩をよくされていました。私の帰省中は、

母の「岡村のおばさんが来られたよ」という言葉で、奥から出てきて挨拶をする
と「立派になって」とよく言っていただ
きました。結局、てるてる家族では大村
さんには連絡しませんでした。

平成30年に佐治小学校は144年にわ
たる歴史を閉じ、同じ場所で青垣小学校
となりました。そして、卒業写真を掲載
している記念誌を発刊しました。その中
で真っ白な割烹着を着られた若々しい姿
から、顔に年齢を感じさせる姿までおば
さんを見ることができました。おそらく
何千人にもなる佐治小学校で、そのこと
に気づいたのは私一人に違いないと何故
かその時思いました。そして、大村さん
が、この写真集を見られたら、喜ばれる
に違いないと思って手紙を出しました。
まずは、大村さんが、丹波にこられた様
子をお聞きしました

大村さんのお話では、小学校1年か2
年のころだそうです。お母さんの葉書を

頼りに、ひとり柏原駅に降り立ち、人に
尋ね尋ねして、最後には親切な人に家ま
で連れて行ってもらわれたそうです。し
かし、お母さんに、翌日に帰るように言
われて帰ったということのようです。

あの当時の、国鉄柏原駅前の神姫バスの
柏原停留所は、今はありません。木造の
建物で、ガラス戸を入ると土間があり、
その奥に切符売り場があったはずです。
それは、昭和何年のことでしょうか。私
は思いました。駅を降りると、ポーとい
う汽車の音。汽車が出ていくと、神戸に
帰ることはできません。行き先は佐治よ
り山奥です。身も心も凍えて辛い丹波の
冬です。でも、不安より、会いたいとい
う気持ちが強かったでしょう。そして、
やっとたどり着いたら、帰れという言葉
です。その言葉をどのように聞かれたの
でしょうか。次の日、山が迫ってくる丹
波の山奥です。バスは小さくなっていき、
姿も小さくなっていきます。岡村さん親

子は、その時の顔をいつも、はっきり思
い出すことができたと思います。

いつの頃からかわかりませんが、テレ
ビ画面での大村崑さんを見ると、あの用
務員室に横たわっている私とおばさんを
思い出します。それは、私には、ほっと
した感じとともに、不思議な感覚を呼び
起こします。そして、大村さんのはつら
つとした姿、声とともに私は、寂しさを
感じる時があります。でも、そのように
感じるのは、私だけででしょうか。

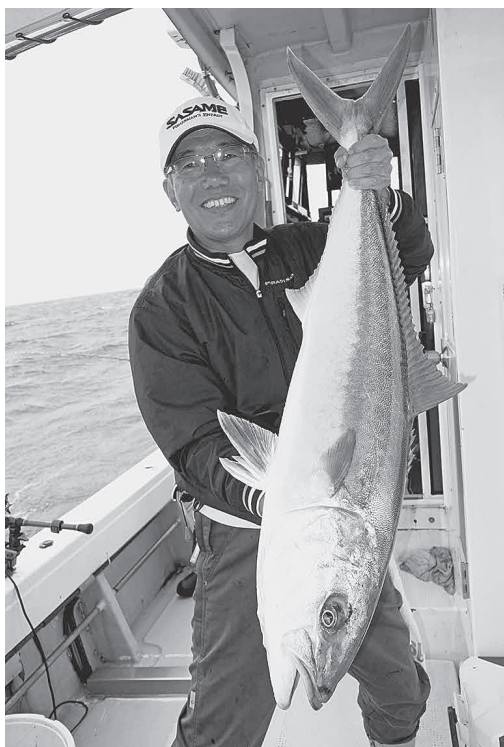
(尼崎市在住、医師)

国民的レジャーの魚釣り

マナー守り環境に配慮

株式会社 ささめ針 代表取締役 篠倉 庸良

私達の暮らす日本は四方を海に囲まれ、多くの河川、湖沼があります。加えて春夏秋冬という四季もあり、自然に恵まれた国でもあります。そして海、川、湖、沼にはそれぞれ豊富な種類の魚が生息しており、それらを対象にした様々な釣りを様々な場所で楽しむ事が出来ます。



体長1mのヒラマサを釣り上げた筆者

魚釣りは古今老若男女を問わず、誰にでも手軽にできるスポーツです。釣界では「魚釣り」をスポーツと位置付けており、国が発行しています。レジャー白書でも、魚釣りを野球、スキー、登山などと同じくスポーツと

いうカテゴリーで取り扱っています。

現在日本の釣り人口は1000万人と言われています。そして魚釣りには色々な楽しみ方があります。何も考えず、のんびりと釣り糸を垂らすのもよし、澄み切った清流で気の合った仲間と過ごす、それだけでリフレッシュ出来る。周囲の状況に気を配り、真剣に魚と対峙するのもよし。よりスポーティを求めるなら砂浜からのサーフキャストイング。魚釣りには「獲物を捕る」という人間の持つ生まれた狩猟本能的な興奮があります。

私達は魚釣りを通じて自然との関わり合いを増やし、いつまでも魚が住みやすい自然環境や水辺を大切にしなければなりません。

日本における伝統的な釣りは、庶民のレクリエーションとして、古くから愛好されてきました。20世紀になり、人類は欧米を中心に飛躍的な経済成長を遂げま



社員の釣り研修（日本海の釣り公園で）

した。日本も、戦後焦土の中から生きる
こと、食べる事が精一杯の時代から、わ
ずか40年後の1980年代には、世界で
もGDP第2位の高度経済発展を果たす
ことが出来ました。

しかし、一方で、人間にとっての利便
性や効率性を追い求めたが故に、結果的

に本来あるべき自然と人間の共生という
バランスを崩し、環境破壊という大きな
負の遺産を残してしまいました。世界中
で工場や道路やダム、河口堰などが次々
造られ、貴重な地下エネルギー（地下資
源）を野放図に使って、大量生産、大量
消費・大量廃棄が繰り返されました。数
十年前より、自然や環境問題、そして「人
間の幸せとは何か」などが注目されるよ
うになり、ようやく持続可能な循環型社
会の構築に向けて動き出そうとしていま
す。

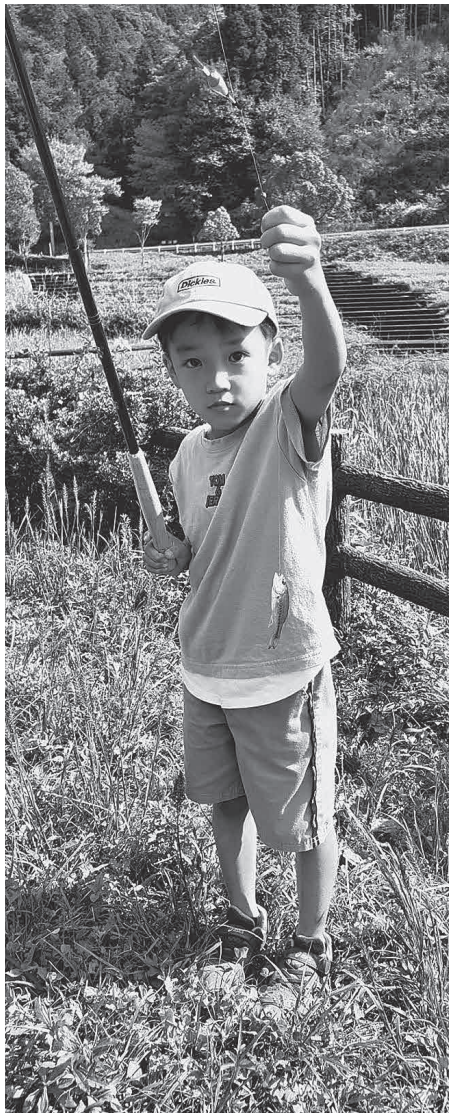
また、日本においても魚釣りは古来か
ら、ある時は生きるための糧として、あ
る時は庶民の手軽なレクリエーションと
して全国各地で親しまれてきました。日
本の釣り人口は約1000万人といわ
れ、数々の釣り人が清流や河川、湖沼、
そして海にと魚釣りというスポーツ・レ
ジャーを楽しんでいます。

そして釣りはキャンプ等の野外体験や
マリッジジャーにも容易に取り入れられ
る複合的な要素を併せ持っており、男女
を問わず、青少年からお年寄りに至るま
で幅広く国民の間で、国民的レクリエー
ションとして根強く支持されてきまし
た。

日本の、四方を海に囲まれた豊かな自
然と、国民の余暇時間の増大等に伴い、
余暇時間のスポーツ部門で28種中、釣り
の男性参加率は第2位と高く、健康的な
国民的レジャーとして広く定着していま
す。同時に、釣りはスポーツ振興法にお
いても、心身の健全な発達と、明るく豊
かな国民生活に寄与するという生涯ス
ポーツの一つとして重要視されていま
す。

釣りの社会的意義と健全性

(1) 前述のように、日本の釣りは小さな子
供からお年寄りまで、多くの国民に愛



春日町の池でフナ釣り

されています。ITの急速な発達により、超過密社会の中で、釣りは豊かな自然や生き物とふれあうことにより、ストレスを解消し、心身の安らぎと憩いを与えてくれます。今、スローライフの重要性が叫ばれていますが、釣りは自然と共生し、人間の本来の生き方を教えてくれると考えています。

(2)青少年に対する情操教育効果

昨今、青少年が引き起こす様々な事件や凶悪犯罪が多発しています。その

最大の要因は、子供達を取り巻く環境が著しく変化し、自然体験、野外体験の不足から来るものと言われています。

子供たちが、人間として自立するためには、様々な体験や学習が必要です。しかしながら、今日の私達の生活は、文明の発達や社会の近代化により便利で豊かなものになった反面、社会には自然環境の破壊、人間同士のふれあいの希薄化、技術革新や情報化に伴う主体性の喪失、SNSの急速な進歩によ

る弊害など様々な問題が生じており、特に、今日の子供たちについては、健全な人間形成に必要な基礎体験をする機会に恵まれない為、自立心、忍耐力、公共心、おもいやりの心、感動する心などの欠如や、体力の低下等が指摘されております。

一方、自然体験の豊富な小・中学生は意欲的に生きている、人間関係能力に優れている傾向にあるというデータが出ています。

文科省の調査報告（全国47都道府県の368校、小学2年生から中学1年生、約1万人）でも、自然体験・野外体験の豊富な子供ほど正義感・道徳観がしっかりと身に付いている（約4倍）という発表がなされています。（文科省委託・青少年教育活動研究会アンケート調査）

そうした中で、残された自然環境を



社員研修で

活用して青少年教育の在り方を見直そうとする動きが、全国的に活発になってきました。

多感な子供たちが釣りをすることにより、自然とのふれあいや工夫、生き物の命の大切さ等を、野外体験を通して学ぶことが出来ます。釣りは自己責任能力、危険予知能力、判断力、想像

力、冒険心、人や生物に対する優しさ等を醸成してくれます。

また「バーチャルからは真の感動は生まれない」と発言し、今でも家族と一緒に山村で生活しているジユラシック・パーク原作者のマイケル・クライトンは「人間をはるかに超えた自然の様々な現象を教えてくれる」など、自然体験は心豊かで逞しい青少年を育む効果があると断言しています。

(3) 釣り人・釣界の義務と責任

私達は万物共有の財産である自然や、限られた天然資源の中で釣りを楽しむ以上、その前提として、釣り人としての義務と責任を果たしていかなければなりません。

魚釣りという行為は少なからず自然に対して負荷をかけています。又、一部の心ない釣り人の為に魚釣り全体のイメージを損なっているという事も見

逃してはなりません。

現在私達釣界に所属する企業（メーカー、流通、販売）、各種釣りクラブ等の釣り団体、一般釣り人などが会員となり、約半世紀前より公益財団法人日本釣振興会を結成し、健全な釣りの普及と自然保護等に様々な事業を展開しています。

全国の釣り人、釣り界関連企業から毎年2億円近い拠出金を集め、湖底・海底清掃、稚魚の放流、防波堤の開放、釣りマナーの向上等に積極的に取り組んでいます。そしてその成果として、釣り人が安全・安心して快適に釣りが出来る環境造りが展開されています。

当社も本事業を全面的に支援し、年間3〜400万円を拠出しています。

公益財団法人 日本釣振興会は以下のように『釣り人宣言』を提唱し全国支部をとおして釣りマナーの啓蒙・普及に努めています。

『釣り人宣言』

私達釣り人は、釣りを通して青少年の健全な成長を促すとともに、釣り文化を継承していきます。また将来に渡り老若男女が釣りに親しめるよう、ルール・マナーを守り、安全を最優先し、自然環境に配慮をします。その為に以下の事を宣言します。

一 ルールを守ります。
遊漁（釣り）に関する法令・規則を守ります。立ち入り禁止場所には入りません。

違法駐車・迷惑駐車はしません。

一 マナーの向上に努め、自然環境美化・保全に努めます。釣り場をきれいに保つため、使用した釣具やゴミは必ず持ち帰ります。漁業者や近隣住民の迷惑になる行為はしません。

一 楽しい釣りをするため、安全対策に努め事故を防ぎます。ライフジャケットを積極的に着用し、水辺での

安全に注意を払います。安全を最優先として、荒天時は無理をせず釣りを中止します。

一 健全なレジャーとして「釣り文化」を承継していきます。より多くの人々に釣りの楽しさと自然の大切さを伝えていきます。

(4) 釣界の活性化と釣り人口の拡大に向けて

釣界は、ブラックバスブームの影響が大きかった1998年をピークに、釣り人口（2000万人→1000万人）、釣具国内市場規模（約3400億→2000億）と大幅に減少しています。

主な原因としては釣りブームの一巡、環境悪化による釣り場の減少による釣行回数の減少、釣り離れ（魚が釣れなくなった）の加速が挙げられます。しかし、一般生活者の内、未経験者・

意向者の過半数の人は「釣り」に対して関与・関心があると言われていきます。そして未経験者・意向者の7割は釣りに対して行動を起こしていません。彼らの障害は「釣り」に興味はもったものの、行くにあたって技術面、用具面の知識がないのに加え、「教えてくれる人がいない、一緒に行ってくれ人がいない」ことが最も大きな原因になっているのです。釣は誘われないとなかなか始められないレジャーです。

このまま何もせずに手を拱いていると、いずれは衰退・消滅業種となる恐れもあります。

この状況をどのようにして切り開いていくか、1〜2社の力では限界があり、いかにして進むべく方向に釣界が一丸となり取り組む事ができるか、今、釣界は岐路に立たされていると言って

も過言ではありません。

私達は釣り人口の拡大に向けて可能性が高いと思われる企画・事業に集中して力を注げるよう専門部会を立ち上げ事業展開しています。

その一つとして、㈱リクルートライフスタイルが実施している「つりマジ！」に釣界として全面的に協力しています。「つりマジ！」とは若い人に無料で釣りの楽しさを体験してもらうことで、釣人を増やすプロジェクトです。若い釣りファンを獲得するために、日本釣振興会や日本釣用品工業会など、釣界の皆さんと一丸となって実施しています。又、全国各地で釣り教室の開催や、シルバークロッシング人材センターを設立し、入門者・初心者層に無料で現場での指導も予算組みして取り組んでいます。

おわりに

「幸せになりたければ釣りをしなさい」という中国の古い諺があります。

目まぐるしく変化する社会の雑踏を離れて、ひととき自然とふれあい、仲間と語り、至福の時間を過ごしてみませんか。きっと新しい発見があるでしょう。

私達、ささめ針の作品（商品）は人間と自然の接点にあります。楽しみや、またある時は自分の想いをも込められる、魚たちへの意思伝達の道具として、人々に喜びや感動を与えられるものだと思っています。

（山南町在住）



木と関わり、生業としてきた者の使命

丹波の山と共に

常任理事 足立 栄逸

父親が営んでいた木材店の手伝いをしていたが、父の死去により兄が会社を引き継いだのを機に、独立したのが昭和48年12月であった。

当初は小径木の丸太を土木用の型枠や杭への加工や、建築用の足場丸太、スギの梱包材を製造し販売していた。

丹波で育ったスギ・ヒノキは、その成長過程で適切な手入れがされていない事が多い。

節が少ないことを美とされていた従来の日本建築で使用されることが少なく、ヒノキの原木は奈良県の吉野や三重県の

松坂、岡山県の美作方面に流れていた。

当時は梁や桁の構造材は地松が主流であったが、松くい虫等の被害により徐々に減少し、その後アメリカからの輸入材である米松が主流となっていた。

そのような情勢のなか、私は丹波産木材の有効利用と需要拡大のため、外材や他府県産材から切り替えられるような製材・加工ができる製材所を目指した。

まず初めに取り組んだのは、丹波地域で弊社が初めてとなる、スギの平角（建築用の梁や桁）としての製品づくりであった。

進めていく上で問題となったのは、ス

ギ材は米松等と比べて強度が弱いとされていた点と乾燥することが難しいこと、そして丹波地域ではスギを構造材として利用している実績がほとんど無いことであつた。

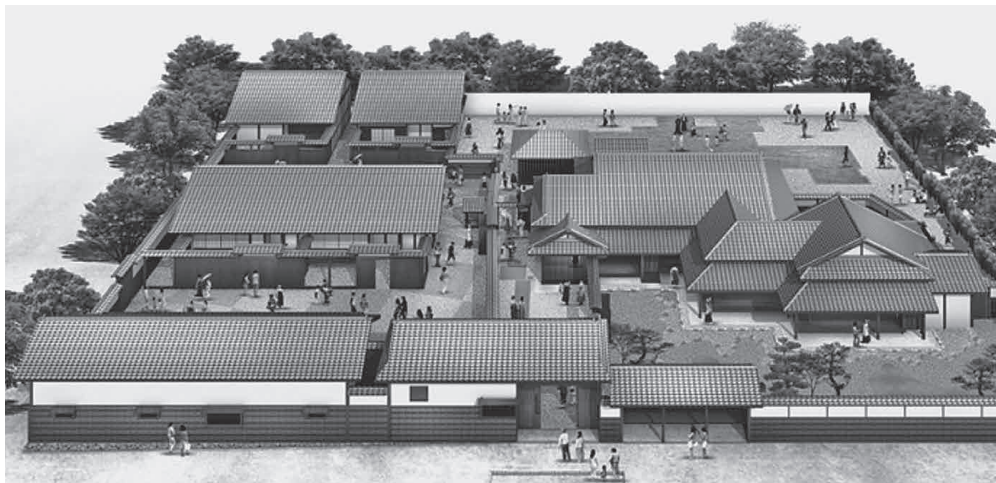
強度については、製品の寸法を1ランク大きくすることで強度が上がるよう対応した。

次に乾燥については、これまで天日による自然乾燥が主流であつたが、製材する過程で発生する木くずや木の皮を焼却炉で燃やす際に発生する熱を利用した乾燥機を造り、乾燥の温度・時間を変えて何度も実験を行い、独自に乾燥のノウハウを培いスギの人工乾燥をすることを可能にした。

一番苦労したのは、丹波地域の工務店や大工はスギの構造材を使った実績がなかったために、なかなか米松からスギに変えて利用してもらうことができないことであつた。



丹波市産木材が使用されている令和の天皇の大嘗宮



初代兵庫県庁の全景図

そこで自社で建築の部門を立ち上げ、
自社施工する物件に杉の構造材を利用し

た。

実際に使って問題がないことを工務店

や大工に見てもらったことにより、徐々に
利用してもらえるようになっていった。
次に構造材を製材する際にできる辺材を
有効利用できないか考え、スギ板材の製
品づくりをおこなった。

昭和後期〜平成はじめ頃のバブル期
に、別荘ブームによるログハウスの建築
がブームになり、その内装用に利用でき
るスギの壁材や天井材等の内装材の加工
を手掛けた。

内装材の加工については乾燥が重要と
なるが、弊社では構造材の乾燥で培われ
たノウハウを利用することで製品を作る
ことができた。

またログハウスは構造や内装共に木材
をたくさん使う建物であるため、ログハ
ウスを建てるのが木材利用の拡大につ
ながっていくことになると考え、自社で
不動産部門をつくり別荘地の分譲をはじ
めた。

スギの構造材のほか、ログハウス自体

の開発も行い自社独自のログハウスの製造・販売・建築とスギ・ヒノキ内装材の製造販売のほか、自社の建築物には積極的に提案し利用をすすめてきた。

自社の建築部門で実際に使用することで、製品の加工の良し悪しや改良点がかかること、施主から住み心地についての意見や感想をダイレクトに聞くことができるため、製品の改良に役立てることができた。

また都市部の建築家と協力し、加古川の源流である丹波産木材を、下流である都市部で利用してもらうプロジェクトにも参加。京阪神部で丹波市産木材の構造物や内装材をふんだんに使用した住宅が建築された。

このようにして丹波市産木材の利用を行ってきたことや、「公共建築物木材利用促進法」「木造利用推進法」等の法改正や脱炭素等による追い風もあり、丹波

市産木材の需要につなげていく事ができるようになった。

近年では、令和の天皇の大嘗宮や兵庫県の初代県庁舎の他、学校やこども園等の公共建築物や、一般住宅・店舗等にも丹波市産木材が使用されている。

しかし丹波市産木材の利用を推進・拡大する一方、毎日の生活の中で丹波の森林が荒廃し危機的な状態になりかけている現状がある。製材業で木材を生業にして来た身として、何とか森林の荒廃を改善していく事が急務であると考えようになった。

丹波市は、総面積4万9321haのうち約75%である3万7154haを森林が占めており兵庫県下では第3位の森林面積を誇る。そのうちの2万1100haがスギ・ヒノキを主体とした人工林で人工林率は第6位と、兵庫県下でも有

数の山どころである。

その森林に植栽されている人工林の林齢は、10齢級（46年生以上）が70%以上を占めており本格的な利用が可能で、有効に活用できる森林整備が必要である。

しかし森林の現状は、戦後植林したまま適切な手入れがされず放置された状態のところが多く、スギやヒノキの山に入ると一年中日差しが入らず薄暗い状態で、下草などの下層植物が生えていない為、土が剥き出しになった状態となっている。

そのような状態では森林が本来持っている水源かん養機能（地面の保水力により雨水が一気に流れ出るのを防ぐ）が失われた状態で、大雨が降った際には土砂災害の発生が懸念されている。

また下層植物が育っていない森林は、昆虫や草などの小動物の餌がない状態である為に、シカやイノシシが里に降りて

きて農作物を食い荒らす鳥獣被害も深刻な問題となっている。

その原因としては、木材輸入の自由化と円高による長引く木材価格の下落により、間伐を中心とした保育作業や、伐採・搬出等にかかる費用も回収できない為に収支が赤字になる。そのため、林業経営への意欲が低下し、都市部に雇用を求め、後継者の不足等により、昭和30年には約52万人いた林業従事者が平成27年には4・5万人にまで減少したことも考えられる。

丹波市でも森林組合の他は個人経営で事業を営んでいるところはあるものの、会社組織として林業を営んでいるところがなく森林整備が遅れていた。

そこで少しでも森林の整備を進めていくために、自社で森林整備の部門を立ち上げて、森林整備に取り組んでいく事に

した。

これまでは森林組合等に依頼して間伐等の整備を実施していたが、補助事業制の利用と間伐材の売上を足しても、山主に収益があることはなかった。

そこで作業の効率化や輸送コストの削減、有利な販売先の選択といったことに取り組み、山主に収益をもたらせるような取り組みに成功した。

森林整備を行い、さらに山主に収益をもたらすことが評判となり、森林整備の依頼が多くなっており、現在は毎年30ha〜40ha程度ではあるが少しずつ森林整備の実績を積み重ねている。

森林の整備を行い、そこから搬出される木材を有効利用して山主に利益を還元することによって、山林経営に取り組み山主が増えれば地域の雇用も生まれる。山林が整備され下層植物の生息や昆虫が

増えれば、シカやイノシシによる農作物の被害も減る。森林の公益的な機能も回復し自然災害も減少する。山からの肥沃な養分が川に流れ込むことによりプランクトンの餌となつて、そのプランクトンが魚介類の餌となる。

森林はすべての生物の源であり、森林を整備していく事は、自然界の生態系を正常に戻すことや自然災害の発生を抑制することにつながる。

森林を整備し、日本本来の山の姿に戻し森林の本来持っている働きを蘇らせ、動植物と共存しながら自然環境を守っていく事が未来の子孫のために出来ることと思っており、木に関わり生業としてきた者の使命と考えて取り組んでいる。

(青垣町在住、木栄会長)

丹波で泌尿器科医として32年

トップレベルの診療目指す

医療法人社団松下泌尿器科医院理事長 松下全巳



と話をいただき、丹波の泌尿器科の歩みと合わせながら自己紹介をしたいと思います。

初めまして。私は平成2年4月に県立柏原病院に赴任し、その後、柏原町で平成6年10月に泌尿器科医院を開業して今年で28年たち、合わせると丹波で32年過ぎたこととなります。今回、郷友会の大槻佐知子さんから「先生も丹波の生活が長くなったので何か書いてください」

で午前8時から午後7時まで忙しい状態。その上、三次救急の病院だったので当直は月に2〜3回あり外科系の外来救急、病棟患者の急変、休日は病棟の回診業務全てを担当し、他にも特殊救急部の当直や外科系手術の麻酔当番などの義務もあり、やっと点滴ができるくらいひよっこ医者が様々な先生のご指導の下、緊急手術の介助、小児手術の麻酔までも担当させていただきました。

私は神戸で生まれ育ちました。父と親子二代の神戸っ子で、神戸大学医学部の近くで育ちましたので、なんとなく大学も神戸になってしまいました。昭和56年に卒業後、泌尿器科に入局しました。当時は現在の研修医制度がなく各科に入局後、見習いの様な身分で研修を2年程送るのが普通でした。57年7月に関西労災病院に異動。当時ここは部長を除く2人の医師で48人を持つという激務の泌尿器科になっており順調でも普通の業務だけ

担当患者さんの経過が思わしくない時などほとんど病院に住み込んでいて、家に帰るのは週に1回くらいしか無いことも稀ではありませんでした（現在ならとてもブラックな職場ですね）。今思い返してもよくやってきたなあと思いますし、現在につながる技量の大半をここで習得できたのだと思います。昭和62年4月に西脇病院に転勤。診療を取り巻く環境も以前とは異なり、播州弁が飛び交うのどかな診療に人間らしさを回復した

日々でした。当時泌尿器科部長が病院テニス部の部長でしたので直前にテニスを始めていた私は当然のごとく赴任当日に入部しました。この時期に病院間交流として柏原・西脇病院テニス対抗戦があり柏原に毎月一度は訪れていました。この交流で後に赴任することになる柏原病院の医師、看護師、検査技師の多くに知己を得たことは、柏原病院への転勤に際して赴任以前に人間関係の垣根が取り除かれていたように思います。

ここで少し柏原病院の泌尿器科の沿革をお話しします。昭和56年までは西脇病院や大学から非常勤で医師が出張していたのですが、この年に常勤として黒田医師が赴任し、57年7月にその下に井谷医師が関西労災から（私と入れ替わりに）赴任し2人体制となりました。その後の科長は羽間医師、小川医師、次に私、以後中村医師、武中医師（彼は柏原時代の診療を基礎に、その後素晴らしい業績を

積み重ね現在鳥取大学教授になられています）、李医師、上野医師、吉村医師と続きました（沢山の医師が部下としていました。先生に始まり私、武中先生や部下の何人が関西労災出身で「国道176号線人守ルート」、また私、中村先生、武中先生は西脇からの異動と「神大泌尿器の北方守備隊」と医局のなかで揶揄されたりもしていました。

平成2年4月に県立柏原病院に転勤し丹波での生活が始まりました。研究生活とは無縁の現場育ちでしたので、当時県立病院のトップとしては医局一若輩でした。そのため病院での立ち位置を築くためストレス満載の生活でしたから一年余り蕁麻疹と円形脱毛に悩まされました。月日がたち様々な症例をこなすうちに、自信も出来、自分らしさも出せるようになり開腹手術での膀胱全摘や人工膀胱造設術、前立腺全摘手術は全国的に見て早

期に取り組み、後には他の基幹病院から手術の応援指導を依頼されるようになりました。しかしその頃の私の悩みは、地元一般医との間を橋渡しする専門泌尿器科医院がない為に、柏原病院で入院、外来全ての患者さんを丸抱えせねばならず外来診療が午後遅くまでになり病院に迷惑をかけていたことです。医師会の先生方から泌尿器科開業医の要望もあり、穏やかで診療しやすい土地柄もあり、その上個人的な事情もあって、それならと私が開業することになってしまいました。

この頃中国自動車道を北に越えると日本海まで泌尿器科専門診療所がほとんどない状況でした。まず開業に際し、地方であってもトップレベルの泌尿器科診療を実践したいという決意で、まず一つに積極的に学会に出席し発表すること、次いで一般の方への泌尿器科の啓蒙や多職種連携のためのレベルアップを図ること、三つ目出来る限り手術技術の研鑽

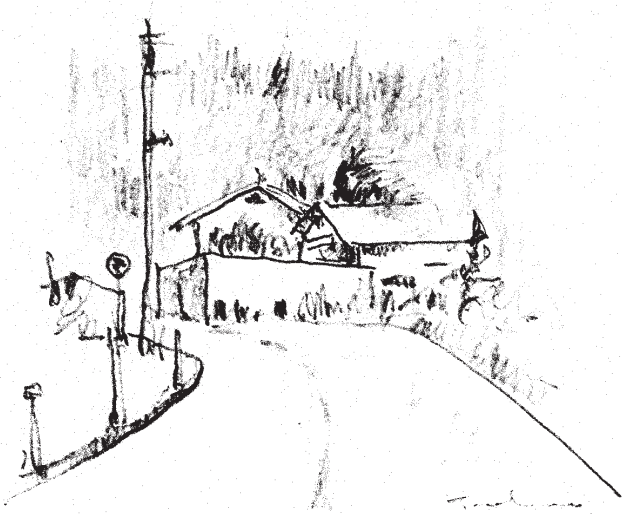
を積むこと、この三つを課した次第です。幸いに私の後任となった先生方は皆優秀で柏原病院泌尿器科のレベルが上がり、人員も3人となって充実する中で非常に良好な病診連携の関係を築くことが出来、折に付けお手伝いに病院の手術室に出向く日々が続いていました。

ただ平成16年に始まった新研修医制度に端を発した医療崩壊の余波で平成19年に泌尿器科（だけでなく他のいくつかの科も）がなくなり一開業医の枠を超える仕事を病院から要請され、加えて前立腺肥大症の内視鏡手術などを自院で日帰り手術をこなし、開腹の大きな手術は近隣の基幹病院で共同手術をお願いしたりで本当に大変な数年を過ごしました。24年4月に柏原病院泌尿器科が再開し医療センターに引き継がれ、近隣に泌尿器科施設も増えたことで、やっと患者さん個々とゆっくり向き合って診療できるようになってきました。そんな矢先、ご存知の

ように令和1年3月からの新型コロナ感染症の蔓延で診療にも色々な配慮が必要になり、ワクチン接種の仕事もありで、この二年は時間に流される日々を送らざるを得なかったのは非常に残念なことです。

永らく神戸から通勤し手術の日は診療所内の簡易ベッドで寝泊まりするという日々が続けていましたが、開業して三年目に医院を現在地に近距離移転をした際に四年間居住した柏原町内に、八年前に家を設けることができ私も晴れて丹波の住民になりました。どこまで頑張れるかはわかりませんが、これからも丹波の泌尿器科診療と地域医療に寄与していきたいと思っています。

（柏原町在住）



丹波の美術団体の変遷と丹波市美術作家協会の誕生

今から50年以上前の1967年、青垣の画家仲間（三水会＝現在も存続、年1回の定期展を開催されています）を中心に、『丹波美術協会』が結成されました。当時は、美術展などを見ようと思うと、阪神間の都会に行かなければならない時代でした。《丹波を美術の里に》というスローガンを掲げ、プロ・アマを問わず「出品希望者はどなたでもどうぞ」という自由で開かれた展覧会を年1回、氷上郡内の各町持ち回りで開催していました。この活動は40年の長きに渡って続きましたが、この間、《丹波文化会館展》を皮切りに、全国公募の《青垣日本画展》、《春日水彩画展》、《ウッドクラフト展》等が開催されるようになり、（後に前述の日本画展と水彩画展は《丹波大賞展》、《丹波市民展》《丹波アートコンペティション》と変遷しました）、更には氷上町に植野記念美術館も開館するなど、丹波に居ながらにして、いつでも美術展を見たり、出品したり出来るようになり、同協会としては、一定の役割を終えたとの認識で、新たな形での美術協会設立を条件に2008年、発展的解消を遂げました。

その後、新たな形を模索するのに約一年を要しましたが、丹波市在住で互いを美術作家と認め合う者同志が集い、『丹波市美術作家協会』を結成、2010年、《第1回丹波市美術作家協会展》を開催しました。丹波市内の美術文化の発展・向上を目指すのはもちろんのこと《市外にも広く丹波の美術を発信していこう》を目標に、県内外の気鋭作家を招待したり、西脇市美術協会や福知山方面の作家集団との交流展、回廊展など、様々な新しい試みを取り入れながら一昨年、10周年を迎えました。盛大な記念展を企画していましたが、コロナ禍により2年間の延期を余儀なくされ、先頃（令和4年6月）無事記念展を終了したところです。

協会結成時、会員数 名でスタートしましたが、現在は23名に増員しています。

この度、関西丹波市郷友会の役員会に於いて、誌上ギャラリー掲載の了承を戴きました。今号より表紙のテーマが刷新され、6回で一巡する予定ですので、私たちもこれに合わせて、数名ずつ順次紹介させていただきます。

丹波市美術作家協会 会長 磯尾隆司

足立慎治 [絵画・氷上町]



「ステイホーム (馳せる)」油彩 (162 × 194cm)
2021 年作



「帰り道」油彩 (130 × 162cm)
2020 年作



「光」油彩 (112 × 194cm)
2017 年作



「春しのびよる」油彩 (162 × 194cm)
2018 年作

プロフィール

- 1973年 氷上町に生まれる
1996年 武蔵野美術大学 造形学部 油絵学科卒
2008年 新世紀展 損保ジャパン美術財団奨励賞受賞
昭和会展 優秀賞受賞
2012年 兵庫県展 大賞 (知事賞) 受賞 新世紀展 刑部人賞受賞
2016年 雪梁舎フィレンツェ賞展 フィレンツェ美術アカデミア賞
2017年 新世紀展 新世紀賞
2018年 新世紀展 東京都議会議長賞
現在 新世紀美術協会会員 日本美術家連盟会員

田中利明 [写真・氷上町]



「やんちゃ盛り」(敦賀市 敦賀まつり)
2017年



「ライジング・サン」(神戸市ビエンナーレ) 2012年



「貌」(香川県善通寺市 腹踊り)
2009年



「共演」(丹波市氷上町) 2011年

プロフィール

- 1932年 氷上町に生まれる
- 1997年 丹波の森公苑招待作家となる
「県展」 入選4回
- 2012年 「朝展」 大賞
神戸市「原田の森ギャラリー」 個展
- 2014年 丹波市「植野記念美術館」 個展
- 2016年 丹波市「月あかり」 個展

足立 進 [絵画・氷上町]



「埠頭の夏」アクリル (S50)
2015 年作



「セメント工場の休日」アクリル (S50)
2013 年作



「田植えの日に」アクリル (F10)
2022 年作



「谷の村の赤い屋根」アクリル (S50)
2017 年作



「春待つ日に」アクリル (F50)
2006 年作

プロフィール

- 1963 年 青垣町に生まれる
- 1998 年 第10回全国公募春日水彩画展 奨励賞 (以後同展入選6回・佳作賞1回)
- 1999 年 第16回全国公募福井サムホール展 優秀賞 (以後同展優秀賞3回・奨励賞2回)
- 2001 年 第4回全国公募八千代風景画展 優秀賞 (同第5回展優秀賞)
- 2006 年 第2回篠山市展 最優秀賞 (河合賞)
- 2009 年 第4回全国公募丹波美術大賞展 優秀賞 (同展第1回~10回展まで入選)
- 2022 年 第3回 UEBIART 展 (個展・植野記念美術館招待)

現在 丹波市立柏原中学校勤務 丹波市美術作家協会 事務局

「ふるさと」に恩返し

地域活性化を基本に

中兵庫信用金庫 理事長 足立 厚郎



私は丹波市青垣町で生まれ育ち、幼少期は姉妹が可愛がられる様子を羨ましく眺める一方で、私に対しては両親から厳しく育ててもらった記憶が残っています。また、厳格な父の後姿を見て育った

せいか、気がつけば自然と正義感が養われていったような気がします。

今でも、筋が通らないことや間違ったことは嫌いで、自分ができないことは他人には押し付けられないという強い信念の礎となりました。

学生時代は関東で過ごし、東京方面での就職も視野に入れていましたが、長男ということもあり、丹波に戻ることを決意しました。

地元で就職するにあたり、いろいろな選択肢もありましたが、当時、水上郡では町単位の役場であったことや他金融機関も営業エリアの縛りが強かったため、

様々な地域でいろいろな人との出会いや金融サービスを通じて地域に貢献できる仕事をしたいたいの思いから当金庫へ入庫することとなりました。

入庫当時は、慣れないそろばんや真新しい仕事で、たくさんの失敗や苦労もありました。

しかしながら、お客さまに育てられ、いろんな方との出会いがあったからこそ今の自分があり、本当に感謝しかないと感じています。また、入庫当時から、人にも自分にも絶対に負けたくないという強い信念が人一倍あったような気がします。今では趣味となったゴルフも、関係団体でのゴルフコンペでの悔しさを糧に、上達したいとの一心で50代半ばから打ち込んだ記憶が、今となっては懐かしく感じる今日この頃です。

今年で当金庫理事長に就任して10年の節目を迎えましたが、私自身も本当に貴重な経験と大切な時間を地域の皆さまと

ともに過ごすことができました。

当金庫は、1969年10月の発足以来、常に地域や地域のお客さまとともに手を取り合いながら歩んできました。2019年10月には、合併創立50周年を迎えることができ、このような大きな節目を迎えることができたのも歴代の総代の皆さま、地域の皆さま、諸先輩方の皆さまを始め、各関係団体の方々のご支援、ご指導の賜物であると心より感謝申し上げます。

振り返りますと、昭和の時代は、高度経済成長とその後のオイルショックを乗り越えた日本経済の発展とともに、当金庫は店舗ネットワークの拡充を進め、業容の拡大に伴いそろばんの時代からコンピュータの時代へと変遷し、事務処理も大きな変革を遂げました。

平成の時代に入り、社会情勢の変化と金融自由化の進展とともに、金融機関の経営に対する自己責任が強く求められる

ようになり、常に「堅実健全経営」という不変の理念を貫き、様々な金融支援や事業に取り組み、ゆるぎない経営基盤の強化を図ってきました。また、これまでの「ふるさと」である「丹波本部」に加え、第二の拠点として「三田本部」を開設しましたが、三田本部の正面玄関ホールには「丹波の名工」である彫刻作家、磯尾氏の彫刻作品を飾っております。

これは、丹波から離れた地においても、私たちは丹波に支えられてここまで成長できたこと、これからも丹波の発展に寄与すべく常に謙虚な姿勢で真摯に取り組み、初心を忘れることなく、相互扶助の精神で丹波の歴史ある地域性や優位性、その素晴らしい賜物を大切に次世代へ継承するためのシンボルとして、丹波地域の皆さまと当金庫との絆をこれからもより強く結びつけたいとの思いが詰まっています。

新時代「令和」を迎え、誰もが華々し

い時代の幕開けとともに心を躍らせた訳ではありませんが、予想だにできなかった新型コロナウイルス感染症とその長期化、金融業界では非対面型金融サービスへの移行やリモート会議、最近ではロシアのウクライナ侵攻に伴う資源価格の高騰など、どこか無機質で暗いニュースばかりが飛び交っている状況であります。また、丹波地域に限らず、人口減少や少子高齢化が進展するとともに、中小事業者の事業所数減少や経営者の高齢化も進行の一端を辿り、事業承継問題も大きな課題となっております。

2020年以降は、新型コロナの影響で私たちの生活環境は一変し、地域経済にも大きな影響を与えることとなりました。金融業界全体的にも、不安定な為替市場や原油価格、物価の高騰など、国内外の経済活動に悪循環をもたらし、金融機関を取り巻く経営環境も更に厳しさが増すものと考えています。このような状

況下、私たち信用金庫には何ができるのか、信用金庫としての原点回帰とその基本について思いを巡らせてみました。

信用金庫は協同組織金融機関として地域社会に密着し、地域のお客さまに貢献するとともに、人との出会いや繋がりを大切に、「Face to Face」という信用金庫の基本理念に忠実かつ謙虚に取り組むことが大切であると考えられています。地域の空気を感じ、地域の変化を共有しながら課題解決に向けて地域、お客さま、役員が一致団結し、ともに歩んでいくことが信用金庫のあるべき姿ではないかと感じています。

昨年10月には、兵庫県下11信用金庫で手を取り合い、各信用金庫より取引先事業者を選定し、「地元産品販売支援事業」と題して当金庫が考案し旗揚げを行いました。これは、各信用金庫の役員が、他信金の取引先事業者が手掛ける地元産品を購入するという企画であり、その事

業者や地域の特性、素晴らしい産品があることを知ってもらい、コロナ禍における地元取引先事業者の販売促進を目的として、地域活性化に向けた起爆剤の一助になればとの思いを込めた支援事業でありました。出品いただいた事業者さまには、特に丹波市産品も多く提供いただき、大変喜んでいただくとともに厳しい経営環境下においても地域と信用金庫がともに手を取り合えば、この先の未来においても共存共栄できると実感することができました。

コロナ禍においては、「対面」の持つ意義が見直されつつあり、「Face to Face」を最大の強みとする信用金庫にとっては少々痛手となつています。しかしながら、私たちはこれからの地域の皆さまや地元事業者さまにとつての「真のパートナーシップ」が築けるように地域の発展に貢献し、その社会的使命が果たせるように真摯に取り組む姿勢

に変わりはありません。

コロナ禍で混沌とした社会情勢に翻弄される中、デジタル化による迅速性や利便性がまるで特急列車のごとく追求されています。

しかしながら、私たち信用金庫役員としては、その時々丹波地域特有の風土や香り、人との出会い、繋がりを大切にしながら各駅停車の列車で未来に向けて一歩ずつ地道に進むことも大切ではないかと感じています。

まずは、肩肘張らずに当金庫の身の丈に合った「今、できること」を着実に実践し、少しでも「ふるさと」丹波への恩返しができるように、これからの若い世代が「ふるさと」丹波を大切に継承し、明るい未来へ向かって走り続けるためのお手伝いが少しでもできるように、これからも役員一同、懸命に取り組んでいく所存であります。

(青垣町在住)

観光の玄関として大役担う

道の駅「丹波おばあちゃんの里」

丹波ふるさと振興株式会社 社長 柳川 拓三



リニューアル工事竣工式（2022年3月26日、右端筆者）

回想

「インター周辺は寂れる」そんなジンを回避しようと発足したのが、旧春日町時代の「春日インター周辺施設整備検討委員会」。二〇〇一年のことである。私は春日町観光協会からメンバーの一人として参画した。当時第三セクター方式による失態が世間の物議を醸すことも多々あったが、「行政との役割分担を明確にし、民間活力を導入する」視点は結果を導く上で理に適っており、春日町民からも出資を募り資本金4千万円（内春日町二千万円）の「春日ふるさと振興株式会社」は二〇〇四年四月一日に創業

した。その年の十一月一日に丹波市が誕生し、この事業は丹波市に移管する。そして国土交通省の道の駅の認可を受け、二〇〇六年四月八日に道の駅「丹波おばあちゃんの里」はオープンした。「春日ふるさと振興株式会社」はその施設の指定管理者として丹波市の行政財産を管理運営することで農業振興と共に地域の活性化を計っていくミッションを背負っての誕生であった。物産館、農産加工場、約一〇〇台の駐車場、広々とした芝生公園、頓挫した飲食スペースの空き地に加え道の駅エリアのトイレ、道路情報室と休息スペースを管理運営する。当時の春日IC周辺には田んぼが広がるだけで何も無かった。こんな所にこんなもの作ってたって：「陰口も聞こえてきた。実際広い駐車場に何台の車が：と不安もよぎったものである。生産者部会の会員も現在一七〇名余りであるが当時は四七名だったと記憶している。幸い開業年の七月に



リニューアルされた店舗



客でいっぱいの店舗内

は春日から和田山まで豊岡道が開通し、同年に「道の駅但馬のまほろば」「道の駅但馬蔵」も開業した。ご来店のお客様

より「エッ！飲食が無いの？」との声も多く、開業から六年後二〇一二年四月二一日多目的交流施設（フードコート）レス

トラン）がオープンする。売り上げ的には開業年度、丹波市が予定していた一億七千万円を達成して、その後も順調に推移しフードコートが開業した年度は三億円を突破した。徐々に周辺の開発も進み秋シーズンには芝生公園も臨時の駐車場と化し、周辺の交通渋滞を巻き起こす事態となっていた。時代の変遷の中で「道の駅」「丹波おばあちゃんの里」の役割は大きく変化した。国策としてドライバーの為に「道の駅」は地方創生の要となり、農業振興を柱とした「丹波おばあちゃんの里」は市外からの観光（交流）入込客の玄関口として大きな役割を担うこととなる。

大転換と再構築

観光立国を掲げ、交流人口の増加で活力を見出す国策は、丹波市においても同じ視点思考が必要である。人口減少は避けられない課題である。ならば、観光の

みならず関係人口を増やし市外との交流促進による持続可能な仕組みを構築していかねばならない。丹波市に内在する強み、魅力に磨きを掛け目的地として選ばれる丹波市にならなければならぬ。それは都市部には無い丹波市の観光資源というモノ価値を経営資源に置き換え、コト価値（応用・活用）に動化させ必要とされる未来指向の経営戦略が必要となる。丹波市は施設の再整備に着手し、農業振興の拠点から観光振興の拠点として農業も含めた観光地経営の視点で丹波市創生を図っていく。一方、丹波市観光協会も主に丹波市からの補助金外郭団体であったが、令和元年に一般社団法人に法人化した。又、丹波市にとっては市外からの一番の玄関口であり、周辺地域との広域連携を考えた時、丹波市観光協会の本部機能を春日に移すのが得策と考え、丹波市商工会の旧春日支部跡に移転した。令和四年三月二六日、道の駅「丹

波おばあちゃんの里」はリニューアルオープンした。物産館は約二倍に拡張、観光情報センター「丹波ええとこナビ」が新設、芝生公園に駐車場が整備、遊具も2基新設された。好調な滑り出しで今期は五億に届くような勢いである。観光庁が取り組む「第二のふるさと作りプロジェクト」。帰るように旅をする。大型観光地ではなく一年に何回も気軽に訪れて欲しい。「丹波おばあちゃんの里」には、おばあちゃんが孫を「よう帰ってきたな。お帰り。」の温かいメッセージが込められている。十六年前の思いが正に現実のものとなろうとしている。今後は、玄関口「丹波おばあちゃんの里」に立ち寄られたお客様を丹波市内に周遊してもらう仕掛けを観光協会と共に模索していきたい。十六年前「もしこの種を蒔いていなかったら…」種は芽を出し確実に時流の中に活きている。他界された委員会の座長であった村上完二様、当時春日町

長で初代社長の滝本信好様、開業に向け大変お世話になった佐々木徳蔵様、初代丹波市議会議長の山本忠利様、初代生産者部会長の野花敏郎様。皆さんの意思是シツカリと受け継がれ、「春日ふるさと振興株式会社」は「丹波ふるさと振興株式会社」に名を改め頑張っていますよ。今後の成長を見守ってください。手を合

わせる今日である。

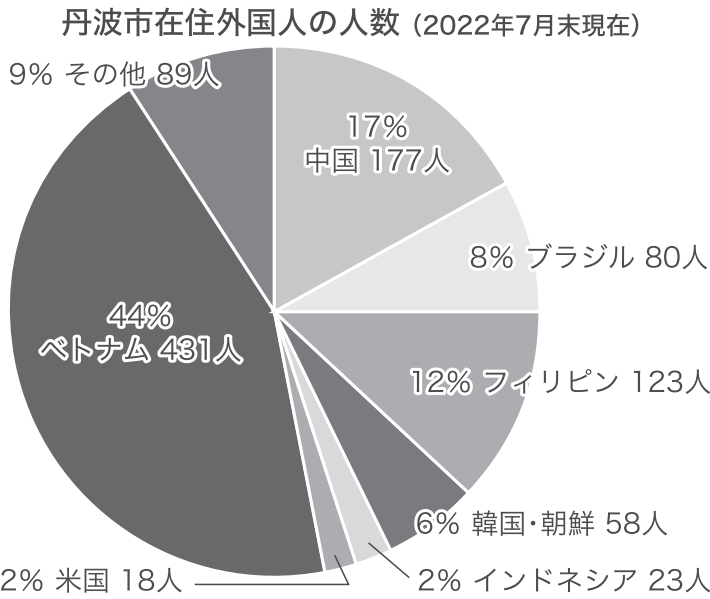
（春日町在住、丹波市観光協会会長・

やながわ社長）

国際化の波受け活動を充実

丹波市国際交流協会

常任理事、丹波市国際交流協会会長 山口直樹



丹波市では、2022年7月末現在、外国人登録者数は、1017名、31ヶ国の人が住んでいます。

一番多いのがベトナム人で431名です。その次が中国人です。詳しくは、図をご覧ください。

日本全国では、約282万人で日本の人口の約2%です。因みに丹波市では約1・7%です。国際化の波が丹波市にも及んでいます。丹波市で何をしているのかというと、日本人と結婚している人等もいますが、一番多いのが実習生として、市内の企業で働いている人達です。

丹波市国際交流協会は、旧氷上郡6町

が合併して丹波市になった(平成16年11月1日)のを受けて、平成16年12月に合併協議会を設立して、各町からの委員で協議し、旧氷上郡の6町がそれぞれ取り組んでいた国際交流活動を統合する形で、平成18年(2006年)丹波市国際交流協会として発足しました。丹波市からの財政支援を受けて活動しています。その活動について紹介します。

(1) 在住外国人への生活支援

①生活支援相談など通訳者派遣及び翻訳業務の実施

通訳を必要とする外国人住民への通訳者の派遣及び書類などの翻訳を通して、暮らしの安心への支援を行なう。丹波市と丹波市国際交流協会との業務委託契約により、ボランティア登録者が対応に当たっています。

②「なんでも相談会」の実施



日本語スピーチコンテスト

③料理教室開催
 丹波市の人権啓発センターと自立支援課と共同して在住外国人を対象とした「なんでも相談会」を実施しています。

④日本語教室の実施
 在住外国人を対象に、日本の料理等を教える教室を年に1回実施しています。

⑤日本語支援員研修会の開催
 日本語講師による「日本語授業見学会」の実施。日本語を教える支援員の学習会です。

⑥丹波市「子育てガイドブック2021年版」翻訳電子書籍化作業務
 外国人住民の方に、子育てに関する情報を広く発信することを目的として、丹波市「子育てガイドブック2021年版」の抜粋情報を、専門の業者に委託して、ベトナム語及び中国語に翻訳し電子書籍化を図りました。

⑦丹波市国際交流協会からの発信
 公式LINE、やさしい日本語で、在住外国人に市役所からのお知らせ（例えば、ワクチン接種の事、10万円給付等）や協会からのお知らせ等、彼らに役立つ情報を流しています。

③料理教室開催
 在住外国人を対象に、日本の料理等を教える教室を年に1回実施しています。

④日本語教室の実施
 ・春日…日本語教室「ようこそ」
 ・毎週木曜日、18:00～21:00
 ・場所…春日住民センター
 在住外国人にとって、日本語が出来ないと何かと不便利です。その為に、希望者に、無償で日本語を教えています。
 生徒さんの日本語の習得レベルは、それぞれ違いますので、支援者と学習者が1対1で支援・学習をしています。
 支援者は、ボランティアです。学習者が増えると支援者も増やす必要があります。色々なルートで支援者を探しています。また、支援者に下記の研修会を行なっています。



日本文化体験餅つき

(2) 国際理解の推進

① 多文化共生事業の開催

多文化共生講演会「誰もが安心して暮らせる社会をめざして」

毎年秋にポップアップホールで実施しています。

昨年度は、オープニング「ベトナム出身女性6名による民族舞踊」

講演会 星野ルネさん（タレント・漫画家）による「アフリカ少年が日本で育つた結果」

外国人住民による日本語スピーチ大会
8名の外国人によるスピーチ（テーマは自由）等を行いました。

② 在住外国人から募集した写真の展示

7～8名から応募があり、多文化共生講演会の会場及びゆめタウンで展示しました。

③ 情報誌の発行

年2回、HPの更新、公式LINEによる外国人に役立つ情報の発信

④ エコキャップ活動の推進

エコキャップ活動とは、持ち込まれたペットボトルのキャップを（株）姫路環

境開発エコキャップ活動委員会が引き取り、『世界の子どもにワクチンを日本委員会（JCVC）を通じてワクチンを届ける活動。キャップ持ち込み団体は、市内小中学校、企業、地域団体等。当協会は、全て無償で取り次いでいます。

(3) 国際交流活動の推進

① 稲美町国際交流協会との交流事業

稲美町から20数名の外国人実習生が丹波で「黒枝豆の収穫体験」をしました。

② お餅つきと風呂敷の素敵な結び方教室
臼と杵で餅つき体験を実施後、専門講師の「風呂敷の包み方教室」を実施。

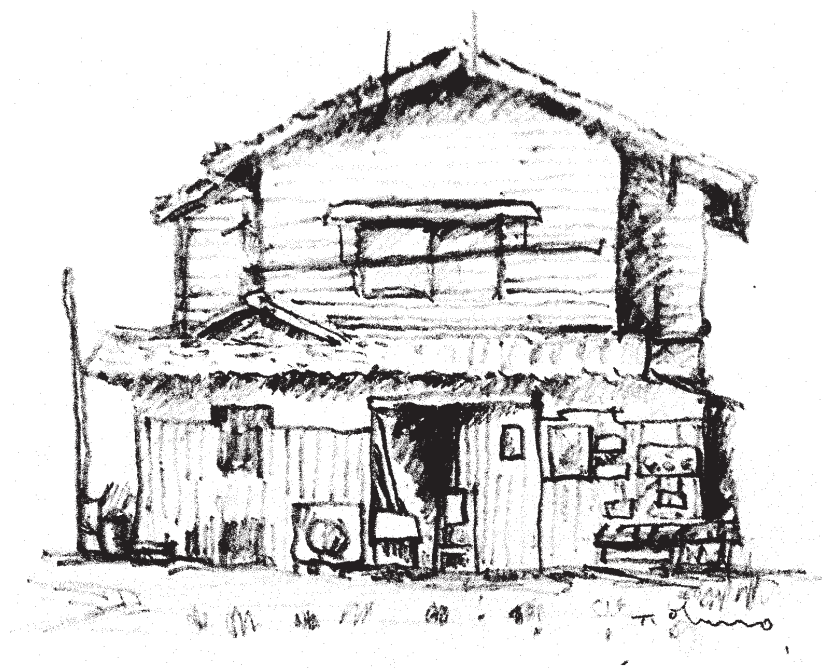
③ 日本文化体験事業

ここ2年ほどはコロナ禍で、実施出来ていませんが、これまでは、和菓子作り体験、吹き戻し作り体験等を実施しました。

④外国との友好交流事業

丹波市と姉妹都市であるアメリカ合衆国ワシントン州のケント市、オーバン市と、中高生の相互訪問（10日間）の実施。ここ2年ほどはコロナ禍で実施出来ていませんが、過去20数年継続しており、その間に約350名の日米の中高生が相互訪問しました。また、丹波生郷国際交流協会（丹波市国際交流協会の支援団体）主催の、東小学校とオーストラリアのオークリーサウス小学校との小学生の交換交流を行なっています。全国的に見ても、小学生の交換交流は珍しい取り組みです。

（氷上町在住）



「ミライズそら」開園に携わって

全国に注目浴びた園舎

初代 認定こども園ミライズそら園長 山口 洋子



ミライズそら園舎全景

はじめに

現在、丹波市には8つの社会福祉法人が運営する13の幼保連携型認定こども園がある。

認定こども園は、0～5歳児が利用することが出来、幼稚園と保育所の両方の良さを併せ持っている。また、子育て相談や親子の集いの場の提供等地域における子育て支援の機能を備えた兵庫県知事の認可を受けた施設であり、保護者の就労の如何を問わず就学前のこどもを受け入れ、幼児教育と保育を一体的に提供することが出来る施設である。4つの類型〔幼保連携型・幼稚園型・保育所型・地

方裁量型〕があり、丹波市では13園とも幼保連携型となっている。

私が「丹波市の認定こども園構想」を初めて耳にしたのは、氷上郡6町が統合し丹波市になって間もない平成18年であったと記憶する。当時私は、現職で和田中学校に教頭として勤務していた頃であり、その後、自分が就学前教育・保育に関わることになるとは思ってもよらなかった。

教育改革の動向

その頃、急速かつ持続的に変化する現代社会の中で、今までの知識偏重型の教育では乗り越えられない時代が到来したと言われるようになった。社会は、個人の属する地域や国を超えて相互依存するようになり、グローバルズムへの適応力が求められる21世紀型能力の育成が課題となってきたのである。

また、少子高齢化、環境、貧困格差等々

難題が山積し、コンピテンシーの育成が不可欠となった。教育における世界の潮流は、ヘックマンの研究等からも、乳幼児教育への投資がクローズアップされ、非認知能力の育成が重要であるとされたのである。



園庭と内廊下

そのような中、国では幼保一元化の施策が進んだ。これが、認定こども園が生まれた背景である。幼稚園と保育所は、設置根拠となる法律や管轄の省庁、設置される目的が異なる。幼稚園は、教育基本法を根拠に文部科学省が所管し、教育を行う機関である。これに対して、保育所は、児童福祉法に基づき厚生労働省が所管する。幼稚園は幼稚園教諭が指導にあたるが、保育所は保育士が保育する。就学前教育としては、幼稚園が請け負っていたのである。

しかし、近年の共働き世帯の増加により、保育所需要の高まりと幼稚園需要の低下が深刻化してきたことが全国的な実態であった。

そこで、管轄を内閣府として、厚生労働省・文部科学省のどちらも携わっている認定こども園が新たに設置されたのである。

それまで個々に作られていた幼稚園の

指針としての「幼稚園教育要領」、保育所の指針としての「保育所保育指針」、そして、認定こども園の指針としての「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」が、0～5歳の発達に即して整備され、就学前教育の統一が図られた。

指針改訂のキーワードとして

- ① 幼児期に育みたい3つ「資質・能力」
- ② 幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿

③ 子どもの「主体的で対話的な深い学び」(アクティブ・ラーニング)

④ 「環境を通じて行う」保育・教育

⑤ 子ども主体の「遊びが学び」の教育
(カリキュラム・マネジメント)

⑥ 小学校教育との接続

(アプローチ・カリキュラム)

(スタート・カリキュラム)

等が挙げられ、様々な取り組みが行われた。

また、職員については、0歳児～5歳

児と幅広い年齢の子どもたちを預かることができるよう、新たに幼稚園教諭免許状・保育士と両方の資格を持った「保育教諭」の資格が新設された。

丹波市が直面していた課題

丹波市に於いても、就学前教育・保育の実態は、国の状況と同じように幼稚園の定員割れなど次のような課題があった。

- (1) 定員超過と定員割れの二極化
中心部に位置する保育園では定員を超過し、周辺部では定員割れの状態。
- (2) 施設の老朽化
公立・私立を問わず老朽化の施設が多く、改築が必要。
- (3) 就学前教育・保育の地域格差
丹波市内に於いて、施設がない地域があったり、教育期間が1年保育制や2年保育制であったり地域によって異なる状態。

(4) 少子化の進行

0～5歳の就学前児童数は、平成16年で3,979人。平成27年までの12年間で22%にあたる907人減少し3,072人となるが見込まれ、一定集団の中で、共に育つ体験を十分に得ることが困難な状況。

(5) 多様化する保育ニーズ

核家族化や共働き世帯の増加により、就学前教育に対するニーズが多様化した。一部地域では、小学校入学まで保育園に在籍し、幼稚園への希望が0人となったため、幼稚園は休園状態を余儀なくされた。子育てと仕事が両立出来る保育サービスが求められた。

丹波市認定こども園構想

そのような中、平成18年12月「丹波市こども園に関する基本方針」が策定された。今後おおむね10年の間に「認定こども園」を全市に広げるというものである。



屋上でさくらランチ

また、運営母体をすべて法人等にするというものであった。

保育所と幼稚園が就学前教育の主流であった当時、「認定こども園」という新しい制度は、保護者にとっても、そこに携わる教育・保育関係者にとっても未知の制度であり、その内容を理解するには、多くの機会と時間が必要であった。また、丹波市立の保育園や幼稚園がなくなることにについては、大きな衝撃と波紋が広がった。実際に認定こども園が開園となるまでには、具体的に解決しなければならぬ課題が多くあり、教育委員会での校長会会議でも取り上げられたが、ここではその内容については省略する。

この認定こども園構想の発表は、特に幼稚園・保育所共に公立であった柏原地域に於いては衝撃であり、柏原地域の認定こども園が平成31年4月の開園にこぎ着けるまで、およそ12年の年月を要することになった。

柏原地域の認定こども園設立に向けて

前述のように幼稚園・保育所共に丹波市立の施設であった柏原地域に於いては、認定こども園の必要性を疑問視する声や母体となる法人がない状況で運営形態をどうするのかなど課題が山積していた。柏原町総代協議会（現柏原町自治会長協議会）では、平成22年12月から9回にわたり推進に向けての話し合いが行われた。しかし、総代協議会だけで協議を継続することに限界があり、幅広い分野の人選によりさらに協議を進めることが必至になった。その後、地域協議会、運営法人設立協議会、運営法人設立委員会と体制を整えながら具体的な推進へとこぎ着いていくのであるが、結果として、12年の間に数十回に及ぶ協議を重ねることとなったのである。

平成24年12月からの地域協議会では新たに保護者、民生委員、保育所・学校関係者など幅広い立場の参画を得て、柏原

地域で東西に2園の認定こども園の開設を目指すこと、柏原地域住民の総意による地域が運営する法人の新たな設立を目指すことが決定した。

平成26年10月からは、示された方向性に基づき、法人設立に向けた協議・検討を行う組織が設置され、設置場所は、柏原保育所、柏原西保育所の現有地で、柏原保育所は増改築、柏原西保育所は新築により、平成31年4月開園を目指して行くことが決定した。

私に園長就任の声がかかったのは、この頃で、当時私は、青垣中学校校長を退職後、丹波市立植野記念美術館に館長として勤務していた。小学校・中学校の経験はあったものの就学前教育についての識見は乏しく、不安に思いながらも、私に出来ることがあるならと重責をお引き受けし、柏原地域認定こども園運営法人設立委員会のメンバーとしてスタートすることになった。

課題山積の中で

設立委員会の設置によって具体的な歩みを始めた柏原地域の認定こども園であるが、課題は山積であった。法人はもとより、資金もゼロのスタートである。推

進体制・資金調達共に丹波市の積極的な

支援を求めながらの歩みであった。

規模については、定員・設置クラス

数・園庭の捉え方、園舎構造の在り方等、

園児数の長期的な展望にたって今後プロ

ポーザル書類作成の中で確定して

いくこととなった。工期中の保育

の安全と教育環境の確保について

も、日々の保育を行ないながら長

期の建設工事を進めるため、園児

の安全確保・教育環境の担保には

特に配慮が必要であり、保護者へ

の説明も丁寧に行った。

職員確保に関しては非常勤職員

の期限付き雇用に向けての条例改

正等「丹波市一般職の任期付職員

の採用に関する条例」などの整備

も必要であり、条例改正が行われ

た。

現幼稚園・保育所に勤務する市

職員への雇用に係る説明と理解に

より、失業不安を解消し、新たな就学前

教育に取り組んでもらうための取り組み

も要請した。丹波市認定こども園推進課、

子育て支援課との連携体制は不可欠で

あった。

園舎建築

柏原西保育所に新築となる園舎設計は

手塚建築研究所、施工は吉住工務店に決

まった。手塚貴晴氏は、OECD（経済

協力開発機構）から世界で最も優れた教

育施設に選ばれた「ふじようちえん」の

設計者である。「ふじようちえん」は、特

色あるデザインとして中学校美術の教科

書や建築学科のテキストにも掲載されて

いる。ちょうどこの頃、「情熱大陸」に

出演され、柏原にどんな園舎が建つのか

と期待を膨らませながらテレビに見入っ

た。

柏原西保育所の園庭に新しく建築され

ることになった新園舎は、緑の田園風景



直径12mの円形渚プール

に溶け込み、柏原の歴史を彷彿とさせる高床式の木造平屋建ての園舎である。地上高1・2mの高床の床下は子どもたちが潜り込んで遊ぶことが出来ると共に、景色の見え方を変えることで風景を印象づけ、快適な空気環境を得ている。

保育室からはオープンデッキのように深い軒に囲まれた外廊下が続く。雁行型の空間配置で、中庭を囲む形で保育室が配置され、園舎自体が巨大な遊具として子どもを育む環境となることをコンセプトに作られている。行き止まりのない外廊下は、子供達の遊び場でもあり、日射や空気環境を制御する機能も果たし、乳児の散歩コースにもなっている。

フラット屋根の屋上に上がると、田園風景と緑と山並みを360度、一望に見渡せ、緑の田園風景、一面の雪景色、雨上がりの虹と季節の変化や風を五感で感じることができ、開放感にあふれている。西保育所でのシンボルツリーであった

桜は、できる限り残し、園舎を囲むように配置され、桜の季節には、屋上でのお花見ランチも楽しめる。

隣接地の寄付もあり、水遊びスペースも設置することが出来た。直径12mのお皿のような円形プールである。渚状の周囲が水遊びに適し、2基の噴水と合わせ、水遊びシーズンになると子どもたちの歓声が響く。水を使わない時期には、鬼ごっこやボール遊びなど多目的に年間を通して利用できる。夏の終わりには、アマゴを放流し、アマゴつかみから食育につながる取り組みも出来た。

保育室は、桐のフローリングでオンドル式の空調が特徴である。冬でも床は暖かく、子どもたちは、年中素足で過ごしている。

完成した園舎は、2019年度グッドデザイン賞（日本デザイン振興会主催）受賞、兵庫県では、第21回人間サイズのまちづくり賞知事賞を受賞した。

また、「近代建築」2019年10月号では、「保育建築の計画と設計」特集で紹介され表紙を飾っている。2021年3月には、韓国の建築雑誌でも紹介され、こちらにも表紙に採用された。2021年8月には、NIKKEIプラス、競技場・学校・公共施設の美しき現代の木造建築ランキングで、「建物を囲うように回廊があり、大きな遊具のような複雑な空間配置を現代の構造技術で実現し、周囲の田園風景にもなじむ豊かな子どもの居場所がある」として5位に入賞した。ちなみに1位は、東京五輪・パラリンピックのために新設された有明体操競技場である。

園名公募

園名は公募により「ミライズにじ」「ミライズそら」に決定した。

ミライズは、「未来」と「ライズ」を組み合わせた造語である。Riseには、

「陽が昇る」の他に「進歩する・大成する」意味があり、子どもたちの未来に続く健やかな成長の願いが込められている。

「そら」は、緑の田園風景の中で隔たりのない空と一体になった園舎がイメージされ、澄んだ心で自由に世界に羽ばたき、すすく育ってほしいと言う願いが込められている。

「にじ」は、柏原保育所を増改築した園舎が半円形の形状であり、にじをイメージすることからつけられた。夢や希望を持ち、虹のように人と人との心の架け橋でつながり、友達となかよくすすく育ってほしいと言う願いが込められている。

「ミニスイム」開園から50年で

長年にわたり愛され、たくさんのお出を作り上げてきた保育所や幼稚園の歴史や文化を継承しつつ、地域の誇りとな

る柏原地域の認定こども園を目指した3年間であった。

基本理念を「未来につながる人間力の基礎を育む」とし、「わくわくしながらいっしょにのびる」こども園を目指した。

教育及び保育の方針として、次のことを重視した。

(1)子どもが充分遊びきれ環境を作り援助すること。これは「環境で育てる」就学前教育に於いて非常に重要な観点である。感動や驚き、興味や好奇心を引き出し、自主性や積極性を育み、豊かな感性や心の成長を促すことが出来る。

(2)多様な運動刺激により、体内に様々な神経回路を複雑に張り巡らせていくことができるよう、全身の諸機能の調和的発達を促すようにすること。6歳の終わり頃までに、運動機能の8割が完成すると言われ、幼児

期の運動は運動神経が向上するのに重要である。幼児期は、心と体が相互に密接に関連し合いながら、社会性の発達や認知的な発達が促され、総合的に発達していく時期なのである。

(3)幼児期に育つ言語感覚の育成は重要である。常に温かく落ち着いた態度で子どもに接すること。遊びを通してさまざまな事象と向き合い、体ごとぶつかっていく生き生きとした豊かな生活環境を作り、生きた言葉が育てられる取り組みを進めること。

(4)英語の音やリズムを聞く耳を育み、積極的に話す総合的な言語力を伸ばすことを大切に英語遊びに取り組む。小学校では3年生から英語活動が始まることもあり、体を使った英語遊び活動を通して、日々の生活の中で自然に英語に親しむように援助し、色々な国や地域の文化に触れ

る経験を通して、英語を楽しむ気持ちやコミュニケーション力を育て、英語が好きになり、もっとしたいという思いを小学校へつなげていけるよう配慮する。

(5) 小学校との接続は、小学校に併設していた幼稚園が無くなったこと不安を解消するのに取り組まなくてはならない課題であった。主に、崇広小学校と新井小学校両校への就学児がいることを配慮しつつ、新井小学校との連携を軸にしながら取り組んだ。2021年度から2年間、新井小学校と共に兵庫県教育委員会から「令和3・4年度 幼児期と児童期の円滑な接続事業」の研究指定を受け、研究実践に取り組んだ。法人立の認定こども園が兵庫県教育委員会の研究指定を受けて公開保育や実践発表することは初めてであった。

子どもたちには、豊かな環境の中で個性を輝かせて育ってほしい。職員には、幼児期にふさわしい生活の場を豊かにつくりあげ、心身共に健やかに育つことを具現化出来るよう、ミライズそらだからこそ出来る教育活動を創造してほしいと繰り返し伝えてきたが、教育理念や教育及び保育の方針を踏まえ、七夕やハロウィン、とんど焼きなどの季節の行事や、運動会、生活発表会の持ち方など、3年間で定着してきた活動に、職員の創意工夫が光っている。

おわりに

例年行っている保護者への教育評価では「ミライズそらを選んでよかったか？」の質問に、回答いただいた保護者の100%から肯定的評価を受けた。開園時にあった幼稚園や保育所がなくなることへの不安は払拭でき、認定こども園ミライズそらとしての新たな歴史と文化が

育まれていることを実感している。

氏名はすべて割愛させていただいたが、平成22年の総代協議会以来、多くの方々の見識と努力により、柏原地域の認定こども園が今日ここにある。苦勞をともにしていただいた皆様方に感謝申し上げますとともに、こどもを育む唯一無二の豊かな居場所として、ミライズそらの歴史がつながっていくことを願っている。

手塚建築研究所HP「ミライズそら」
<http://www.tezuka-arch.com/works/education/kodomoen-kaibarara/>

(柏原町在住)

伝統を繋ぎ新しい時代へ

山南統合中学校開校に向けて

丹波市立山南中学校 校長 荻野圭裕

近年、丹波市でも子どもの数が減少しています。そのため小学校では複式学級を持つ学校ができ、中学校では学年1クラス規模の学校が生まれています。そこで、市では学校の適正規模化の協議が進められ、小中学校の統合が進められています。既に青垣地域の小学校が統合され

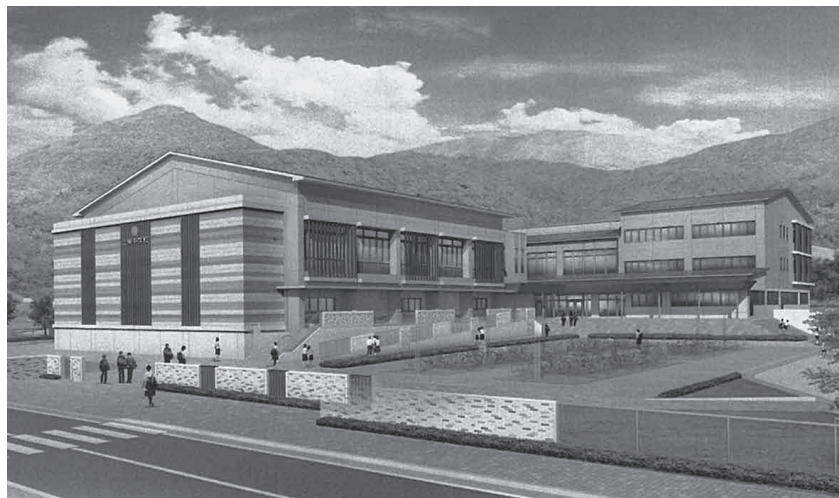
ます。既に青垣地域の小学校が統合され青垣小学校が誕生し、来春には市内で小中合わせ2組の統合が進み、その翌年も小学校がまた一つ統合する予定となっています。

そんな中、本校も同じ山南地域にある和田中学校と統合し、いよいよ統合山南中学校として新たなスタートを切ること

になっており、その開校がいよいよ来春（令和5年4月）に迫ってきています。新しい校舎は山南中央公園を改修して建設中で着々と工事が進められ、少しずつその姿を現しています。

本校が今の体制となったのが昭和30年代、当時の山南中学校と上久下中学校が山南町の新発足と学校の適正規模への機運の高まりにより統合され誕生しました。そして、以後長き伝統を繋ぎ、今年を一区切りとし、新しい学校の創設に向かっていてるところです。

今学校を取り巻く環境は急激な変化の時を迎えています。GIGAスクール構



新山南中学校の完成予想図

想により子どもたちは一人1台PCを持ち、様々な連絡もICTが活用される時代です。そして、中学校では部活動の地域への移行が議論されるようになりまし



山南中学校の桜並木

令和の時代の新しい学校の創設に向けて様々な準備を進めているところです。しかし、そんな新しい学校にも、それが今までずっと受け継いできた良き伝統をしっかりと引き継ぐことは大切な

ことだと考えています。そんな繋げたい伝統の一つが本校においては平和学習に対する取り組みです。山南中学校では以前から、平和学習に積極的に取り組んできました。道徳や学級活動で平和に関する学習を重ね、三年生ではヒロシマやナガサキに修学旅行に行つて、被爆者の方からお話を伺つたり、平和のセレモニーなどを行つたりして平和への意識を高めてきました。そして、その取組の中心となって活動してきたのが子どもたちの有志で組織される「山南中学校平和推進委員会」です。

この委員会は1999年に組織されました。立ち上げのきっかけはその3年前にさかのぼります。当時の3年生がヒロシマとナガサキの両方に修学旅行に行くことになり、平和を祈念して原爆を描き

続けたある美術家の絵を元にして版画を制作しました。そして、その絵を佐々木貞子さんをモデルにした「原爆の子の像」にささげました。すると、ヒロシマの平和公園の近くに住んでおられた松田忠晴さんが、その版画に大変感動され、本川小学校の資料館に保存できるようにお願いしてみました。このときから松田さんと山南中学校との交流が始まりました。そして、その3年後、松田さんが8月の平和祈念式典に招待してくださり、2年生5人が参加しました。そして、これをきっかけに「山南中学校平和推進委員会」が誕生することになります。

この平和推進委員会は自主的に集まった生徒が自分たちで活動内容を考え、取り組みを進めている組織です。もちろん様々な形で、戦争や歴史のことについて学び、先生達も支援しますが、全校生で平和について取り組むための活動はこの

委員会が中心となって行います。生徒全員で千羽鶴やモニュメントを作成したり、全校生の代表として修学旅行で平和セレモニーを行い、そこで学んだことを帰ってから全校生に報告したりといった活動を行っています。セレモニーでは自分たちで作った平和の歌を捧げたこともありました。その歌は丹波市の人権コンサートでも披露されました。このような平和推進委員会を中心とした取り組みは修学旅行の行き先がヒロシマやナガサキの被爆地ではなく、日本でただ一つ地上戦があった沖縄になった今もしっかりと受け継がれています。そして、コロナ禍のため修学旅行の実施にも様々な障害があったここ数年においても、変わらず受け継がれています。

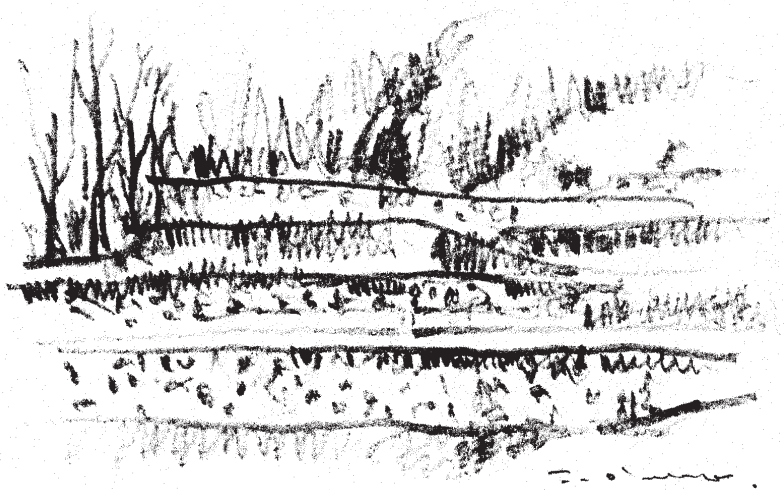
校庭には先輩たちがナガサキから持ち帰った「被爆クスノキ」があります。これはナガサキの被爆者末永浩さんが平和の願いを全国の子どもたちに伝えたいと

贈ってくださったもので、山南中学校では、この木を「永遠の木」と名付け、大切に育てています。そして、この木は新しい学校にも移植されることになっており、永遠の木とともに平和学習の取り組みも新しい学校に繋げたいと思います。

来春開校する統合山南中学校は、令和の時代の新しい学校です。新学習指導要領のもと、ひとり1台端末（PC）などのICTも十分に活用しながら教育活動を進めて行くこととなります。そして、子どもたちがこれから歩いていく予測困難な時代を生き抜いていく力を育成していくこととなります。

しかし、そんな中だからこそ本校が今まで受け継いできた良き伝統はしっかりと伝えていきたいと思っています。そのためにもしっかりと準備を行い地域の期待に応えることのできる学校づくりを進めていきます。

（山南町在住）



ひょうごラジオオカレツジと私

人生百年時代、仲間と励む

放送大学丹波市友の会 会長 余田 正博



本科生修了式で謝辞

初めに平成三十年に入学し翌年の本科修了式での謝辞です。

本日修了書を頂くことに際しまして、僭越ではありますが本科生132名を代表し、一言御礼申し上げます。

この機会を頂くにあたりましては、これ偏に学長及び講師・事務局の方々のご協力とご支援の賜物とありがたく感謝いたしております。私は昨年一月に丹波市のシニアカレッジの終了後、北井先生からひょうごラジオオカレツジの勧誘のお話があり、その場で申し込みをいたしました。しかしながら最初のうちは、もう一つ気が進まないでおりました。転機とな

りましたのは、中央スクーリングに参加させていたからであります。ラジオでは時間の制約もあり理解が浅くなる傾向がありますが、スクーリングの講義は時間も長く又、視覚で受けとめられる利点もあり、講義内容をより深く理解することができました。また懇親会を通じて新しい友達もでき、より高齢になられても熱心に取り組んでおられる先輩方の存在を知り自分を突き動かすことができました。

また往復はがきで感想文を送ると、とても丁寧な返事が返ってきます。通り一片の返事ではなく、送り手の心をよく感じていただいた上での、適切なご返事です。これは涙の出るような感激です。これがこのカレッジの神髄ではないかと思えます。また提出したハガキが後日テキストに紹介されることがあり大変励みになります。私は約五十年ビジネスの社会で生きてきました。五年前に退職してか

らは別の社会を求めて、丹波市シニアカレッジを皮切りに、丹波森大学、丹波学と昨年からは丹波OB大学にも入学しております。これらは、すべて一方通行です。このカレッジは双方向でそこに大きな違いがあり、値打ちがあるところだと思います。

一年お付き合いさせていただいた、この高齢者放送大学は、全国に先駆け、四十年余りの歴史があり現在二千人超の学生がおられる。また十年二十年とそれ以上も続けておられる諸先輩の存在を知り、このすごさにも感銘を受けました。今年度の講義の中で一番印象に残っておりますのは、九月に放送されました、武田則昭先生の『土の健康・ヒトの健康』の話しです。中央スクーリングでも講義がありました。私は小豆を栽培して二年目です。有名な丹波大納言です。初年度は、十アール、今年度は十五アールを栽培しました。昨年の七月は異常な暑さの

ため、ほとんどの農家は発芽しませんでした。二度播種をされたかたも多かったようです。私はその時、何時間もかけて冠水しました。そのせいですべて発芽し、大きく育ち、秋には前年よりも二割多く収穫でき、すべてAランクで出荷することができました。

私はその時、愛情をもって、熱意をもって作物に接すると、相手もそれに応えてくれるような実感を持ちました。

それにもまして、講師先生への出演交渉や講義内容の打合せなど、スタッフの方々の大変なご努力・ご苦勞に敬意を表するとともに感謝しております。希望を言えばもっと往復はがきでの機会を増やしていただければ、大変うれしく思います。最近は一とりでも多くの方に入学を勧めています。このカレッジをご存じない方も多いようです。

最後に、来年度も、より一層頑張つて勉強させていただきまことを、ここに

お誓いさせていただき、意を尽くしませんが、謝辞とさせていただきます。

* * *

ご存じの方も多いと思いますが、兵庫県には、(公財)生きがい創造協会があり、兵庫県高齢者放送大学があります。

これは全国に先駆け四十年の歴史があります。毎週土曜日に朝七時より二十分間、ラジオ関西で放送しており、感想文をハガキやメールで提出する仕組みになっております。現在約二千名の学生が在籍しております。入学すると、毎月テキストが送られて来て、その月の放送・講師紹介・講義のあらまし、今までの講義の感想文などが紹介されています。最初の一年は本科生となり往復はがきで感想文を提出します。その後は生涯聴講生となり続けて学ぶことができます。本部はいなみ野学園で緑の多い広大な敷地に教育施設が点在します。そこでは年数回ス

クーリングや講演会が開催されています。学生の文芸発表会もあります。県下に約30の友の会組織があり、それぞれ交流活動や、地方スクーリングにおいて相互の交流も行っています。私は丹波市友の会に属し、近隣には丹波篠山市、三木などがあり、丹波篠山市には百四歳の最高齢女性の方、丹波市では九十六歳の方もおられ、それぞれ大変元気に学んでおられ我々の誇りでもあり、目標でもあります。

私は平成三十年より学んでいます。先輩には二十年、三十年と学んでおられる方や、最高は四十年の方も驚きです。それに比べると私は幼稚園にも満たない存在です。ある九十六歳の方は、毎回放送が始まるとラジオの前に正座して聞きます、そうすると、みんなが一緒に聴いている連帯感が生まれます。話を良く聴き、理解して、文字に起こして感想文を書きます。わからない文字は辞書を

引いて調べます。この一連の作業が「元気を、若さを保つ秘訣ではないかと思えます」と言っておられます。またそれぞれの友の会において、文集を発行しておりそれを拝見すると、百歳になってもそれぞれの方が、しっかりとした文章で表現されています。

今は人生百年時代といわれていますが、元気で人に迷惑をかけることなく活動できなければなりません。そのための必要条件は、この放送大学でしっかりと学ぶことだ、と最近私は思っています。幸いコロナ禍においても、自宅で学ぶことができます。学ぶ高齢者の機会は他にいろいろありますがこの放送大学が最高ではないかと思っています。

一人でも多くの方に聴いていただきたいと念願しております。どの支部でも高齢化が進み大変悩んでいます。六十代、七十代の入会を切望しております。スマホでひょうごラジオカレッジと検索すれば

ライブブライヤーが出てきます。

まだの方は一度試してみてください。

(市島町在住)



地域の小規模事業者と共に

現場に寄り添い相談・提案

丹波市商工会 参事 大木 玲子

「商工会って何するところ？」と思われる方もおられると思います。

正直申しまして私自身も、商工会が何をしているかを知ったうえで就職したわけではありません。動機は本当に単純で、

通勤に便利なのと転勤がないからという理由で決めたように思います。最近は、

商工会も新型コロナウイルス感染症の様々な支援や事業再構築等の高度な経営のサポートにも対応する認定支援機関として、地域及び関係機関からも認知していただけるようになってきたように思います。

商工会は、昭和35年に法制化された地域の小規模事業者の経営の改善発展を支援する組織として、当時氷上郡内においても町ごとに6つの商工会が設立されました。

私が就職したのは昭和58年ですが、当

時の商工会といえば地域を盛り上げるためのイベント開催や売り出しの企画、祭りの開催など、どちらかといえば地域の賑わいを創出するような事業への関わりに重点が置かれていたように思います。

私自身もこれが商工会の本来業務であると捉えていました。ですから、長年お店や事業をされているいわゆる商売のプロの方々に私たち職員がお店の経営指導をすることはおこがましいという認識すら持っていたように思います。

しかし、その当時より国が商工会に求めているのは事業者への経営サポートでした。

平成11年にはバブル崩壊後の後遺症からの脱却を図るために中小企業基本法の改正が行われ、これまでの「大企業と中小企業との格差是正」の考え方から「やる気のある中小企業への支援」に大きくシフトチェンジされ、これを受けて商工会も高度で専門的な経営支援が求められ



るようになってきました。

ところが、商工会の現状は以前と大きく変わらず、6町の歴史ある夏まつりなどにも関与しながら一方ではようやく「会員事業者が本来求めているのは何か？」という議論を始めるようになりました。

ちょうど組織改革の大きな転換時期に、私は事務局長をお受けすることになりました。

社会情勢が目まぐるしく変化する中において、特に小規模事業者の経営は益々厳しさを増していました。「イベントをしている場合やない・」という事業者の声も聞こえ始め、商工会としても本格的に事業者の経営支援に取り組むべき方向性を打ち出すことになりました。

しかし、事を進めるにあたってはいくつものハードルがありました。地域の方々と関係機関にも影響を及ぼすことになり、丁寧に進めていく必要があったの

で商工会として初めて、誰にも分かり易い目標を掲げ、中期経営計画を立てて一つずつ課題解決に向けて取り組むことになりました。

まずは職員の決意でした。今まで慣れている事業や業務から巡回を中心とした経営支援業務に大きく舵を切っていくわけですから、当然不安に思う職員もいましたが、私は基本、「何事もできるよに考える」ということと「人を責めるな仕組みを責めろ」という言葉の意味を常に頭に置きながら、現場力を一番に心がけて取り組むようにしました。

その中で事業所担当を決め、1事業所に1名の担当職員を配置。1職員当たり150事業所近くを担当し、巡回訪問を行うようにしました。

紆余曲折ありましたが、何とか巡回訪問による中小・小規模事業者の伴走型経営支援に対応できる組織体制ができてきたように思っています。

経営支援に苦手意識の強かった職員も今では会員さんからの「ありがとう、助かったわ〜」という声を励みに仕事にやりがいをもって取り組むようになり、会員さんからも「商工会はこれでいいんや、本来期待していたことや」という言葉をかけていただくようになりました。男性職員も女性職員も毎日会員事業所に向き、様々な経営の相談に対応しています。職員の姿を目の当たりにし、日々とても頼もしく思っています。

以前は「商工会に入ってもメリツトが無い」と言われて退会される会員さんもありました。今では会員さんの方から「商工会に入っとく方がええで〜」と声掛けをしてくださる方もあり、今では農業者の会員事業者も随分増えてきました。

商工会は、全国で1650カ所程ありますが、会員数の規模からみると、2000超の会員を有する丹波市商工会は兵

庫県下でも一番多く、全国においても20番までに入る大きな組織となりました。

日本における中小・小規模事業者の占める割合は99・7%で、国の経済を支えているのはまさにこの小規模事業者であります。その方々の経営を伴走型でサポートしていくのが商工会の大きな役割であると考えています。丹波市商工会はそのスケールメリットを有効に活用し、会員間のマッチング事業にも積極的に取り組みようになりました。今まで大阪や東京でしか取引をされていなかった方が市内の方と新たな取引を始められたような事例もあります。また、小規模事業者の方にとって最も苦手とする販売促進への取り組みとして、商工会が主体となり【にじいろタブレット事業】を立ちあげ、事業者の情報を全国に広く発信し、新たなビジネスチャンスの機会を設けています。また、丹波市と連携を図り、【BIZステーションたんば】を新たに設置し、

事業者・職員・専門家の三者による経営相談が随時対応できるような支援強化にも取り組んでいるところです。

この仕事に携わるようになり、改めて経営は生き物であると感じています。事業を経営されている方は常に様々な課題

を抱えその課題を克服しながら経営を続けられています。これからも商工会は、現場に最も近い支援者として事業者に寄り添い、地域においてなくてはならない存在としてあり続けたいと思います。

(氷上町在住)



私らしく生きる

女性の働き方ローモデルとして

近藤 紀子



オーバン（右）、ケント（左）の両市長と

私は、今年3月末日をもって39年間勤続した丹波市役所を定年退職しました。

最後の4年間は、企画部門、総務部門、まちづくり部門の部長という重責を担わせていただきました。

まだ県下でも女性部長が少ない時代で、丹波市発足後3人目の女性部長でした。新聞で市役所の年末年始の仕事納めや仕事始めの写真が掲載されるのをご覧になられるとよくわかりますが、映っているのは男性ばかりで、最前列に女性が立っているのは少ないのです。どの自治体でも最前列に部長等が立っています。

部長在職の4年間は、その重責に身の

引き締まる思いをしながらも、思いっきり仕事をさせていただきました。特に企画部門を担当しておりました時は、米国ワシントン州ケント市、オーバン市との姉妹都市提携の締結や、丹波市の歌「このまちとともに」や丹波市市民憲章の制定など大きな仕事に携わることができ、とてもやりがいがあり充実した時期でした。

その中でも特に姉妹都市提携の締結について少し紹介をさせていただきますが、昭和43年、旧柏原町はケント市、旧春日町はオーバン市とそれぞれ姉妹都市提携を締結していましたが、丹波市発足後は姉妹都市提携には至らず、交流覚書という形で交流を継続してきました。平成28年には両市から姉妹都市提携の締結の申出を受けましたが、当時は、平成26年8月丹波市豪雨災害の復旧を最優先課題として、姉妹都市提携には至りませんでした。この間、丹波市国際交流協会の

皆様による中高生の短期交流や、柏原高校が実施されている高校生の交換留学など、市役所以外の力で交流が継続されてきました。

いよいよその覚書も期限が迫り、市の姿勢を決定する時期に私はこの業務の担当になりました。それまでの青少年の海外派遣等は、人的・文化的交流において大きな成果をあげていましたが、経済交流は何回もチャレンジしましたが大きな成果を得ることができていませんでした。何のために姉妹都市提携を締結するかが問われていました。私は、担当者として、これまで市民の皆さんが交流を守り続けてこられたその努力に行政が報いることが求められているのではないかと思います。市としての結論は、覚書の期限である平成30年度に姉妹都市提携を締結することとなりました。私は、平成29年度には、姉妹都市提携締結に向けた事前調整にケント市・オーバン市を訪

問し、経済交流の足掛かりを模索するとともに、市長の親書を両市長に届けました。平成30年6月議会で議決を得た後、8月に市長、議長、国際交流協会長が姉妹都市提携締結のサインを取り交わすためにケント市・オーバン市を訪問する際にも同行しました。

さて、ここからが本題なのですが、この一端だけを捉えると長らく陽の当たる立場に居たように思われるかもしれませんが、決してそうではありませんでした。若い頃は、39年間も長く勤務し定年まで働いている自分の姿は想像できませんでした。女性にとつて、働き続けることがまだまだ困難な時代でした。役所では多くの女性職員が結婚を機に退職していましたが、私は職場結婚したのでさらに困難な状況でした。職場結婚は女性が退職するという暗黙のルールを破り初めて退職を選択しませんでした。その後は、理不尽とも思える人事もありましたし、

何かと批判に晒されてきました。結婚して退職しなかった時、夫婦で管理職に就いたとき、夫婦で部長に就いたとき、誹謗中傷の文書を撒かれました。

何かにつけ最初は叩かれるものだと半ば開き直りの感がありました。悔しい思いをしました。若い頃は、今と違って育児休業の制度ありませんでした。で、出産後8週間で職場復帰しました。育児休業制度のない最後の世代です。その時の私の信念は「家庭があること、仕事があることを言い訳にしない」でした。仕事においては、運命に逆らわず、置かれた場所で、自分の居場所と、そこでの存在価値と存在意義を見つけようと、自分にできることを精一杯頑張りました。私らしく頑張ることでそれを見てくれる人が必ずいて、応援してくれる人がありました。そつと背中を押してください。課長、部長に昇任した時には「新聞で見たよ。頑張っているね」とお手紙を

下さいました。ひとりでも私を応援してくれる人があるのなら、その人の期待に応えたいと思ったものです。

私は、家庭も仕事も何かを諦めるのではなく、どうすれば両立できるか、常にそう思ってきました。私の39年間は辛いことも多かったですが、常に仕事が楽しかったですし、やりがいがありました。定年退職の日、3人の子どもたちに「小さい頃、お母さんは仕事でいないことが多くみんなに寂しい思いをさせたね、こうして定年退職を迎えられたのは家族のおかげです」と伝えたら、「子どもの頃は、仕事をしながらも空いている時間には、一所懸命に子どもに関わってくれたからやと思う」と言ってくれました。辛かったことが多かったですが、今は一番の思い出となっています。

女性活躍推進が叫ばれて長いですが、ジェンダーギャップ指数が156か国中

120位という現実のために息が漏れま
す。アメリカでは、市長の多くが女性です
し、先のケント市・オーバン市の両市長は
女性です。ケント市長は、「目の前にやら
なければいけないことがあるのに女性だ
から男性だからと言っている場合ではな
い」ときっぱり発言されていました。

現在、丹波市役所での管理職に占める
女性割合は9・1%で目標値の15%には
届いていません。令和2年度に私を含め
た3人の女性部長が在籍していましたが
現在はゼロとなっています。管理職だけ
が女性活躍ではないという反論もありま
すが、一定程度決定権を持つ女性管理職
が必要です。「自信がない。仕事と家庭
の両立が難しい」と昇任を望まない職員
が多いのです。以前と比べると、公務員
は男性・女性に関わらず子育て世代に
とって働きやすい制度に大きく改善され
ています。

しかしながら、制度が整ってきたもの

の実際には、固定的性別分担意識や無意
識の思い込み(アンコンシャスバイアス)
と決別できてないのが現実です。労働環
境は改善されても社会の中心の多くを占
める男性の意識改革が必要です。女性
自身の意識の改革もつと必要です。役
職が上がるにつれ責任も大きくなります
が、大きなステージで仕事ができる醍醐
味があります。経験も実績もない私を、
女性活躍のルールに乗せた当時の上司の
決断は相当のものだっただろうと思いま
す。私も「これは途中で投げ出せないな
」と心に誓ったものです。今は、市役所
での女性の働き方のロールモデルのひとつ
として役割を果たせたのかなと安堵して
います。

4月からは、幸運にも新しい職場と新
しい仲間に出会うことができ、充実した
毎日を送っています。次のステージでも
私らしく生きていこうと思います。

(春日町在住)

「おかげさま」忘れずに

地域が儲かる観光戦略

丹波市観光協会 事務局長 足立はるみ

現在の職種について今年で二十六年になる。

子供の手が離れた頃、主人の実家に戻って、役場の嘱託職員として働き始めた。その後、道の駅あおがき構想が具体的になり、心機一転観光協会の正職員として奉職した。

「観光」という業種には全く未経験の人間であったが、当時道の駅という団体の立上げに関わることがとても楽しくわくわくする気持ちで働き始めたことを思い出す。

当時道の駅あおがきは県内12番目の施設であり、立上げについては、地元の自

治会の有志の方々に農事組合法人を設立し運営されることになった。施設には特

産品の「あざみ菜漬」「手作りこんにゃく」の加工所とその食材を中心に食堂が備え付けられ、観光協会は道の駅内の観光案内所という位置づけで入ることになった。

青垣の特産品を使った「おいでな定食」は打ち立て湯がきたての蕎麦と季節の産品を使って作られ、「おふくろの味」とよく雑誌に取り上げていただいた。これから道の駅を立ち上げようとする県内の

団体の視察の申込もたくさん受入れた。観光協会の職員として働き始めて、聞

かれること以外にも色々な観光の豆知識を揃えてお伝えした。そうすると、意外にも続いて観光協会へ来てくださる方が増えていった。「おふくろの味食堂」・野菜直売所などの充実した道の駅あおがきは話題になり、たくさんのお客でにぎわった。そんな時最初の組合長の細見氏は地域や個々の関係者の皆さんの「おかげ」を頂いている、といつも頭を下げておられた。私達にも「感謝」の言葉を常にかけてくださった。

私も毎日たくさんのお客の方々と話せることは、本当に楽しく相手のニーズをよく知ることが出来た。まさに観光客の方から学ばせていただき「おかげさん」をいただいた。

令和4年、一般社団法人丹波市観光協会も新しい組織に様変わりをしようとしている。

道の駅丹波おばあちゃんの里に丹波市観光情報センターができ、「丹波ええと



青垣・岩屋山からの雲海

はその中で観光情報を発信する基地として位置づけられている。

公益的な活動ばかりをしてきた観光協会として今年からは「地域が儲かる仕組みづくり」に取組むこととなっている。観光戦略室というセクションが設けられて、今後の動きに期待が高まる。

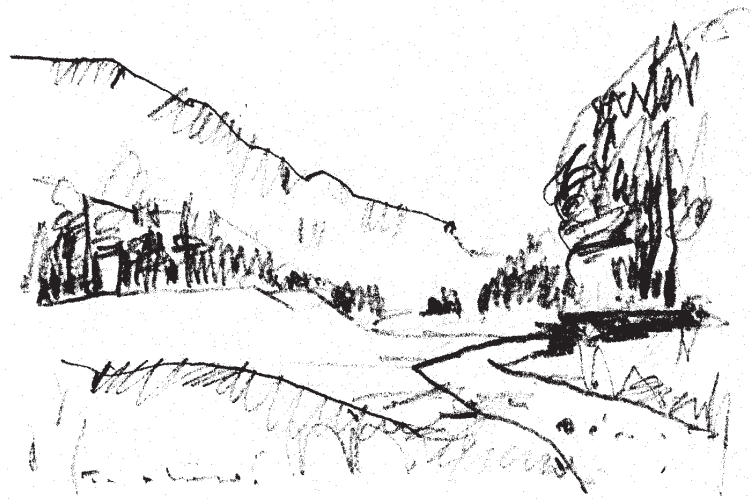
どんなに大きな組織になろうとも、やっぱり基本は、相手の身になって話を受け止めることであろうし、また地域を愛する気持ちをしっかりと伝えること。そして「おかげさん」という感謝の気持ちで来訪者お一人お一人に接していくことなのだと思う。

天国の細見組合長、「おかげさん」は私の心にいつまでも生き続

けます。

「こナビ」と命名された。道の駅丹波おばあちゃんの里は年間百万人が来所する来丹者の施設であり、「丹波ええとこナビ」

(青垣町在住)



夢広がるかいばら雛めぐり

地域に根付くイベントへ

荻野眞知子

丹波の森公苑の職員の方が、「県の補助金制度を利用して、雛めぐりをされませんか」と2016年、当時柏原自治協

議会議長であった西垣伸彌さんにお話しがあり、『是非女性が活躍できる場が欲しい』ということでお引き受けされたのが始まりです。



かいばら一番館（旧支庁舎）の階段に飾る

その頃盛況であった街中での「百円笑店街」というイベントの中で「雛まつりをしてもらえないか」と、私に相談がありました。1日だけの展示となりました

が、準備をしている間にお雛様の魅力に取りつかれ勇気をもらい、これなら来年からも雛めぐりをやっていけそうだと自信を持ちました。その後、雛ぐりの視察に和歌山県九度山町で開催の「人形めぐり」に出かけました。雛人形、五月人形等と一緒に飾られていました。そこで運命的な出会いをしたのが、江戸時代庶民の間で作られ始めたという吊り雛だったのです。手づくりの色とりどりの作品が飾られており、その愛らしさ、何とも言えないほっこり感に感激したのです。

後日、私達にも作れるのではないかという強い思いのもと、パッチワークの先生に指導をお願いして、吊り雛を作り始めました。最初は簡単な桃や座ぶとんから始め、徐々に七宝まりや金魚、鶴等難しいパーツが縫えるようになり、第1回の雛めぐりまでに約60個の吊り雛が完成しました。一方、女性陣が雛づくりに奔

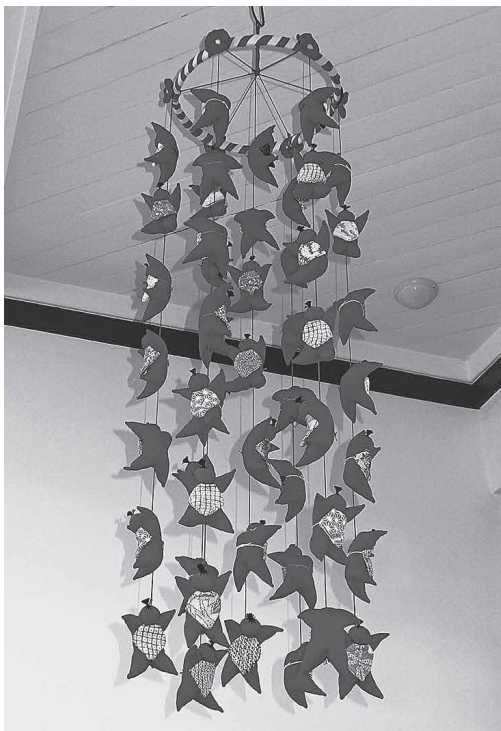
走している間に、柏原自治協議会、観光まちづくりの会、まちづくり柏原など8団体での「かいばら雛めぐり実行委員会」が発足し、委員長には女性達にチャンス



すらりと並んだ段飾り

を与えて下さった西垣会長さん。また丹波の森公苑の上岡典子先生、地域おこし協力隊の喬木リエさんにも加わっていただき、ご助言ご指導を頂きながら進め、雛めぐりの目的を「桃の節句の良さを再認識し、段飾りだけでなく吊り雛や色々な作品を融合させ、柏原独自の『雛まつり』を行うこと、そして継続することにより町の知名度を上げ、仲間づくりの輪を広げること」としました。

2018年3月24日、展示会場を12カ



さるぼぼの吊り飾り

所と個人のお店のウインドウ飾りも協力していただき、『第1回雛めぐり』がスタートしました。国指定の柏原藩陣屋には、織田家の鶴姫さま愛用の「御所人形」、「三ツ折れ人形」の展示、丹波の伝統工芸品である「稲畑人形」を五代目赤井君江先生に展示解説をお願いし、また、歴史研究家の竹内脩さん所有の江戸時代からの古い内裏雛も場をひき立てていただきました。さらに、イベントとして、食べ歩きツアー、お茶席、吊り雛づくりなどの体験会を行い、各名店には限定メニューを用意していただきました。

翌年の第2回雛めぐりには新井地区も参加され、名庭園めぐりも併せて回遊コースができ、前年とは異なる雛めぐりになりました。

藩邸では、柏原の押し絵作家「故春木美ね子さん」の数々

の屏風は、たおやかな和室のたたずまいにしつとりと溶け込んでおりました。食べ歩きツアーの外にスイーツめぐりを行い、多くの若い女性に参加していただきました。子どもさんを対象に、岡林写真館様から譲り受けた着物やドレスに着替え、お雛様の前で写真を撮ってもらおう「想い出写真館」をたんば黎明館で行いました。最終日、会場をめぐるスタンプラリーは、大盛況でした。

第3回雛めぐりは、丹波市にコロナ感染者が出たため急きよ中止となりましたが、すでにお雛様の飾り付けを終えていた会場はそのまま展示していただきました。

第4回も、お雛様を見て回遊していたただけになりました。今回の見どころは、移転した丹波市役所旧柏原支所建物の「かいばら一番館」の飾り付けでした。たくさんの段飾りと吊り雛の競演で、階段を活用したお雛様も素晴らしかったと

思います。崇広小学校の児童の絵画や書道も一緒に展示し、多くのメンバーの力が凝縮された会場となり、多い日には200人以上の入館者があり、地元はもちろん遠方からの方々や、複数回来られる方もおられてとても嬉しく思いました。

第5回目となる令和4年3月も会場の回遊のみ。何か違った事かと思いつ、雛めぐりの周知とコロナの収束を願う『さるぼぼ』を縫うことにしました。赤布で縫った、さるぼぼには病魔を退散させるといういわれがあり、半年近くをかけて5ヶつつ紐で吊るし約1500個を25人ほどのメンバーで縫い上げ、会場はもちろん街中の軒下に吊っていたきました。お守りの様に思われますので、評判が良く、町内以外のお店や他市の方にもお渡ししました。

これまでの雛めぐりの改善すべき点は次の内容です。

遠方からのお客様のお食事場所の確

保。展示場の分かり易い表記。車いすの方が観やすい工夫。補助金がなくなった今、円滑な運営が出来る企画をする。実行後継者の育成。雛めぐりを利用した観光開発をしていただき、個店の発展にも繋がる社会に役立つイベントとして位置づけ、だれからも喜ばれる伝統をつなぐ活動として、根付かせる必要があります。

以上のような反省点を踏まえ、まだもう少しこれからの「かいばら 雛めぐり」を支える使命感に燃えて、皆様方の心の故郷となり続けることができようように、頑張っていきたいと思えます。

最後になりましたが、私達は多くの協力を受けて、足腰が立たなくなっても大好きな「吊り雛」を作り続けたいと思います。

(柏原町在住)

取材きつかけにはまり込む

74年の地元劇団

劇研椎の実2代目代表 荻野祐一

丹波市に文化団体は数多くありますが、私が代表を務めている「劇研・椎の実」は最長老だと思えます。何しろ敗戦から3年後の1948年に産声をあげたのですから。来年で75周年になります。息長く演劇活動が続いている「椎の実」の歩みや、私と「椎の実」のかかわりを書かせていただきます。

私は58年の生まれで、柏原高校を卒業後、同志社大学に入学。演劇に興味があったことから、演劇サークルに入りました。当時はアンゲラ演劇の終焉期でしたが、私の入ったサークルはしつこくアンゲラにこだわっていました。局部を隠す黒色

のパンティーだけを身に着け、全身を白粉で塗りたくるという前衛舞踏さながらの格好で演じたこともあります。今から思えば汗顔のかぎりです。

大学を卒業後、丹波新聞社に入社。編集長から「椎の実という劇団がある。近く公演をするから、取材してこい」と命じられ、練習風景を取材しました。その時は氷上郡にも劇団があるのか、という程度の思いしかありませんでしたが、団員の一人に「私は大学時代に芝居をしていました」ともらったのが入団のきっかけになりました。翌年、その団員の方から「役者の人数が足りないので出てほしい」と言われたのです。大学を卒業する時、『もうこれで芝居をすることはないな』と思っていたのですが、芝居の醍醐味を味わったら最後、その魔力から逃れるのは容易でなく、勧誘に「いいですよ」と二つ返事でOKしました。

椎の実の芝居は当時、民話劇が主流でした。大学時代の芝居とは月とすっぽんでした。でも、それなりに面白く、そして何よりも舞台に立った時の陶醉感やアンゲラも民話劇も変わりはありませんでした。『やっぱり芝居はいい』。そう思った椎の実での初舞台から今年でかれこれ40年になります。

さて、そんな椎の実はどうして生まれたのかを紹介します。74年前のことですから当然、聞き伝えです。

椎の実は柏原町内の若い男性6人で結成したそうです。なんでも地元の神社の祭りで芝居を披露し、「芝居って、面白いやないか。ひとつ劇団をつくってみよ

う」と盛り上がったのがきっかけだそうです。初代代表の川村芳一氏が19歳の時でした。娯楽の乏しい時代です。団員たちは毎夜集まり、夜の1時頃まで稽古に励んだこともあったそうです。柏原町の名所である鬼の架け橋や、昔々、水不足で悩んでいた柏原町内の集落を題材に川村氏が書いたオリジナル脚本や、既成の脚本を上演していました。私が入団する前の話です。

私が入団した頃は、今はもうない氷上郡民会館の講堂で公演をしていました。1日限りの公演でした。夜7時の開演を待ちきれずに1時間ほど前から座布団を持っておばあさんたちが三々五々、来場されました。パイプ椅子に座布団を敷いて座られるのです。のどかな風景でした。そして終演後はお待ちかねの打ち上げ。氷上郡民会館そばの村の公民館で、川村氏がかかわっていた民話サークルのおばさんたちがこしらえた手づくりの料理を

いただきながら、舞台を終えた後の高揚感に身を浸したまま深夜零時頃まで痛飲しました。

地域に支えられた劇団です

1996年に約700人収容のホールを備えた丹波の森公苑が完成してからは、同公苑に会場を移しました。2008年には椎の実が創設60周年を迎え、それを機に川村氏が引退、私が2代目代表となりました。

私は入団以来、出演するのはもちろんですが、脚本も書いてきました。その数は29本になります。柏原に伝わる「おさん・茂兵衛」の悲恋物語を題材にしたものや、戦争をテーマにした脚本を3年続けて書いたこともありました。私が代表になってからは、時代ものをやめ、現代を描いた脚本にし、くすりと笑え、ちよっぴり泣けるが、そんな舞台をお楽しみいただけるようにしています。余談



「おさん・茂兵衛」を題材にした芝居「丹波越え」の一場面

ながら演出もしており、脚本、役者、演出と、ひとり3役をこなしています。団員は今、30人ほどおります。中学生から70歳代までと年齢層は幅広く、丹波



3年前に上演した芝居「縁切り御免」の一場面

市を中心に丹波篠山、三田市の団員もいます。3年前には、神戸市から参加していた中高生の兄妹もいました。

ユニークなのは、家族ぐるみの団員がいることです。40歳代の両親と、20歳代の娘の家族3人がなかでもユニークで

す。両親は、椎の実で知り合って結婚。生まれた娘は小学校3年の頃から子役として舞台上立ち、保育士になった今も出演をしています。両親は大道具、音響のスタッフとして舞台を支えています。

子どもをお腹に宿して出演した女性もいました。そのとき、お腹にいた子は今、高校3年生ですが、小学校5年生の頃から舞台上立ち、主役を演じたこともあります。今も団員のお母さんは、小道具のスタッフとして頼りになる存在です。

本職が大工の団員もいます。大道具づくりを受け持ってくれています。和裁の仕事をしている私の妻も団員で、衣装を担当しています。60歳を過ぎてから入ってきた団員もいて、近年は毎年、2人ほどの新入団員を迎えています。

毎年秋に公演をしており、近年は2日間にわたって公演しています。特徴的なのは、旗揚げ以来、入場無料を貫いていることです。ホールの使用料、大道具の

製作費など、お金のかかる舞台公演なのに、なぜ無料にできるのかというと、ご祝儀ははずんでくださる方が多くおられるからです。ありがたいことです。地域の人たちによって支えられていると感謝しております。

「劇研・椎の実」の名前の由来は、ひと粒のシイの実がやがて、そそり立つシイの大木になればという願いを込めたものだと聞いております。旗揚げから今年で74年。年輪だけはしっかりと刻みました。はたして名実ともに大木と言える劇団になれたのかどうか、年輪に相当するレベルの芝居をお見せできているのかどうか、となると心もとない気がします。ですが、自分たちにできる限りの芝居をお見せしたいという「やる気」だけは団員一同、共有しています。

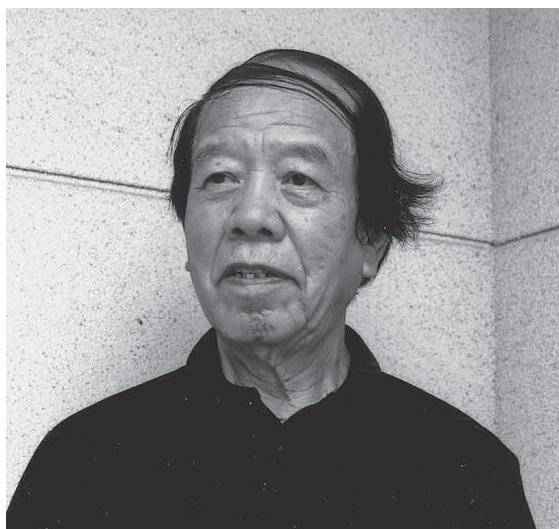
どうかシイの成長をあたたく見守ってください。

(柏原町在住、丹波新聞社会長)

木食上人の即身成仏

堂のみ残る柏原・龍泉寺

郷土歴史家 竹内 脩



鐘の音やお経の声が聞こえ無くなったら成仏したと思っしてほしい」と言われ、成仏されたと伝えられている。

寺跡の入定堂には、大きな石の中央に「木食上人祐傳……」とあり、土に埋まつて下は読めない。右に「享保十五庚戌年（一七三〇）」、左に「四月十五日堂入處」とある。

現在残っている薬師堂には「入阿定権大僧都法印祐傳木食上人不退位」の位牌があり、今も命日には、地区の人達にお祀りをされている。

木食上人は、出家した後、米穀を断ち、木の実を食べて修行すること。そのよう



龍泉寺跡（知足軒）

な僧を木食上人と呼ぶ。（広辞苑）

龍泉寺は、荻野神社の社坊で真言宗高野山宝城院末寺で、大阿闍梨法印朝誉和尚により寛文十一年（一六七二）に再建された。

明治の神仏分離により龍泉寺は廃寺となり、明治十年小倉村田成寺二十二代愚

柏原町上小倉に龍泉寺というお寺があった。木食上人が「生きたまま棺の中に入り、棺の中で鐘を叩きお経を唱え、



入定堂

田の方で、和田村也足寺で修行されたとお聞きした。現在は島田市の金谷におられる」と話された。

平成の初め頃に寺は解体され、廃寺になっている。薬師堂、入定堂、地藏堂が残っていて、地藏堂には左手に宝珠、右手に錫杖を持つ延命地藏がある。

謙和尚が庫裡を建て、隠居寺として龍泉寺を知足軒と改め、正楽寺の本尊薬師如来を移され、阿弥陀如来、不動明王、十ニ神像、弘法大師像などがある。

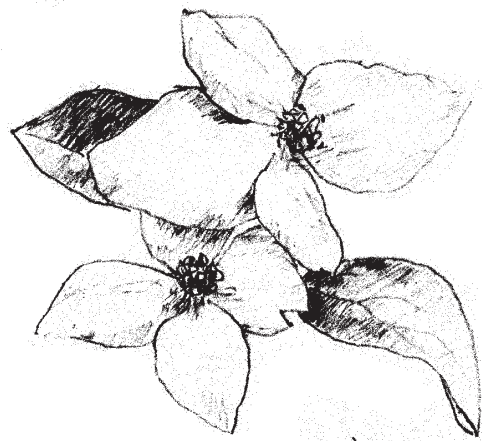
愚謙和尚は、明治十六年に亡くなり、尼寺にと遺言を残し以後尼寺となり、最後の三代目芦田貞妙尼さんが昭和二十五年まで務められ、無住となり愛知県の天竜市に変わられた。

当時世話をされていた吉川秀雄さんは「柏原駅までお送りし、三十才代だったと思う、お母さんは丹波竹



延命地藏
(2代目難波金兵衛)

六角の台座の正面に「当庵大拙者愚謙和尚」、他面は「師愚謙号大拙伊予国平井村明治十六年十一月十五日 六十二才」とある。大新屋石(柏原町)に彫られ、難波金兵衛(二代目)義継の銘がある。地藏祭は八月十四日に行われている。



セツブンソウ

ふるさと丹波の草花

丹波自然友の会 会長 梅垣守明

セツブンソウ (Shibateranthis pinnatifida)

丹波地方でもごく限られた地域にしか見られないセツブンソウは、「節分草」と



書き、代表的な早春植物のひとつです。和名が示すような節分の頃は、野外ではまだ少し早いです

が、2月の中旬ごろには咲き始めます。2月から3月にかけて直径2センチの可憐な白い花を咲かせます。『春告げ花』とも呼ばれ日本で一番早く春の訪れを告げる花として知られています。

丹波市では青垣町の神楽地区・遠阪地区にみられます。「丹波草木誌」によると自生地は市内青垣町の桧倉・稲土・遠阪で確認されていますが、(希)との表記があるので、市内の他町・他地区で自生しているセツブンソウを見ることはできません。今年は雪が多く積もったせいか、青垣町遠阪地区にある「いきものふれあいの里」付近の栗林では例年より開花

が遅れて、2月下旬に満開を迎えました。セツブンソウは本州関東以西の主として石灰岩地の樹林下などに自生するきんぼうげ科の草本で日本固有種です。花は直径約2センチで、白色のがく片は5枚あります。小さくて黄色でよく目立つのは実は花卉です。その内側に紫色のおしべが目立ちます。

3月の終わりごろには果実が熟して種子を散布し、5月には地上部は枯れてしまっています。この後、地中で翌年の春まで深い眠りにつくこととなります。(多年草)セツブンソウは他に花のない時期に小さく可憐な花を咲かせる早春に花をつける植物種の中でもトップクラスの早春の花の妖精です。

注)「丹波草木誌」…細見末雄著、平成4年10月発行(丹波自然友の会)、丹波市(旧氷上郡)内の自生植物の目録。

(柏原町在住)

三尾山麓のイヌザクラ

丹波市で初の確認

梅垣守明

表紙の写真は松本義明
(丹波市美術作家協会会員)

大変珍しいとされる桜の一種「イヌザクラ」が、昨年、4月に春日町中山の三尾山の麓で見つかった。丹波市自生植物

かない点が大きな特徴である。県内はもとより、全国的にも自生数は少ないとされている。

目録「丹波草木誌」にも記録がなく、丹波市で初確認されたことになる。根元幹回り3・6メートル、樹高25メートル。

イヌザクラが発見されたきっかけは、「丹波自然友の会」の三尾山樹木調査(春日町)であった。この調査は丹波自然友

の会の樹木名札付け活動(三尾山登山道)の事前調査として、2021年4月27日に行われた。株元幹回り3メートル以上で樹齢400年?もあるうかと思われる。調査に同行していた兵庫県立大学自然・環境科学研究所 藤木大介准教授(「森林動物研究センター」主任研究員)が確認した。丹波篠山市ではかつて確認

されているが、丹波市での確認は初めてである。イヌザクラはウワミズザクラとよく似ているため、開花の時期に花序を採集して、同定しなければならぬ。大木であるにもかかわらず今まで発見されなかったのは、付近に普通にウワミズザクラもあることから、見過ごされてきたのではないか。今回の調査が、ちょうどイヌザクラの開花の時期だったことは大変幸運であった。この初確認は「丹波自然友の会」の50年にわたる丁寧な自然観察・調査活動の賜物である。

(柏原町在住)



関西丹波市郷友会では、このたびホームページを開設いたします

(2022年12月開設予定)

郷友会ホームページ制作チーム [URL:https://goyukai.net/](https://goyukai.net/)

◆ コンセプト

関西丹波市郷友会の目的である「後進育成」に焦点を当て、青少年育成に取り組む団体として認知度の向上を図り、郷友会の振興に資する。

◆ 制作の目的・役割

- (1) 丹波市内外の方々に「郷友会とは何か」を知りたい時に閲覧でき、活動の主旨や内容に共感していただき、入会申込までに至るものとする。
- (2) 丹波の青少年、あるいはその育成に取り組む団体に興味をもってアクセスしていただき、事業への参加、または応募いただける導線とする。
- (3) 会員相互の交流・ネットワークを構築し、丹波市の更なる発展に寄与するための新たなコミュニティを形成、プラットホーム(土台)づくりを目指す。

◆ 制作の経緯について

- (1) 新規ホームページの開設にあたり、役員会での議論を経て、郷友会ホームページ制作チームを立ち上げ取り組む。
- (2) 開設するホームページでは、なによりもまず当団体へのご理解を深めるため、「明治の発足以来、後進育成に取り組んできたこと」を一番の特徴として発信することを主眼とした。
- (3) そのため、次年度計画の「わくわく大賞」の告知と並行して、発足以来取り組んできた後進育成事業について、歴史をたどって紹介するコーナーを設け、他団体にない特色・強みを打ち出す。
- (4) 関西丹波市郷友会の活動理念に賛同し、新しく会員になっていただく方を増やす一助となることを期待する。あわせて協賛企業の紹介欄を設ける。

◆ 情報の共有基盤として

- (1) 丹波市内の青少年育成に関連団体が交流するきっかけを提供すべく工夫を凝らす。例えば、市内高校の同窓会報・校内ニュースを横断的に読めるコーナーを設置する。
- (2) 郷友会ならではの取り組み、交流サイトを目指す。
- (3) 会報誌『たんば』への寄稿者の原稿を掲載する。郷友会の支援活動や講演会等のイベントなどを多くの方々に情報提供する。
- (4) 会員向けのコーナーを設け、相互の交流が促されるよう、会員の近況報告などを掲載する。

ホームページからは、新規会員の入会申込・会費納入をご案内する予定です。よりよいホームページになるよう、みなさまのご協力をお願いいたします。

広告目次

協賛ありがとうございました。(敬称略)

サンキン……………裏表紙	エス・ディー……………108
山名酒造……………表表紙裏	サンキンB&G……………109
丸十ロッカー……………裏表紙裏	丹波新聞社……………110
中兵庫信用金庫……………96	みなと銀行……………111
JA丹波ひかみ……………97	岡林写真館……………111
敬愛会……………98	やながわ……………112
小曾根病院……………99	土田商事……………112
武庫川女子大学……………100	大仏堂……………113
クレハ……………101	清水一級建築設計事務所…113
高橋工業……………102	赤松医院……………114
グリーンライフコーポレーション…103	KABURA 丹波布の店……………114
オフィスキムラ……………104	丹南茶寮……………115
丹波総合石材……………105	たんばコミュニティエフエム……………115
喜作……………106	関東氷上郷友会……………116
ル・クロ丹波邸……………107	



NAKASHIN

あなたとまちとフェイス to フェイス

中兵庫信用金庫

理事長 足立厚郎

本店・丹波本部 丹波市氷上町成松226-1

三田本部 三田市けやき台1-4-3

TEL (079) 569-7150 (代表)

ホームページ <https://www.nakashin.co.jp/>

ゆ め
希 望 と



うるおいのある

まちづくり

 JA丹波ひかみ

代表理事組合長 藤原 昌和

〒669-3461 兵庫県丹波市氷上町市辺440

TEL:0795-82-0170 FAX:0795-82-3658

URL: <https://ja-tanbahikami.or.jp/>

E-mail: thk.info@jamil.hyogo.jp



JA 丹波ひかみ
ホームページ



JA 丹波ひかみ
公式LINE

医療法人 敬愛会

理事長 大塚 久喜

本部 〒669-1333
兵庫県三田市下内神525-1(三田高原病院内)
TEL(079)567-5107

救急病院

大塚病院

〒669-3641
兵庫県丹波市氷上町絹山513

介護老人保健施設

ひかみシルバーステイ

〒669-3641
兵庫県丹波市氷上町絹山523

医療療養病床

三田高原病院

〒669-1333
兵庫県三田市下内神525-1

医療療養病床

三田温泉病院

〒669-1353
兵庫県三田市東山897-2

介護老人保健施設

三田温泉シルバーステイ

〒669-1353
兵庫県三田市東山897-1

介護老人保健施設

神戸ポートピアステイ

〒650-0046
兵庫県神戸市中央区港島中町5-2-3

介護老人保健施設

豊岡シルバーステイ

〒668-0065
兵庫県豊岡市戸牧1132番地2

療養型医療施設

西宮敬愛会病院

〒663-8203
兵庫県西宮市深津町7-5



医療法人 豊 濟 会

小 曾 根 病 院

許可病床数 557 床

介護老人保健施設 やすらぎ

定員数 84 床

大阪府豊中市豊南町東 2 丁目 6 番 4 号 06-6332-0135

理事長 中 川 泰 洋

理事 芦 田 昇 治

理事 田 晴 行

理事 遊 佐 裕 子

理事 石 井 笑 子

院長 西 元 善 幸

老健施設長 中 村 幹 男

一生を描ききる女性力を。



■ 中央キャンパス



■ 上甲子園キャンパス (建築学部)



■ 附属中学校・高等学校



■ 西宮北口キャンパス

大 学

- 文学部 (日本語日本文学科、英語グローバル学科*)
- 教育学部 (教育学科)
- 心理・社会福祉学部*(心理学科、社会福祉学科)
- 健康・スポーツ科学部 (健康・スポーツ科学科、スポーツマネジメント学科*)
- 生活環境学部 (生活環境学科)
- 社会情報学部*(社会情報学科)
- 食物栄養科学部 (食物栄養学科、食創造科学科)
- 建築学部 (建築学科、景観建築学科)
- 音楽学部 (演奏学科、応用音楽学科)
- 薬学部 (薬学科、健康生命薬科学科)
- 看護学部 (看護学科)
- 経営学部 (経営学科)

※ 2023年4月 英語文化学科から名称変更
★ 2023年4月 開設

短期大学部

- 日本語文化学科
- 英語キャリア・コミュニケーション学科
- 幼児教育学科
- 食生活学科
- 生活造形学科

大 学 院

- 文学研究科 (日本語日本文学専攻、英語英米文学専攻、教育学専攻、臨床心理学専攻)
- 臨床教育学研究科 (臨床教育学専攻)
- 健康・スポーツ科学研究科 (健康・スポーツ科学専攻)
- 生活環境学研究科 (生活環境学専攻)
- 食物栄養科学研究科 (食物栄養学専攻、食創造科学専攻)
- 建築学研究科 (建築学専攻、景観建築学専攻)
- 薬学研究科 (薬学専攻、薬科学専攻)
- 看護学研究科 (看護学専攻)



武庫川女子大学
短期大学部 大学院

武庫川女子大学専攻科
武庫川女子大学附属中学校・高等学校
武庫川女子大学附属幼稚園
武庫川女子大学附属保育園

KUREHA

想いをつつむ、いつまでも

NEW クレラップ®

「想いをつつむ、いつまでも」を基本コンセプトに、さらなる使いやすさへ
“進化するラップ”を生産しております。



株式会社 クレハ 樹脂加工事業所

〒669-3306 兵庫県丹波市柏原町北中150番地

TEL:0795-72-1126 FAX:0795-72-1380

URL:<https://www.kureha.co.jp>

Panasonic Homes

快適性と省エネ性を両立する

全館空調

「エアロハス」



パナソニック ホームズは「本当の心地よさ」をお届けします。

☆真夏・真冬でも家じゅう快適(温度バリアフリー)

☆電気代は一般的な全館空調よりお得(約25%)！ZEH対応可

☆空気循環による浄化能力は空気清浄機の1.5倍※レベル

※パナソニック加湿空気清浄機F-VXL90との能力比較による

パナソニック ホームズ提携代理店 高橋工業株式会社

本社・柏原展示場：兵庫県丹波市柏原町柏原2891

篠山展示場：兵庫県丹波篠山市吹新7-2



0120-72-0438

ホームページ



お家のご売却はハウズドゥ！
にお任せください。

- 高価買取
- 広告無料
- 相談無料
- 地域密着
- 秘密厳守

あなたの家



買取り
不動産

- マンション
- 一戸建て
- 土地
- 収益物件



※ハウズドゥは、不動産売買仲介専門フランチャイズで店舗数全国第一位です。ビジネスチャンス(平成30年8月22日発行-2018年10月号)掲載「2018年度FC加盟店店舗数ランキングTOP250」より。

即価格提示
致します!!

ハウズドゥイメージキャラクター
古田 敦也氏(元プロ野球選手)

※一部除外エリア、除外物件もあります

売却物件大募集



HouseDO

☎ 0120-683-700

全国ネットワーク

仲介
水曜定休

兵庫県知事(1)第750182号 (公社)全国宅地建物取引業保証協会会員 (社)兵庫県宅地建物取引業協会会員 (公社)近畿地区不動産公正取引協議会加盟

ハウズドゥ! 株式会社グリーンライフコーポレーション
丹波店 〒669-4322 丹波市市島町上田503-1

不動産のことなら何でもお気軽に!



無料
査定

買取・売却
物件大募集

不動産を直接
買取致します

物件によっては買取できない場合があります

 土地と住まいの相談室

オフィスキムラ 株式会社

● <http://www.office-kimura.co.jp> ● E-mail kimura@lily.ocn.ne.jp

● 本店 ●

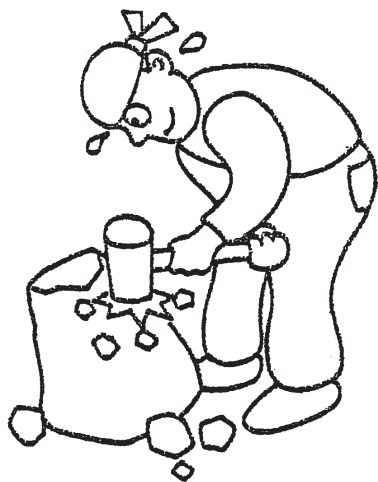
〒669-3465
兵庫県丹波市氷上町横田136番地5
TEL (0795) 80-1500
FAX (0795) 80-1501

● エイブルNW丹波店 ●

〒669-3465
兵庫県丹波市氷上町横田136番地5
TEL (0795) 82-1550
FAX (0795) 82-6700

● 篠山店 ●

〒669-2205
兵庫県丹波篠山市網掛395番地1
TEL (079) 590-1050
FAX (079) 590-1006




あなたの町の
「石屋さん」…
そんな石屋を
めざしています!!

石の事なら何でもお気軽にご相談ください。

墓石・霊園・建築石材・造園石材

(株) 丹波総合石材

代表取締役 堀 公 二

い し や は こ こ よ
 **0120-1480-54**

工場・事務所 TEL0795-72-3032

FAX0795-72-4343

★弊社ホームページは で!



丹波
丹波

k i s a k u

ご予算に応じます。

丹波市柏原町柏原77-1(柏原駅前)

電話 0795-72-1044

<http://www.tanba-kisaku.jp>



たんぽ黎明館

ル・クロ丹波邸

(お箸で食べるフランス料理)

ル・クロ丹波邸 コースメニュー

●ランチメニュー

- ・プチコース 1,980円
(土日、祝日 アミューズ付) 2,480円
- ・ル・クロコース 3,000円
- ・タンバコース 3,700円
- ・シェフスペシャル 5,300円

アラカルト(単品)
430円～

●ディナーメニュー

- ・ル・クロコース 5,500円
- ・ブイヤベースコース 4,500円
- ・シェフスペシャル 7,200円

※アミューズ(お付きだし)代として
600円別途頂きます。

ドリンク
590円～

各種宴会ご案内

同窓会・歓送迎会・各種お祝い

4名～60名様<1階個室、2階宴会場完備>
送迎付きプランやお客様のご予算に応じてご相談承ります

————— 基本プラン(基本2時間) —————

★コース・テーブルビュッフェ・ビュッフェで提供出来ます。

Aプラン…お一人様 6,000円

前菜、お魚料理、お肉料理、デザート、コーヒー、パン

Bプラン…お一人様 7,800円

アミューズ、冷前菜、温前菜、お魚料理、お肉料理、
デザート、コーヒー、パン

Cプラン…お一人様 10,000円

旬の高級食材を使ったシェフお勧め特別フルコース

*全てのプランにフリードリンク(ビール、ノンアルコールビール、
ワイン(赤・白)・ソフトドリンク)が含まれます。

※価格はすべて税込み

●お祝い事など気軽にお問い合わせ下さい。スタッフ一同でお祝いさせていただきます。



Le Clos

ル・クロ丹波邸

〒669-3309

丹波市柏原町柏原688-3

●ランチ

11:30～15:00(L.O.14:00)

●ディナー

17:30～22:30(L.O.21:30)

ル・クロ丹波邸では
結婚式も出来ます

TEL/FAX0795-73-0096

休 水曜日〔祝日の場合は営業〕

有限会社 エス・ディー

みなさまの



信頼感 と 顔の見える 安心感

生命保険

終身保険

定期保険

個人年金保険

医療保険

がん保険

火災保険



自動車保険



けがの保険



賠償責任

など

損害保険・生命保険は
エス・ディーにご用命ください

当社は関西丹波市郷友会の
青少年健全育成に協力しています。

各種保険の内容や
事故対応について
何なりとご相談下さい！

東京海上日動火災保険株式会社 損害保険ジャパン株式会社 代理店

有限会社 エス・ディー

担当: 嶋田

〒550-0013 大阪市西区新町2丁目15番地27号 TEL 06-6539-3229

サンキン B&G 株式会社



代表取締役社長

玉置克臣

取締役会長

田 晴 行

〒550-0013 大阪市西区新町2丁目15番27号

TEL (06) 6539-3281 FAX (06) 6539-1231

建設業者登録 国土交通大臣 第21287号
一級建築士事務所登録 大阪府知事 第5916号
宅地建物取引業者登録 大阪府知事 第41184号

建設事業部（ビルドB） 農芸事業部（グリーンハウスG）

- ・ 建築工事の設計及び施工請負
- ・ 不動産の売買及び仲介
- ・ 農業用施設の設計及び施工請負
- ・ 太陽光発電システムの設計及び施工請負

本 社 ・ 関東支店 ・ 東北出張所 ・ 沖縄出張所



変わる時代 変わらない思い

丹波新聞

氷上西高野球部 15年ぶり夏1勝

豊岡市のこのとりスタジアムで9日に行われた全国高校野球選手権兵庫大会1回戦で、氷上西が多可・吉川合同チームに1-0で競り勝ち、2007年に八鹿を8-2で破って以来、15年ぶりの夏1勝を挙げた。「日本一前向きな野球部」初心者集団の下克上大作戦のキャッチフレーズを掲げ2年、ひたむきに白球を追った選手たちは、勝利校の栄誉を称える校歌を聞きながら、喜びを爆発させた。(丹波新聞7月14日号より)

株式会社 丹波新聞社

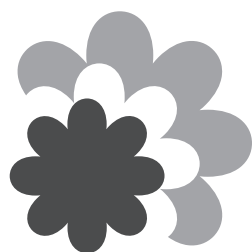
〒669-3309 丹波市柏原町柏原201
tel.0795-72-0530 fax.0795-72-1956

丹波新聞

検索 

週2回(日・木)発行 1ヶ月1,450円(郵送料210円)

地域のみなさまとともに歩みます



みなと銀行

柏原支店

(0795)72-2840

〒669-3309 丹波市柏原町柏原12

みなと de グループアプリ
スマホがあなたの銀行に



創業明治25年（1892年）

岡林写真館[®]

本店

丹波市柏原町柏原JR柏原駅前

TEL 0795-72-0033 FAX 0795-72-1148

.....一度ホームページをご覧ください.....

www.okabayashi.co.jp/

岡林写真館

検索



地域と共に
ふるさと創生

丹波の心を伝える——



丹波素材を使った加工品と和洋菓子

『丹波伝心』、それは『温故知新』……古き丹波の食、食生活、食文化等をも顧みながら新しき時代の中に「丹波」を息づかせたい、そんな願いを込めています。



▲夢の里やながわ 本店

株式会社
やながわ
本社・茶工場 〒669-4124
兵庫県丹波市春日町野上野209-1
TEL 0795-74-0010 FAX 0795-74-2010

株式会社
やながわ
特産加工場 〒669-4124
兵庫県丹波市春日町野上野889-1
TEL 0795-74-0010 FAX 0795-74-2010

夢の里 **やながわ**
本店 〒669-4124
兵庫県丹波市春日町野上野920
TEL 0795-74-0123 FAX 0795-74-2070

夢の里 **やながわ**
福知山店 〒620-0045
京都府福知山市駅前町343 和田ビル1階
TEL 0773-22-2840 FAX 0773-22-2840

風丹
土波
東京春日店 〒113-0033
東京都文京区本郷1丁目35-26
ラフォーレ文京本郷ビル1階
TEL 03-3868-5610

夢の里やながわ

検索



since 1913

株式会社 土田商事

代表取締役 土田 博幸
兵庫県丹波市柏原町母坪409-1

TSP

お取引企業の事業の発展に貢献します

営業部 0795-72-1117



地域のお客様の楽しい生活を応援します

新・文具館 0795-72-1223

ホームページ <https://www.tsp-group.jp>

楽天市場店「ペン屋」 <https://www.rakuten.co.jp/penya/>

心豊かな暮らしにご奉仕いたします

仏壇 仏具 位牌 宗教行事用具

創業大正8年

大仏堂

国道175号線と176号線の交差点すぐ

丹波市氷上町横田(コープこうべ柏原店様前)

お電話代無料 ふくよぶ みんな

☎ 0120-2946-37 へお気軽にどうぞ。

FAX 0795-82-5427



介護付有料老人ホーム プレザンメゾン姫路広畑

令和5年11月1日 開所予定

設計・監理

清水一級建築設計事務所

一級建築士 清水 昭 景

〒669-3131 兵庫県丹波市山南町谷川714-2

携 帯: 090-3429-8097

TEL・FAX: 0795-77-0369

E-mail shimizusekkei0369@athena.ocn.ne.jp



医療法人社団

赤松 医院

内科・循環器科・消化器科(胃腸科)・小児科
リハビリテーション科・漢方取扱い

理事長 赤松暉久

院長 赤松義樹

日本循環器学会循環器専門医
日本内科学会認定内科医
日本医師会認定・認定産業医
日本救急医学会 ICLS 認定
インストラクター・コースディレクター
厚生労働省認定認知症サポート医

	月	火	水	木	金	土	日
予約検査 8:00~8:40 午前診療 8:40~13:00	○	○	○	○	○	○	—
往診・検診・検査 14:00~17:00	○	○	○	—	○	—	—
午後診療 17:00~19:00	○	○	○	—	○	—	—

TEL(0795)74-0080

丹波市春日町黒井478-4 <http://akamatsu-cl.jp>



丹波布と親しみ 工芸と暮らす



K A B U R A

工 芸 の 店 か ぶ ら

丹波布 かぶら



住 所 ■ 〒669-3309 兵庫県丹波市柏原町柏原46

T E L ■ 0795-71-1683

営業日 ■ 金曜、土曜、日曜、月曜

時 間 ■ 10:00~15:30

Facebook / Instagram KABURA

kabura.tambanuno@gmail.com

本格会席・創作料理の店



丹南茶寮

春は山菜、夏は川魚、

秋は栗・松茸、冬は山の芋……

丹波の四季をお楽しみ下さい

tannansaryou.com

和食膳所

鮎鍋

すまもん

鮎

鮎

ミニ同窓会・ご商談にお気軽にどうぞ

和食膳所

丹南茶寮

〒669-2214 兵庫県丹波篠山市味間新92-4

☎(079)590-1020

【駐車場】

有り(無料) - 7台まで

【営業時間】定休日翌日は17時より

お昼の御食事

11:30~13:30

夕晩の御食事

17:00~22:00

【定休日】水曜

※第4木曜日(変更になる場合有)

代表 鷺尾浩司



たんばコミュニティエフエム

市民のための！市民による……
放送局です！

FM80.5 MHz

丹波市内で毎日、朝6時から夜10時まで
放送中です。



FM80.5MHz

805たんば

特定非営利活動法人 たんばコミュニティネットワーク

〒669-3461 丹波市氷上町市辺 683

Tel.0795-82-1881 Fax.0795-78-9832 Mail:mail@tanba.info

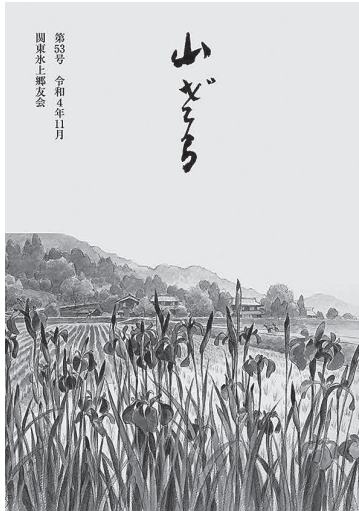
805たんば 公式LINEオープン

リクエスト・メッセージを
LINEから簡単にお送りい
ただけます！

またインターネットラジオ
(サイマル放送)も、すぐに
お聴きいただけます。

下記QRコードから「友だ
ち申請」してくださいね。





会誌「山ざる」53号・年1回発行

関東氷上郷友会

心と心のおつきあい

ふるさと丹波と関東地域の丹波出身者の心をつなぐ

会誌「やまざる」を発行しています

お問い合わせは事務局迄

最近関東以北の地域に越された方、ご連絡下さい。

事務局

〒351-0014 埼玉県朝霞市膝折町 4-4-30

TEL 048-460-1601 FAX 048-460-2397

ホームページ <http://pcc-taiyo.co.jp/hikami>

本誌広告を募集します

次号(第8号)は、2023年10月末に発行を予定しています。

さらに内容を充実させる計画です。

本誌は皆様方のご厚志にて発行費用を賄っております。何卒ご理解を頂いて、協賛下さいますよう、よろしくお願い申し上げます。

広告費：全ページ 15,000円(税込)

半ページ 8,000円(税込)

申し込み先：会報委員長 山口直樹(090-8936-8471)

「賛助金」ご協力をお願い

関西丹波市郷友会では丹波市の青少年の健全な育成のために文化、スポーツ、国際交流、ボランティア活動など様々な分野に支援を行っています。これらの支援活動に必要な資金は皆様方からの賛助金によって賄っています。

今後、支援活動をより一層充実させるために、また1年でも長く継続していくために、下記要領で賛助金のご協力をお願いしています。

つきましては何とぞ趣旨をご賢察いただき、賛助金の振込にご協力、ご支援いただきますようお願い申し上げます。

記

募集要項
法人様 1口 10,000円(3口以上)
個人様 1口 10,000円(1口以上)

振込先
三菱UFJ銀行 たいしょうぼし大正橋支店(店番789)
普通預金 口座番号 0353273
口座名 かんさいたんぼしごうゆうかい関西丹波市郷友会 かいちょう会長 ありたひでお有田秀雄

賛助金と同じ趣旨で、よりご協力をいただきやすい形として下記要領で寄付金でもご協力をいただけます。

記

募集要項
1口 1,000円以上(何口でも結構です)
郵便局から払込
振替口座記号番号 00970-2-95859
加入者名 関西丹波市郷友会
銀行から振込
銀行名 ゆうちょ銀行(金融機関コード9900)
店名 ゼロキョウキョウ〇九九店(店番099)
預金種別 当座預金
口座番号 0095859
口座名 関西丹波市郷友会

問い合わせ先
関西丹波市郷友会事務局
〒669-3309 丹波市柏原町柏原1747-2
山中邦雄方
TEL 090-3623-6903 Fax 0795-73-0198
(柏原自治会館内)

関西丹波市郷友会に入会しませんか

関西丹波市郷友会は、旧氷上郡出身者により明治32年(1899)年に創設され、同郷の人々の親睦と郷土の青少年の育成のために、長年に渡って様々な活動を行ってきました。

しかしながら、時代の変遷とともに、会員の高齢化や会員数の減少など本会を取り巻く状況は大きく変わってきています。この時期に当たり役員会では、伝統に甘んじて惰性的に活動を進めるのではなく、丹波市の将来に真に貢献できる方向で活性化を図る必要があるとの認識のもと、平成28年度より新たな試みを始めました。

今回7号目となった会報誌「たんば」の発刊、年次総会の地元での開催、さらには創設120周年記念「丹波すくすく大賞」の募集・表彰など様々な方策を企画しました。出身者だけでなく、地元在住の方々にも大いに関わっていただいて情報交換したり議論し合うことにより、人口減少などの困難に直面する丹波市の課題解決に向けて、いささかでもお役に立てる会に発展できればと、願っております。

どうか皆様にも加わっていただき、お力添えをくださいますよう、よろしく願い申し上げます。丹波市出身でなくても、何らかのご縁があって丹波に関心を持たれる方ならどなたでも歓迎いたします。

年会費3,000円を納入いただきましたら、年次総会のご案内、会報「たんば」の送付ほか、本会が催すイベントのお知らせ等々をいたします。

次ページの入会申込書にお名前、住所、電話番号、年齢などを明記してお申し込みください。

寄稿を歓迎します 本誌を郵送料ご負担で送ります。

本誌は年1回発行予定です。次号への寄稿を歓迎いたします。

ご希望の方は会報委員長 山口直樹宛て(0795-82-1651)にご連絡ください。

また本誌(無料)をご希望の方は、下記の事務局まで郵送料300円(切手可)を添えてお申し込み下さい。丹波新聞社に来社頂ければ、直接受け取ることも可能です。

たんば 第7号

2022年11月1日発行

発行 関西丹波市郷友会(会長 有田秀雄)

〒669-3309 丹波市柏原町柏原 1747-2

山中 邦雄 方

Tel.090(3623)6903

Fax.0795(73)0198(柏原自治会館内)

印刷 株式会社 丹波新聞社 Tel.0795(72)0530

年 月 日

関西丹波市郷友会入会申込書

ふりがな	
氏名	
〒番号	
現住所	
電話番号	
年齢	歳
出身地 又は縁故地	丹波市 町
紹介者氏名 (会員氏名)	
紹介者がいない場合は、以下にお書き下さい	
丹波市との 関わり	
勤務先	会社名
	住所・電話

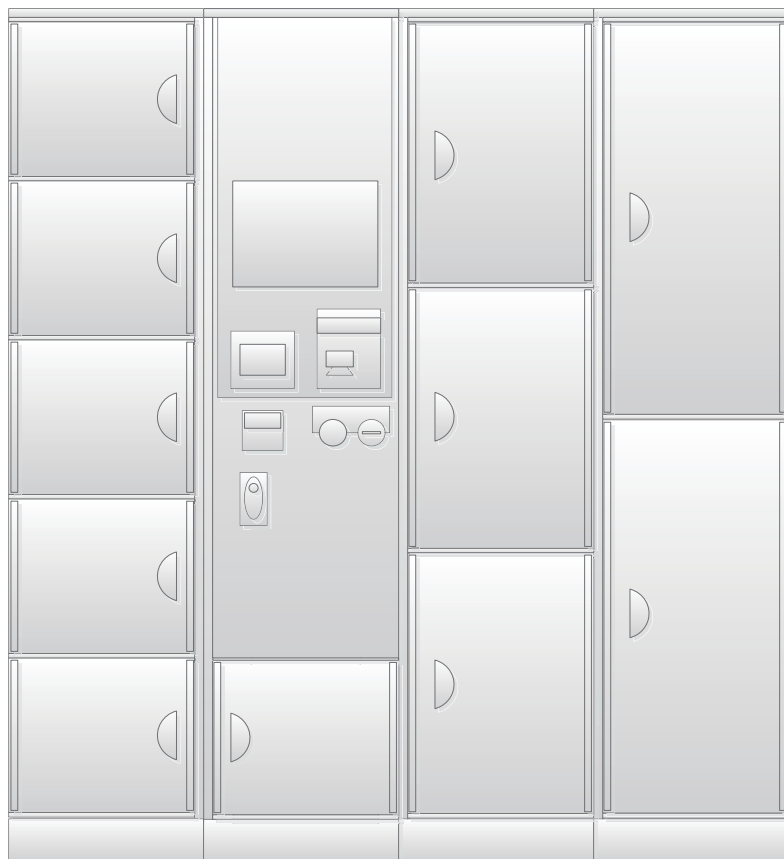
上記の様式をコピーして、FAX または郵送して下さい。
届き次第、入金振込票をお送りします。会費は年3,000円。入会費は不要です。

関西丹波市郷友会 事務局

〒669-3309 丹波市柏原町柏原1747-2 山中邦雄方

電話：090-3623-6903 FAX：0795-73-0198 (柏原自治会館内)

お客様の手荷物保管 スペースを創造して半世紀。



since

1966 → Next

コインロッカーの販売・オペレート
丸十ロッカー株式会社

代表取締役 田 恭子

〒664-0858 兵庫県伊丹市西台 4-1-26

TEL:072-772-2654 FAX:072-770-5553

URL:<http://www.marujulocker.co.jp>

契約先 47 社

設置ロケーション数 555カ所

設置台数 4,600 台

設置口数 16,200 口

2019 年現在



ガンキン株式会社



真に役立つ存在であり続けたい

代表取締役社長 田 貴 晴

代表取締役副社長 水 口 純 二

名 誉 会 長 田 晴 重

【当社製品】

- 冷間引抜鋼管
- 家庭用物置
- 物流パレット
- 立体駐車装置
- 車 止 め